とある女神の上条当麻ー後日談ストーリー

魔界魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある女神の上条当麻ー後日談ストーリー

【Ｎコード】
Ｎ４９４３Ｘ

【作者名】
魔界魔

【あらすじ】
ここは異世界ゲイムギョウカイ、上条当麻はゲイムギョウカイを救った英雄扱いされ守護女神の職に付いた、上条当麻はこの平和になった日常で様々な不幸に巻き込まれる、この作品は前作「とある女神の上条当麻」の続編です。基本的にはシリアスも多分ありますが、できればギャグ多めで行きたいと思います、前作から何も進歩してありませんがよろしくお願いします。ライトノベルを参考にしたオリキャラを使うときもあります、さらに一部の禁書キャラも参加させたいと思います！この小説はメタ・バトル・ギャグ・シリア

ス・適当・カオスで成り立っています！！

あらすじ（前書き）

魔界魔「こんにちは、作者の魔界魔です。」

ブレイブ「コメント係のブレイブ・ザ・ハードだ」

魔界魔「では、あらすじから」

あらすじ

どうも、自分で言って悲しくなるんですけど不幸な高校生、上条当麻です。
どこかのだれかさんの所為で元の世界に戻れないだけじゃ無く元いた世界から存在を抹消された上条当麻です。灼眼のＯャナじゃないですよ、ミステスとかトーチとか全く関係ないですよ。俺が流れ着いた異世界ゲイムギョウカイで４つの大陸を守る囚われていた守護女神の妹ネプギアと出会い、ただネプギアを助けたい一身でゲイムギョウカイ各地を翻弄して結果的に女神を助けた上にいつの間にかゲイムギョウカイを救ったヒーローと英雄扱いされて、おそらく男性初の守護女神にされてしまいました。勘違いしないでくださいみなさん、上条さんは生まれも恐らく普通の人間です。女神なんて非常識な存在ではありません。結果的には女神の腕輪を所持し女体化までするという恥ずかしい体験をしました（男性にとっては）そして私、上条当麻はフリーの守護女神に付きネプギアの家に居候しております。とりあえず平和になったので恐らく当分は命がけの出来事に逢わないと思います…多分…、けど私上条当麻は今まで通り不幸にめげずに日常生活を楽しもうと思います。

簡単にまとめると……

・どっかのだれかの所為で学園都市から存在自体抹消されゲイムギョウカイに飛ばされる
←
・ネプギアと出会う
←
・犯罪組織となんだかんだで激突
←

・女神救出と守護女神の職に付く

・・・・・・・・こういう事になる

上条「くわしくは「とある女神の上条当麻」を見てくれ

ネプギア「新章スタートします」

あらすじ（後書き）

魔界魔「次回からは本編に入ろうと思う」

ブレイブ「今日はこの編でさよならだ」

魔界魔「感想もバンバンお寄せください」

1話：ゴキブリ騒動（前書き）

魔界魔「さっそくだが始まるぞ」

ブレイブ「本当にさっそくだな」

魔界魔「そんな事はどうでもいい、始めるぞ」

1話：ゴキブリ騒動

＜プラネテューヌ＞

ここはプラネテューヌ、ゲイムギョウカイ４大陸の一つでパープルハートが守護する大陸である。三日前に上条当麻が女神救出後、ネプテューヌ達の守護女神の推薦（推薦というより、ほとんど強制）により上条当麻は守護女神になる。（上条は受け入れてもらえないと思っていたが、あっさり…というより上条が守護女神になった事ですごい歓声が上がったという噂）なんだかんだで上条は仕事に追われていた…

当麻「・・・・・・・・・・・・・・・死ぬ・・・」

上条がいきなり負の言葉を吐いたと思うと、上条は倒れて、起き上がろうとしない

当麻「・・・・・・・・・・・・・・・なんでこんな事になったんだ・・・」

上条は回りにある書類の山を見る、見た感じ徹夜しても終わらせられる量ではない

当麻「・・・・・・・なんで守護女神になっちまったんだ…俺・・・最近までは・・・最近までは・・・ただの高校生だったのに・・・いつの間に大統領並みに偉い職業に着いちまったんだ・・・」

上条が仕事の余りの忙しさに愚痴を吐きまくる、とりあえず上条は少しでも仕事を減らそうと顔を上げると・・・・・・

ドガーーーーン！！

突如大きな爆音が響いて部屋の入り口が煙で包まれる、すると一匹の黒い虫が上条の鼻にはりつくすると

???「くたばれーーーーーーーーーー！！！」

女性が全速力で部屋に突っ込んでくる、すると上条の顔をちょうど半分の位置に剣を振り回す

当麻「ぎゃあああああああああああ！」

当麻は叫び声を上げ、剣をギリギリでかわす

???「ちっ・・・逃がしたか・・・」

すると当麻が起き上がって、女性に向かって怒りをぶつける

当麻「いきなりなにすんだよ！ネプテューヌ！」

目の前の女性ネプテューヌ（現在はパープルハート）は剣を下ろすと、上条を真っ直ぐ見つめて、いった

パープルハート「人類の敵が・・・私達の家にも・・・」

当麻「えっ・・・？」

パープルハートがいきなり意味わかんない事を小言で呟くと、今度は普通の人に聞こえる大きさで今度は呟いた

パープルハート「遂に現れたのよ・・・黒いGが・・・」

当麻「黒いGって・・・まさかゴキブリ？」

すると上条は呆れたようにパープルハートに言い放つ

当麻「ゴキブリなんて・・・スプレーで十分じゃねぇか」

するとパープルハートは収まらない怒りを上条にぶつけるようにいった

パープルハート「あのゴキブリはね・・・冷蔵庫に入れてある・・・予約がいっぱいで一年で一つ食べれるのかもわからない極上プリンをね・・・あのゴキブリに食われたのよ・・・」

すると上条がいきなり立ち上がったのだと思うと上条も静かに言い放つ

当麻「それは・・・・・・本当か・・・・・・」

すると上条は静かに不気味な笑いをする。

当麻「・・・・・・・・・プロセッサユニット・・・装着・・・」

するとイマジンハートに変身して、ブレイブソードを構える

イマジンハート「人類の敵を抹殺するわよ！！ネプテューヌ！」

パープルハート「極上プリンの敵を討つ！」

すると二人はゴキブリを探すために家中を徘徊し始める。どうやら極上プリンは三つあったらしく（当麻、ネプギア、ネプテューヌの分一つずつ）それをゴキにすべて食い荒らされたらしい。

数時間後…

ネプギア「ただいま～」

ネプギアが帰ってきた、ネプギアは買い物に数時間前に出かけて、ちょうど今戻ってきた所だった

ネプギア「お姉ちゃん～どこ～」

ネプギアが買い物袋を持って、リビングに向かうと・・・

ネプギア「・・・・・何これ・・・」

ネプギアが見た光景はボロボロのリビングだった、しかも壁にひびが入っている

ネプギア「一体なにが・・・」

するといきなりゴキブリがリビングに逃げてきたようにカサカサと動くすると・・・

イマジンハート「見つけた！喰らえ！波動斬！」

イマジンハートが廊下から現れ、剣から衝撃波をゴキブリに放つ、しかし衝撃波は避けられ、壁に命中し壁が壊れた。

ネプギア「当麻さん！何してるんですか？あとなんで変身してるんですか？」

ネプギアがイマジンハートに何してるのかと問いかけると

イマジンハート「人類の敵をこの家から抹殺してるの！」

ネプギア「・・・・・・はい？」

ネプギアがいきなり何言っているのか分からない様な顔をする

パープルハート「当麻！見つけたわよ！」

イマジンハート「本当ネプテューヌ！今行くわよ」

すると声がした方にイマジンハートは走り出す、すると向こうから爆音やら、轟音やらが響いてくる

ネプギア「・・・・・・何か分からないけど早く止めないと、家が壊されるかもしれない、ゴキブリを早く仕留めないと・・・」

するとネプギアが殺虫スプレーを持ってゴキブリを掃除しに行く

結果、二時間後にネプギアがスプレーでゴキブリを仕留める。この二時間で家の3分の2が破壊されプリンについてはベールから余ったらしくおすそ分けしてもらった、ついでに上条は泣きながら徹夜して仕事を終わらせた。

～おまけ～

＜ラステイション＞

上条「やっぱりここだと仕事がはかどる・・・」

現在、上条はラステイションのノワールの家で仕事をしていた

ノワール「・・・・・・なんかボロボロだけど何かあったの？」

ノワールはボロボロの上条を見て上条に問いかける

当麻「・・・ネプテューヌの家でいつも通り仕事をしていたら、うるさかったりなんだりで全然仕事が進まなくて、こうして静かそうなお前の家に来る途中・・・」

ノワール「来る途中？」

ノワールが興味深そうに上条に続きを問いかけると

当麻「まずプラネテューヌを出る前に、玄関で車で跳ねられそうになって、喧嘩に巻き込まれて、ラステイションに着いた直後、変な逆恨みぶっ掛けられて、犯罪組織の残党に襲われたり・・・」

ノワール「・・・あんたよくこのゲイムギョウカイで生き残れたわね・・・」

ノワールは上条に不幸に同情では無く、呆れる

ノワール「でも私の所じゃ無くてもよかったんじゃ無いの？」

ノワールが聞くと、上条は仕事をこなしながら返答する

上条「・・・ベールの所に行くと、おそらくゲームに付き合わされて仕事どころじゃ無いと思うし・・・ブランはなんか怖い」

ノワール「ああ・・・・・・そう・・・」

するとノワールが呆れて溜め息を吐くと

ノワール「まあ・・・でもとりあえずちゃんと仕事するもの同士がんばりましょ」

当麻「ああ、よろしくな」

上条はノワールの所で仕事をするようになってから、はかどるようになったらしい

やっぱり上条は異世界に来ても不幸なのは変わらなかった

〜上条の守護女神についての書類〜

上条当麻は犯罪組織壊滅の功績と女神救出の功績により４大陸を治める守護女神により上条当麻を守護女神に任命する。治める大陸はフリーで現在上条がいる大陸にさらに守護の力が働く様になる。基本的に守護の力は守護女神が存在しているだけで、力は働く。また守護女神の仕事は書類を片付るのが仕事でもある。また上条当麻は天界に立ち入る事ができる。プラネテューヌ、ラステイション、リーンボックス、ルウィーの守護女神は上条の守護女神任命を許可する。

1話：ゴキブリ騒動（後書き）

魔界魔「ゴキブリ一匹でネプ姉妹の家が半壊しました」

ブレイブ「・・・当麻もゴキブリ退治にノリノリだったよな」

魔界魔「とりあえず、今回はこれで終わりです」

2話：ネプ姉妹の新家調査（前書き）

魔界魔「今度は上条とネプ姉妹が新家の視察をします。」

ブレイブ「壊したのは、当麻とネプテューヌだけどな」

魔界魔「それでは、始まります」

2話：ネプ姉妹の新家調査

＜プラネテューヌ＞

前回の件（ゴキブリ騒動）にてたかがゴキブリ一匹によって家が3分の2半壊してしまったネプ姉妹の家は現在、大工さんに頼んでもらって直してもらった。だが当麻は頼んだ業者が名前的に信用できなかった為、現在、修理した家の視察をネプ兄弟と一緒にしていた。

当麻「そうゆうわけで……家を視察したいと思う」

ネプテューヌ「そうゆうわけってどうゆうわけ？」

上条「くわしくは上の文章を……」

ネプギア「メタ発言はだめです、当麻さん」

上条が放ったメタ発言にツッコミを入れるネプギア

ネプギア「でもなんでわざわざ視察なんか…」

ネプギアが上条に問う、すると上条は表情を変えずに返答する。

上条「……この家直して貰った、大工には悪いんだけど…欠陥住宅とかにされていたら困るしな」

ネプギア「たしかに頼んだ業者の名前があやしかったですしね」

ついでにネプ姉妹の頼んだ業者の名前はアヤシヤ大工という、名前からしてあやしい業者だった

ネプテューヌ「もしかしたら余計なオプションを入れられているかもしれないよ」

ネプギア「…お姉ちゃんも信用して無かったんだね、あの大工さん」

ネプギアは疲れたように肩を落し、ネプギアも家の中に入っていく

＜リビング＞

ここはネプ達姉妹のリビングで半壊する前と比べて特に何も変わってないように見える

ネプギア「特には変わってないようだけど…ん？」

ネプギアが壁をよく見ると、赤いスイッチがある

ネプギア「・・・・・・押してみようかな・・・」

こういう物を見ると押したくなるのが、人間である。ネプギアが悩んでいると、今度はネプテューヌがやって来た

ネプテューヌ「どうしたのネプギア、こんな所で突っ立って・・・そういえばこのスイッチ何？」

ネプテューヌが赤いスイッチを見つける。

ネプテューヌ「とりあえず押してみようかな～えい！」

ネプテューヌが赤いスイッチを押す、すると壁が開かれ、階段が出現する。

ネプギア「何？この階段？」

ネプギアがいきなり出てきた階段に興味を示すと、今度は上条がやって来た。

上条「どうしたネプギア・・・ってなんだこの階段！」

上条がそこには無かった階段を見て、驚く

ネプギア「壁にある、赤いスイッチを押したら・・・」

上条「赤いスイッチ？この壁にそんなもんあったっけ・・・」

ネプテューヌ「おそらく余計なオプションの一種だと思うけど・・・」

すると上条が溜め息を漏らして、呆れながら言い放った。

上条「・・・・・・一体なんだあの大工業者・・・」

すると上条が顔を上げて、とりあえずという風に言葉を放つ

上条「・・・一旦降りてみようぜ、何か掘り出し物があるかもしれ

ないだろ」

ネプギア「それって・・・財宝とか・・・」

ネプテューヌ「宝石とか・・・」

上条「まぁ、とりあえず降りてみようぜ」

ネプ姉妹と上条当麻は、謎の階段を下りていく。

＜謎の部屋＞

ネプ姉妹と上条が階段を下りると、そこには少し大きなここだけ木造の部屋で何も置いてない部屋だったまさに物置部屋には打ってつけの部屋だ

ネプギア「ここだけ木造なんですね～すごい・・・」

上条「結局何も無かったな・・・」

ネプテューヌ「それじゃここは物置部屋にしよう！」

そうゆう訳でこの部屋は物置部屋になった

＜上条当麻の自室＞

リビングと謎の部屋もとい物置部屋をじっくり視察すると余計なオプションが２つ見つかったが、とりあえず無視する事にして、今度

は上条の自室を見ることに

上条「ネプテューヌとネプギアに借りている、俺の部屋だな」

ネプギア「ここも特にはなにも変わってないですね」

ここも特には何もかわっていなかったが、リビングに余計なオプションを3つも付けられたくらいだからこの部屋にオプションが最低一つぐらい付けられてもおかしくは無いだろう。

上条「とりあえず、じっくり見てみよう、多分オプションを一つ付けられてると思う」

ネプテューヌ「見つかったよ～」

上条「早いな！見つけるの！」

上条がオプションを数秒で見つけた、ネプテューヌに驚く

ネプギア「一体今度はどんな仕掛けが・・・」

ネプギアと上条がネプテューヌの所に行くと、上条がいつも仕事に使っている机に青いスイッチが付いてる

上条「今度は青いスイッチか・・・」

さっきは赤いスイッチだったから、今度は青いスイッチと来ると、なぜか不安を感じる

ネプテューヌ「とりあえず押してみよう」

上条「ちょ・・・・・・待って・・・・」

上条が止めようとするが、ネプテューヌが先にスイッチを押してしまう

ネプギア「今度はいったい何が・・・・」

ネプギアが不安を感じながらも何が起きるのか、内心ワクワクしてると・・・

ガシャン！！！

扉が鉄格子によって封鎖され、閉じ込められた

上条「今度はいったいなんだよ・・・・」

ネプギア「閉じ込められましたけど・・・・」

ネプテューヌ「やっぱりあの業者だいじょうぶだったのかな・・・・」

上条が呆れ、ネプギアが心配して、ネプテューヌは業者に疑惑を感じてしまう。すると天井が開き穴ができる

上条「まさか・・・・・・この天井からゴキブリが大量に降ってくるとかないよな」

ネプギア「さすがにそれは・・・でももしそうだとしたら、今度は家が完全に消え去りますけど・・・・」

ネプテューヌ「私もゴキは無いと思うな～」

三人がそれぞれの考えを口に出すと、その直後、悲劇が起きる。

グサ！

上条「えッ・・・・・・・・・・・・・」

天井の穴から一本の剣がじゅうたんに突き刺さる、すると今度は雨のように剣や槍が降り注ぐ

上条、ネプギア、ネプテューヌ「ぎゃああ～～～～～～死ぬ～～～～～～～～～～～～！！！！！！」

ネプテューヌ「あ、そこに三つだけヘルメットが！」

上条「そんなんで変わりになるかーーーー！何とかしないと死ぬ死ぬ！！」

ネプギア「とりあえず、よけましょう！このままだと三人共死んでしまいます！！とにかく逃げましょう！！」

数時間後…

上条の部屋には無数の剣がじゅうたんに突き刺さっていた、上条とネプ姉妹はなんとか逃げ延びて、無傷だった

上条「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・あの業者・・・一体何の

ためにこんなオプションを・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ネプギア「なんとか・・・・・・・生き延びましたね・・・はぁはぁ・・・」

ネプテューヌ「私も寿命が3年間程縮んだ気がしたよ……」

三人が息を荒くして、言葉を漏らした

上条「この部屋は危険だ、とりあえず違う部屋に行こう」

上条とネプ姉妹は当麻の自室から退散した。

＜台所＞

上条「……今度は台所か、さすがにここにはあやしいオプションはついて無いと思うけど」

ネプギア「…だといいですね。」

ネプテューヌ「でもやっぱり安心できないよ」

今度、上条とネプ姉妹が来たのは、キッチンである。さすがに場所に余計なオプションは付いて無いと深くから思う当麻だったが、やっぱり信用できなかった。

当麻「……今度は黄色のスイッチか…」

当麻がキッチンの調理場を見ると、赤そして青と来て黄色のスイッチがあった。

ネプテューヌ「今度は一体、何が起きるんだろう…」

ネプギア「でもやっぱり押したくないよ…」

当麻「……とりあえず押してみようぜ」

ネプギアはスイッチを恐れ始めたが、それでもどんな機能があるのか、確認しないと今後危ないのでとりあえず上条は押してみる事にする。すると……

当麻・ネプギア・ネプテューヌ「「「……え？」」」

三人が居た所の床がいきなり開いた、そして三人は開いた穴の中に落ちていく。

＜上条の自室＞

上条・ネプ姉妹「「「痛っ！」」」

三人はまた上条の自室に落されて戻されたらしい。

上条当麻「なんで、俺の部屋に繋がってんだ…あのキッチン…」

上条が起き上がろうとすると、上条の手の平が何かに触れた、しかし上条はそれに気づかずに手に力を入れる。すると……

ポチ！

ネプギア「当麻さん、なんですか？今の音…」

ネプギアが起き上がると、上条の手の平に青い有る物が見える、読者の諸君はおわかりだろうか、上条の部屋にある。青い物を…

上条「まさか……」

上条が自分の手の甲を上げて、下を見ると、あの恐怖の青いスイッチが

ネプテューヌ「どうしたの……痛たたたた…」

今度はネプテューヌも起き上がると、また上条の部屋の鉄格子が閉まる、するとまた壁の天井が開いた

ネプテューヌ「……また剣が落ちてくるの……」

上条「冷静に分析してる場合か！とにかく…逃げるぞ！」

上条がまた逃げようとすると、何かが天井から落ちて来た、しかし今度落ちて来たのは剣では無かった

上条「この黒い生物は……まさか…」

すると今度は大量にゴキブリが降ってきた、普通の人から見ると、地獄絵図にしか見えない量をすると。

ネプテューヌ「黒いGが出て来た…今こそプリンの恨みを晴らす時が来た！」

上条「今ここにいるゴキ全員を…一匹の残らず灰にする！」

ネプギア「ちょっと待って！それじゃ今度は家が完全に…」

しかしネプギアの声は届かず、上条とネプテューヌは女神に変身して、大技を連続で放つ

パープルハート「ネプテューンブレイク！！」
イマジンハート「大次元断！」
パープルハート「竜巻旋風殺！」
イマジンハート「烈火爆炎拳！」

パープルハート・イマジンハート「「燃えて灰になれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」」

二人の女神の活躍によって、ゴキブリは全滅したが同時に家も全滅した。さらに彼女らの逆鱗に触れたアヤシヤ大工は二人の女神の手によって潰されたのはいうまでも無い、またこの二日後に業者に頼んで家を再建してもらった

～短編集（テイ〇ズのチャットをイメージしてください）～

＜甘い物＞

ネプギア「当麻さん、甘い物って好きですか？」

当麻「う～ん…俺は普通に好きだけど…」

ネプギア「じゃ…これ食べてもらえますか」

当麻「これはネプテューヌの大事にしてたケーキじゃ……」

ネプギア「今、お姉ちゃんが虫歯で食べられないので食べてください」

当麻「でもいいのか、勝手に食べて怒ったりは…」

ネプギア「お姉ちゃんなら無理やりにでも歯医者に連れて行くから、甘い物はしばらくお姉ちゃんには厳禁でお願いします。」

当麻「……」

ネプギア「後、お留守番よろしくお願いしますね」

ネプギアが退室する。

当麻「現実は残酷だな……ネプテューヌ…」

当麻はどこかでネプテューヌの断末魔が聞こえた気がした

2話：ネプ姉妹の新家調査（後書き）

魔界魔「今回はイマジンハートがディス〇イアの技を使用しました。」

ブレイブ「今度は家が完全に破壊されたな」

魔界魔「それでは今回はこれで終わりです。」

3話：上条当麻の不幸な一日：午前（前書き）

魔界魔「今回はオリキャラとの戦闘があります。」

ブレイブ「今回の被害者はやはり・・・」

魔界魔「ツンツン頭の少年に決まってるだろ、では始めます」

3話：上条当麻の不幸な一日：午前

いつも通りの朝を迎えたプラネテューヌ、そしていつも通りに起きる上条当麻とネプ姉妹だったが…超絶不幸な高校生の上条当麻に平和で幸運な一日がある訳が無く、いつも通りに事件が起きる…

上条当麻「久し振りに早起きしたな～それにこんな平和な朝を何時以来だろうか…」

上条は久し振りに早起きをしたらしく、なぜか起きてすぐに感動に浸り始めた。

当麻「とりあえず早起きしたし…ポスト見てから朝御飯作らないと…」

ついでにネプ姉妹のご飯と家事は主に上条当麻がしている。ご飯に関してはよくネプギアが手伝ってくれる為、学園都市に居た頃と比べれば、生活はかなり安定していた。

当麻「とりあえず最初はポストだな」

当麻がパジャマのまま、靴を履いて外にあるポストからいつも通り新聞やらチラシやらを回収するだが今日ポストに入っていたのは、明らかに現代では見かけない様な古風の手紙のような物が入っていた。

当麻「この手紙は明らかに怪しいんだけど……一応読んでみるかな…」

当麻が手紙を開き、もう一枚入っていた紙を開くと、そこには信じられない内容が書いてあった。

数時間後………

ネプギア「それで……この手紙は一体…」

ネプテューヌ「それでどんな内容だったの」

ネプ姉妹がこの数時間の間に起床してきて、当麻の手紙に興味深深で食いついてきた。

当麻「……それが…」

当麻が手紙を開いて見せると、そこには丁寧にこう書いてあった

～～～上条当麻殿～～～～～

いきなりこんな手紙を送り付けては申し訳無いとは思いますが、上条当麻殿がこのゲイム業界を救い犯罪組織をもたった一人で打破したとの噂を聞き、この様な手紙をあなたにお送りしました。私は上条当麻殿に決闘を申し込みます、時間、場所は午前１０：００よりラステイラステイションの無人工業地域、時間は厳守でお願いします。

～～～～～～～～～～～～～～～

ネプギア「決闘状ですね」

ネプテューヌ「決闘状だね」

当麻「……それしか言うことが無いのか…」

つまり上条は決闘を申し込まれたという事、しかも場所はラスティションである。正直言って、後少しで家を出ないと間に合わない。

当麻「…とりあえずご飯食ってから考えるとするか…」

上条は朝御飯をたいらげて、考えた結果は結局、決闘を受けるためにラスティションに向かった

＜ラスティション＞

当麻「いわれた通りに来たけど……まだいないか…」

少し早く出てしまったのか、敵の姿はまだ見えない、後はネプギアとネプテューヌがおもしろそうだからと上条の決闘についてきた、本心ではネプテューヌは上条がどんな戦い方をするのか興味あるため、ネプギアは心配だからという理由だろう。

当麻「手紙に時間厳守って書いてあったから…さすがに本人が遅れる事は…ん」

上条が言葉を漏らすと、遠くから青いショートヘアーの子を見つける、おそらくあの子だろう、だが上条が驚いたのはその青い髪の子と一緒に居る、黒い髪のツインテールの明らかに見覚えのある子だ

った。

ノワール「あら、だれかと思えば当麻とネプテューヌじゃない」

ラステイションの女神であるノワールだった

ネプテューヌ「あれ？ノワールなんでここに……」

ネプテューヌがノワールに聞く

ノワール「この子が道に迷っていたから、無人工業地域を教えてっていうからさ、道案内をしてたの」

この子というのは青いショートヘアーの子である。すると青いショートヘアーの子が上条に近づくと

？？？「約束通り、来てくれましたね…」

当麻「……挑戦状を送って来たのは…えっと…お前でいいんだよな？」

？？？「はい、あなたに挑戦状を送ったのは私です。」

するとまったく状況がわからない黒髪ツインテールの女神ノワールはネプギアに聞く

ノワール「ネプテューヌ、これ一体どうゆう状況？」

ネプギア「ノワールさん、実はですね……」

ネプギアがノワールに事情説明中……

ノワール「なるほど、あの子が当麻に決闘状を送りこんで…」

当麻「ラステイションで迷って、ノワールに案内してもらったって事か…」

???「はい、そうです」

とりあえず、細かい事は面倒なのでさっさと決闘を終わらせようと当麻は戦闘態勢を取る

当麻「…とりあえず始めようぜ、決闘」

???「はい、はじめましょう、私の方は準備は満タンです。」

当麻「そうだ、お前の名前は?」

???「私の名前はシアンです。よろしくお願いします。」

当麻「よろしくなシアン、それじゃ始めようぜ」

シアンも戦闘態勢に入る、そしてその後ろでは応援の声が…

ネプテューヌ「あのシアンって子…どれくらい強いんだろう…」

ネプギア「当麻さん、がんばって〜」

ノワール「これは見物ね」

ネプテューヌはシアンを警戒しネプギアは上条を応援、ノワールは当麻とシアンの戦いに興味があるようだ

シアン「決闘を始めます、私から…ボルトクラッシャー！！」

シアンが決闘開始の宣言をし、さっそく魔法を放つ、シアンの杖から巨大な電流が放たれる

当麻「そんな一撃効かねぇよ！」

当麻が右手を前に出すと、巨大な電流は右手に触れると、一瞬の内に電撃が跡形も無く消滅した。

シアン「えっ…一体何が…？」

シアンは魔法が右手一つに打ち消された事に驚く、初めて上条の幻想殺しを見たネプテューヌやノワールは驚きを隠せなかった

シアン「だったら…重力波動（グラビティアジョン）！」

すると上条の体が地面に叩きつけられる、おそらく重力を重くする魔法なのだろう

上条「（体の重力を重くする魔法か！だったら…）」

当麻が右手で自分の体に触れると、上条の体から重力の波動が消え上条は体を起こす

シアン「あの右手…一体…ならば…」

シアンが杖を上に掲げると、シアンは呪文を唱える

シアン「大地鳴動波動（ガイアバースト）！」

するとシアンのいる場所も含めて、地面に大きな亀裂が走り、地面が大きく盛り上がる、上条は盛り上がった地面に態勢を崩す

上条「（このままじゃやばい！、何か方法は…？」

しかし上条が考えるよりもシアンの魔法を放つ方が早かった

シアン「今です！重力波動（グラビティアジョン）！」

するとシアンがさっきと同じ重力の魔法を放つすると、また上条の体が鉛の様に重くなる

上条「（やばい…この態勢じゃ…）」

この態勢では、おそらく魔法が放たれた時に上条に右手が間に合わない態勢だった。しかしシアンはこの隙を逃さずに魔法を放つ

シアン「これで終わりです！アトミックボム！」

するとシアンの杖から赤い球体が放たれる、しかし上条は右手を構える態勢などが間に合わず、魔法が発動し大爆発を起こす、大爆発が晴れると、黒い煙が立ち上る…まだ煙の量が多く、生存は確認できなかった。

シアン「…これで私の勝ちです」

シアンがおそらくこれで勝っただろうと確信する、おそらくあの大爆発じゃ、生存はしても意識は無い筈そう思っていた…が…

当麻「いや……俺の勝ちだよ…シアン」

シアン「！？」

すると上条が黒い煙の中からすこし黒い学生服と一緒に出てくる、それにシアンが反応できずに杖で防ぐだが……

上条「その杖さえ破壊しちまえば！」

シアン「しまった！」

上条はシアンと決着を付けるためには最初からシアンを本気で倒しに来たのでは無く、シアンの杖を破壊して決着を付けようとしていた、その為上条はシアンが杖を前に出すのをずっと待っていたのだ

パキン！！

上条が右手で杖に触れると、杖の先端の魔法石が砕け散った。杖が使えなくなったシアンはその場で膝をついた

当麻「・・・シアン、俺の勝ちだ・・・」

シアン「そんな・・・どうして・・・たしかにあの時・・・」

あの時というのはおそらく、上条が重力波動を受けて動けない時に魔法をモロに直撃して、なぜ無事なのかという点だろう

当麻「シアン、俺は魔法が直撃した時、一瞬だけ女神に変身してま

た元に戻った、だからダメージが少なかった・・・という訳だ」
つまり上条は魔法を直撃する寸前に女神化でダメージを抑え、また
すぐに元に戻ったという訳だ
シアン「・・・・・私の負けです。」
上条「でもやっぱりすごいなシアン、本当に負けそうだったよ」
シアンは負けを認めたようだが、上条もシアンを認めたようだ
シアン「・・・・・あの・・・当麻さん・・・」
上条「ん、どうした？シアン」
するとシアンが姿勢を変え、上条に土下座した。
シアン「当麻さん・・・いや師匠、私を弟子にしてください！」
当麻「・・・・・・・・・・・・え、今なんて・・・」
上条はシアンに聞き返すが、やっぱり答えは当麻の思っていた通り
だった
シアン「何度でもいいます！師匠、弟子にしてください！」
全員「えええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええ！！！！！！」
全員が叫んだ、しかもかなり大きな声で

ネプギア「まさか日本一さん以外にも・・・」

ネプテューヌ「・・・当麻って人を惹きつける強さでもあるのかな・・・」

ノワール「まさかこんな結末になるなんて・・・」

上記の三人は驚いている、その頃上条は真剣に考える

シアン「お願いします、師匠！私師匠の元で強さを学びたいんです！」

当麻「・・・・・・いいけど・・・俺やっぱり教えてあげる事なんて・・・」

シアン「私は師匠と共に戦い、強さを学びたいと思います、よろしくお願いします！」

シアンが上条に弟子第二号になった

ネプギア「・・・・・・これからどんどん増えていくのかな・・・」

当麻「・・・・・・不幸だ」

こうして上条の不幸な一日の内半分が過ぎていった。

～～～～～短編集～～～～～

＜甘い物２＞

ネプテューヌ「ううう・・・痛かった・・・歯医者・・・」

上条「でもこれで甘い物も食べれるだろ、よかったなネプテューヌ」

ネプテューヌ「でもネプギアが当分は甘い物を控えてって・・・」

上条「まぁ・・・甘い物食べ過ぎて、虫歯になったんだから、それは妥当な処置じゃ無いのかな・・・」

ネプテューヌ「・・・・・・しかも今度は食欲も控えてって言われたし・・・」

上条「今度？それじゃ・・・虫歯になったのは一回だけじゃ無いのか？」

ネプテューヌ「・・・甘い物食べ過ぎて・・・５回・・・」

上条「・・・・・・ネプテューヌは一生甘い物を食わない方がいいかもしれない・・・」

＜幻想殺しの役立つ使い道？＞

ノワール「当麻、その右手って幻想殺しっていうんでしょ？」

当麻「そうだけど・・・それがどうかしたのか？」

ノワール「それって何でも異能であればすべての力を打ち消すのよね？」

当麻「それもあってるけど・・・」

ノワール「それじゃその右手の力を貸してくれない？」

当麻「別にいいけど・・・一体なんで・・・」

ノワール「いや、新しい技の実験台に・・・」

当麻「逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ（逃亡）」

ノワール「ちょっと待って！逃がさないわよ！（追跡）」

＜家事マスター当麻＞

ネプギア「当麻さん、このかぼちゃ切るの手伝ってくれませんか？」

当麻「ああ、このかぼちゃか？」

ネプテューヌ「当麻～急がしいんだけど・・・買い物行ってもらえる？」

当麻「わかった、これが終わったら、行ってくる」

数分後・・・

ネプギア「当麻さんって家事なんでもできますね」

当麻「小学校の時から一人暮らしだったからな、家事は自然に身についた」

ネプテューヌ「でも家事ができる。男っていいよね」

ネプギア「本当だね、お姉ちゃん、家事に関しては当麻さんが来てからかなり楽になったし・・・」

当麻「居候してる身だからな、どこぞの腹ペコシスターじゃ無いし、家事くらいは手伝うぞ」

ネプギア「腹ペコ・・・？」

ネプテューヌ「シスター・・・？」

〜〜〜オリキャラ説明〜〜〜

シアン
性別：女性
目の色：黄色
容姿：ＲＰＧ（ロープレワールド）のレヴィアの髪を緑にした姿
性格：素直で優しいが戦いでは少し強気
職業：放浪魔法士
レベル：２２００
戦闘能力：ＢＢＢ
武器：碧拍の杖（戦闘で上条に壊される）
備考：ルウィー出身の魔法使いで主に普通の上級魔法と波動魔法と

いう魔法を使って戦う、旅人で自由気ままにクエストで金を稼いでいたが、犯罪組織を単体で潰し（シアン本人はそう思っている）人間の身にして守護女神になった上条当麻に興味を持ち、果たし状を送る。そして上条当麻に敗北し彼の強さとは違うまた別の強さにほれ込んで弟子入りする。魔法での戦闘能力は高いが近接では相性がかなり悪く、現在は杖を幻想殺しによって壊されてしまった為、現在の戦闘能力は低い

能力：魔法操作（一定の魔法をコントロールできる）

波動操作（波動魔法を自由にコントロールできる、彼女だけのスキル）

使用魔法：ボルトクラッシャー

電撃を一点に集中し放つ技、上級魔法でもある。

重力波動（グラビティジョン）

相手に見えないは波動を当て、相手の重力を重くする、ただし効果は単体

大地鳴動波動（ガイアバースト）

大地に直接魔法を放ち、大地に攻撃を与える技で相手の体制を崩せる上に周囲に有効な技

アトミックボム

ＦＦをモチーフにした業でほとんどメテオと同じ、上級魔法

3話：上条当麻の不幸な一日：午前（後書き）

魔界魔「オリキャラとの戦闘は無事、当麻が勝ちましたね」

ブレイブ「あいつはそう簡単に負けるやつでは無い」

魔界魔「今回はこれで終わりです。」

４話：上条当麻の不幸な一日：午後（前書き）

魔界魔「今回はちょっと下手だと自分は思います」

ブレイブ「自分に自信を持てよ・・・」

魔界魔「それでは、始まります。」

4話：上条当麻の不幸な一日：午後

午前中の内にシアンという相手に挑戦状を叩きつけられる上条当麻であった。そしてシアンと午前中に内に決闘した上条当麻はネプ姉妹の家でまったりしていた

当麻「…午前中に決闘して疲れたからな…午後はせめてゆっくり休みたい・・・」

上条は不幸をすでに自覚している、なので上条は午後は何事も無く一日を終えるなんて、考えてなかった。

当麻「・・・頼むから・・・今日の午後だけはゆっくりしたい・・・」

当麻は天に祈る、しかしその希望はすぐに打ち砕かれるのを知らずに・・・

バタン！！

思いっきり、当麻の自室の扉が開かれたと思うと、入ってきたのはピンク髪の幼い容姿でその正体はここプラネテューヌの女神様である。

ネプテューヌ「当麻いる～」

当麻「・・・・・・ネプテューヌか・・・どうした、また不幸な事を持ち込んできたんじゃ・・・」

当麻はネプテューヌがここに来たのだから何かあるのでは無いかと心配する。

ネプテューヌ「いや、少しお使いを頼みたくて・・・」

当麻「おつかい？」

おつかいと用件に耳を傾ける当麻

ネプテューヌ「ちょっと・・・リーンボックスにおつかいに・・・」

当麻「リーンボックス？」

当麻は少し驚く、おつかいなんて材料なんてここの大陸で十分買い物できるし、大抵な物はプラネテューヌに置いてある、そして内心ではリーンボックスのおつかいに行くのに不信感を感じてしまう上条当麻

ネプテューヌ「ベールに借りたゲームを返しにいってほしいんだけど・・・」

当麻「ベールに？」

ベールというのは、リーンボックスの女神でお嬢様であり、そして廃人寸前・・・いや廃人レベルのゲーマでもある。

ネプテューヌ「これからネプギアと一緒に出かけるんだ、頼めるかな・・・」

当麻「別にいいけど・・・ベールの所でいいんだよな」

ネプテューヌ「そうそう、じゃ後よろしくね！」

バタン！

そうするとネプテューヌはまた大きく扉を閉めて行ってしまった、取り残された上条当麻は溜め息を漏らす

当麻「・・・しかたがない、行ってくるかリーンボックスに」

そうゆう訳で上条当麻はリーンボックスに行くことになった

＜リーンボックス＞

ここはリーンボックス、中世を沸騰させるような緑が一番多い場所である、そして上記の通りにベールがおさめる大陸でもある。

当麻「相変わらずここは空気が新鮮だな～」

当麻がリーンボックスに来てそうそうに新鮮な外の空気を吸っていると、上条は現在時刻を手持ちの腕時計でチェックする

当麻「もう午後3時か、早くベールにゲーム返して戻らないとな」

とりあえず上条当麻はベールの所へ向かう事にする。

数時間後・・・

当麻「迷ったーーーーーーーーーーーー！！！！！」

当麻はこの広大な大地、リーンボックスで見事に迷ってしまった。しかも町のど真ん中で

当麻「町の中心で迷うなんて・・・高校生になって恥ずかしくないのか・・・俺」

当麻の頭にどんどんネガティブな思考がどんどん頭によぎる、このままだと完全に自信喪失してしまいそうな時に上条には救いの手が差し伸べられた・・・

？？？「こんな所で何してるの？」

当麻「えっ？」

当麻が声をした方を振り向くと、そこには見覚えのある少女がいた

当麻「アイエフ！こんな所で何を？」

アイエフ「それはこっちの台詞、でこんな町のど真ん中で何をしてるの？」

当麻「いや・・・これはだな・・・」

当麻がアイエフに事情説明中・・・・・・

アイエフ「へぇ・・・それでネプテューヌに頼まれてゲーム一本返す為にこんな遠い所に・・・そして迷子に・・」

当麻「おっしゃる通りでございます・・・」

当麻は心の中では泣いてもいい程のダメージをすでに受けていた、自分の知り合いに自分がいい年して迷子になったなんて、とてもではないが恥ずかしく言えないだろう

アイエフ「でもそれなら丁度いいわ、私もグリーンハート様の所に行く所だったの」

当麻「アイエフさん、ありがとうございます、そしてこの事は誰にも言わないでください・・・」

アイエフ「・・・・・今回の件は見なかった事にして置くわ・・・」

とりあえずアイエフと当麻は一緒にベールの所に行く事にした

＜ベールのお屋敷＞

当麻「すごいでかいな～さすがお嬢様って所か・・・」

当麻はベールの豪邸に関心していた。

アイエフ「とりあえず行きましょ」

とりあえずアイエフと当麻はベールのいる部屋に・・・

コンコン！

アイエフ「失礼します」

当麻「お・・・お邪魔しま～す」

二人が部屋に入ると、そこには黄色の髪でいかにも女神様のような女性がいた

ベール「ようやく来たのね、いらっしゃいあいちゃん・・・・・・あら？」

ベールが後ろにいる当麻にようやく気づく

ベール「当麻さんじゃないですか、一体このような遠い所に何故？」

とりあえず当麻はポケットに入れていた、ゲームカセットを渡す

当麻「ネプテューヌにお前に借りてたゲームソフトを返してきてってお遣いを頼まれたんだ」

ベール「たかがゲームカセット一本の為にここまで、ご迷惑をおかけしましたわね」

ベールは申し訳なさそうに言うが、お節介焼き当麻はぜんぜん気にしてないようだ

アイエフ「あとグリーンハート様、この荷物を」

アイエフがベールに荷物を渡す

ベール「ありがとあいちゃん、後せっかく来てもらったんだし紅茶

でも・・・」

当麻「ああ、遠慮しまくていいよ、直ぐに戻らないといけないし・・・」

現在時刻は午後４時３０分ともう夕方に近く、そろそろ帰んないとやばい気がしたからだ

当麻「それと気になったんだが・・・ベール目にクマできて無いか？」

当麻がベールをよく見ると、クマができているのはわかる。

ベール「これは昨日ゲームのやり過ぎで・・・・・・」

するとアイエフがグリーンハートを心配するように

アイエフ「だいじょうぶですか、グリーンハート様、いくらゲーム好きとは言えさすがに寝なさすぎでは・・・」

当麻「あらかじめ聞くけど・・・一日にゲームをどれくらいしているんだ？」

ベール「一日で５時間くらいは・・・」

当麻「やりすぎだよ！じゃ一週間は・・・」

ベール「１５０時間はプレイしておりますわ」

当麻「一日に２時間も睡眠とってないじゃん！だいじょうぶなのか

本当に？」

ベール「私なんてまだまだ素人ですわよ」

当麻「ああ・・・・・・そう・・・」

当麻は深く言及するのをやめた

当麻「とりあえず、今日の所はこれで帰らせてもらうぞ」

アイエフ「失礼しました、グリーンハート様」

ベール「また今度ねあいちゃん、当麻さん」

当麻とアイエフはリーンボックスで別れ、無事に当麻はプラネテューヌに帰還した。午後はそこまで不幸な事は起こらなかったと当麻は自室で泣いて感心した

～～～～～～～短編集～～～～～

＜廃人への誘い＞

ベール「当麻さん、今時間空いてますか？」

当麻「まぁ・・・仕事さえ終われば、後は自由に過ごしているからな・・・」

ベール「それじゃ、ちょっと手伝ってもらえません？」

当麻「・・・・・・もう大体分かったけど・・・何をだ？」

ベール「もちろん！オンラインゲームです」

当麻「・・・・・すまん、他を当たってくれ・・・俺はベールさんみたいに廃人になりたくない・・・」

ベール「是非、廃人になってほしいですわ・・・力づくでも！」

当麻「ちょっと待って！ネプギア、ネプテューヌ！助けてぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

＜廃人への誘い２＞

ネプギア「ど・・・どうしたんですか？その目のクマ・・・」

当麻「・・・ゲーム」

ネプギア「当麻さんがそこまでゲーム好きだったんだなんて・・・」

当麻「・・・これには深い事情があるんだ・・・聞かないでくれネプギア・・」

ネプギア「・・・なんか大きな事情がありみたいなんで・・・そうして置きます・・・」

ネプギア退室

当麻「（・・・言えない・・・ゲームしないと迷子になった事をみんなにばらすなんていう脅迫を受けているなんて、恥ずかしくていえない・・・」

＜廃人への誘い３＞

当麻「・・・・・・とうとう俺もベールと同類になってしまった・・・」

ネプギア「当麻さん、本当に大丈夫ですか、自室に篭りっぱなしですけど・・・」

当麻「・・・・・・ネプギア、俺は今、川が見える・・・」

ネプギア「・・・？」

当麻「死人がどんどんあの川の中に・・・」

ネプギア「当麻さん！戻ってきてください！それ三途の川ですよ！」

当麻「・・・・・・不幸だ・・・」

４話：上条当麻の不幸な一日：午後（後書き）

魔界魔「当麻さんが新たな称号、廃人女神を手に入れました」

ブレイブ「当麻が死にそうに・・・おそるべしグリーンハート・・・」

魔界「今回はこれで終わりです。」

5話：新たなる真実（前書き）

魔界魔「今回はシリアスで行きたいと思います」

ブレイブ「今回は当麻の本気が見れるかも…」

魔界魔「それでは始めます」

5話：新たなる真実

ここはいつも通りのプラネテューヌ、しかし昨日は昨日で不幸があった事から、今日も平和な一日が続くはずが無かった、今日も当麻に不幸は起きる・・・

当麻「おい、俺の身に不幸が起きるのは決定事項なのか？」

そうしないと物語がおもしろくないんで

当麻「俺は物語を作る為の駒か！」

ネプギア「当麻さん、さっきから一体誰に向かって・・・」

当麻「・・・なぜか頭に電波が流れたような気がした・・・」

ネプギア「・・・？」

とりあえず話をここで元に戻したいと思います。

当麻「・・・・・・俺って日ごろの行い悪いのかな・・・」

当麻がいきなり負な事を言い出すと、ネプギアがそれをなだめるかの様に当麻いう。

ネプギア「そんな事無いですよ！当麻さんはこのゲイム業界を救ったりしたじゃないですか」

当麻「・・・・・・この調子で一日、一日、果たし状を叩きつけら

れるのか・・・」

上条は現在、リーンボックスにいた、理由は昨日も挑戦状を叩きつけられたにもかかわらず、今日も挑戦状を叩きつけられたのであった、普通の人なら無視してる所だが上条が受けた挑戦状は昨日受けたものと大きく違っていた

〜〜〜〜〜数時間前〜〜〜〜〜

今朝にまた事件に関係する物がッ見つかった

当麻「いきなりで悪いんだけど…また挑戦状を叩きつけられた」

ネプテューヌ「本当にいきなりだね〜」

上条当麻がめんどくさそうに未開封の挑戦状をテーブルの上に置く

ネプギア「まさか二日連続で挑戦状を叩きつけられるとはさすがに思いつきませんでしたね…」

ネプギアは二日も挑戦状を叩きつけられた事に驚く

ネプテューヌ「とりあえず、開いてみれば」

当麻「そうだな」

そういっていつも通りに挑戦状をびりびりと破る、そして昨日と同じ様に紙が一枚同封されていた、そしてその紙にはこう書いてあった

学園都市出身の上条当麻へ

上条当麻、君にいきなりこんな手紙を送りつけて混乱してるだろうと思うが単刀直入に言わせてもらおう。今日の内にリーンボックスの町外れの平原に来い、この挑戦を受ける事は君が何故ここにいるのかわかるだろう。

謎の魔術師：クリア・ステイン

ネプテューヌ「…魔術師って何？」

ネプテューヌが明らかに違う感想を述べると、上条当麻だけは手紙を持ってまま驚いた顔をしていた

ネプギア「学園都市って・・・当麻さんが元居た世界ですよね・・・」

ネプギアが確認を取ると、上条当麻は静かにコクッと頷く

上条当麻「こいつが…すべてを知っている・・・」

するとネプテューヌは少し真剣な表情をする。

ネプテューヌ「それで・・・挑戦を受けるの？」

ネプテューヌが質問すると、上条は静かに手を力を込めて

当麻「もしこの手紙の事が本当だったら・・・こいつがすべてを知っている・・・」

ネプギア「……行くんですね・・・」

ネプギアが当麻に聞くと、当麻は頷いた

ネプギア「・・・私も一緒に行っていいですか？」

すると当麻はめずらしく、うんともすんとも言わずにただ頷いた

～～～～～～～～～現在～～～～

＜リーンボックス＞

当麻「・・・来たか」

当麻は一足早く、町外れの平原に来ていた、どうやってこんなに早く移動したのかというと・・・

魔界魔「時間短縮の為です。」

・・・・・こうゆう訳なんで、この事に関しては直ぐに水に流して貰いたい・・・と冗談はここまでにして話を戻そう

？？？「ほう、あんがい早くきたな」

すると一足早かった訳だは無かったらしい、遠くから人影が現れた、どうやら彼は当麻より少し早く来ていた

当麻「・・・お前がクリア・ステインでいいんだよな」

当麻が表情を変えずに目の前にいる相手に確認を取る

クリア「・・・そうさ、私が君をここに呼んだのさ」

するとクリアは頭をポリポリとかくと表情を一つ変えずに上条に続けて言い放つ

クリア「・・・先に君に私の正体を教えてあげないとね・・・」

するとクリアは咳払いをすると、続けて上条に言い放つ

クリア「私は魔術師クリア・ステイン、ある魔術師でね・・・そして・・・」

するとクリアは表情がいきなり不気味になり、上条に次元が歪む人間の声なのかも分からない声で上条に言い放つ

クリア「君の存在を学園都市から消した張本人だ」

すると上条が驚愕の表情をする

上条「な・・・・・・どうゆう事だ・・・・・・」

するとクリア・ステインは不気味な表情を変えずに言い放つ

クリア「理由を知りたいか！それはな・・・お前というイレギュラーが邪魔だったんだよ！」

上条「テメェ・・・・・・ローマ正教か」

するとクリア・ステインは関心したように上条に言い放つ

クリア「ほう・・・よく私がローマ正教だという見破ったな・・・」

当麻「俺に恨みを持つような魔術師なんてローマ正教ぐらいだからな」

するとクリアは不気味に笑いながら、話を続ける

クリア「お前が学園都市から存在を消された事でローマ正教は実に動きやすくなった・・・あの禁書目録もお前の存在なんて一ミリ程も記憶に残ってないからな・・・見ていておもしろかったよ・・・大切な人の名前も覚えだせないなんて・・・見ていて快感だよな・・・ハハハハハハハハハハ！！！！」

当麻「・・・・・・・・・・」

ネプギア「そんな・・・・・・ひどい・・・・」

遂には当麻は一言もしゃべら無くなった、そしてネプギアが悲しみの言葉を吐きながら当麻を見る

クリア「だが・・・お前はやっぱり異世界でも生きているだけで安心はできないからな・・・お前をここで殺しちゃうのがいいんだよな～そうゆう訳だ・・・さっきの話は冥土の土産に謎が解けて良かったな」

するとクリア・ステインは魔法効果を付けられた霊装、「血色魔剣（ブラッティジルバ）」を構える

クリア「死ね！」

全速力でクリアが上条の元に走り出す、しかしその速度は人間に出

せる速度では無かった、おそらくクリアが装備している「血色魔剣（ブラッティジルバ）」の霊装の魔法効果だろう。

クリア「私はローマ正教に為にお前の命を捧げる！」

ネプギア「当麻さん！！」

ネプギアが叫ぶが、当麻にこの声が届いているのか、それも分からない、そしてクリアが当麻に思いっきり「血色魔剣（ブラッティジルバ）」を振るうと…

バキィ！！

クリア「なっ……！？」

クリアの魔剣が届くよりも上条の拳での一撃が届くのが早かった、クリアに拳が命中しなんと一撃でかなり後退させられた。

クリア「（どうゆう事だ……明らかに今の一撃はただの人間が出せる一撃では無い…）」

するとクリアが目の前にいる当麻の膨大な怒りを感じ取る、この怒りはあの時、一方通行との戦いよりも前方のウェントとの戦いよりも右方のフィアンマに放った怒りとは比べ物にならない怒りを放っていた。

クリア「（な……この怒りの量……明らかに危険だ…）」

上条の放つ膨大な怒りにクリアは驚く、そしてそれを近くで見ていたネプギアも当麻の怒りには驚いていた

ネプギア「……当麻さんが怒っている……以前とは比べ物にならないくらいに…」

するとクリアは危険を察知したのか、歪んだ笑いをやめて真剣な表情に戻る

クリア「おもしろい……どこまでやれるか見ものだな！」

そしてクリアは上条にまた物凄い速さで近づく、普通の人間なら反応できないくらいの速さで

クリス「二度は効かん！死ね！」

クリアは上条に霊装を振り回す、おそらくこの一撃をまともに喰らえば、普通の人間なら簡単に真ッ二つになる一撃を放つ

上条「……」

しかし上条はその一撃を無言のまま、回避する、そして上条はクリアを思いっきり睨みつけながら拳を構える

クリア「ひッ……」

一瞬だが上条の怒りの視線に睨まれて、クリアは動けなくなる。そして当麻はもう一度腹を目掛けてクリアの腹に一撃を食らわす

グシャ！！

嫌な音と共にクリスの腹に上条の一撃が炸裂する、クリアはその一

撃に耐え切れず腹を押さえる、だが当麻はそんなのも気に留めずにクリアの顔面に拳に一撃を放つ、そしてその一撃でクリアは大きく跳ぶ、そして飛ばされているクリアを全速力で追いつき蹴り技でクリアをさらに吹っ飛ばす

ネプギア「（…いつもの当麻さんと戦い方が…違う…」

普段の当麻の戦い方とは大きく違っていた、普段の当麻ならどんな敵が相手でも小さい一撃や致命傷を与えて戦える状況を不可能にして勝利する、そしてたとえ敵であっても手を差し伸べるのが上条当麻である。だが今では容赦の無い一撃を感情を込める事無く無情で放っているように見えた

クリア「ハァハァ…どうゆう事だ…明らかに普段とは動きが格段に違うぞ！」

クリアは蹴りや拳を思いっきり喰らい、痛々しい体をなんとか起き上がらせる、だが立ち上がるよりも前に当麻がクリアの元に走り出す

クリア「（……そうか……怒りで普段とは比べ物にならない身体能力を引き出しているのか！）」

クリアは当麻の急激な身体能力の増加に驚いている、おそらく今の当麻なら土御門も普通に勝てるかも知れない

当麻「……」

当麻は無言のままクリアの元にたどり着くと、拳を顔面に放つ体制を取る、しかし今度はクリスが上条の攻撃を先読みして、「血色魔剣（ブラッディジルバ）」を縦に振る

クリア「これで終わりだ死ね！」

もうクリアの一撃を避けられる体制では無い当麻にこの一撃が炸裂すれば勝利が確信したクリアだが…

カキン！！

クリア「なっ！？」

クリアの持つ「血色魔剣（ブラッティジルバ）」は当麻の持つブレイブソードによって防がれていた

クリア「なぜ貴様が剣を！」

クリアは当麻が剣を所持していた事に驚く、すると当麻は剣を引いて、少し後退する。そして…

ブン！

思いっきり手に持っていた、ブレイブソードをクリアに投げつける、当麻がするとは思えない小細工に驚きクリアは慌てて投げられたブレイブソードを霊装で何とか防ぐ、だがその一瞬の間に当麻はダッシュをしてクリアとの距離を直ぐに縮めた、そしてもう一度、鉛の様に重い拳をもう一度クリアにぶつける、そしてクリアはその一撃を受け、大きく吹っ飛ばされた

クリア「……この……異教の……クソ…ごときに…」

クリアはボロボロな体を何とか持ち上げる、そして「血色魔剣（ブラッティジルバ）」を

構えなおし

クリア「クソ猿がーーーーーーー死ねーーーーーーー！！！！」

クリアは思いっきりの全速力で当麻との距離を縮めようとする、すると当麻が右腕を上に上げる

クリア「（何を……するともりだ…）」

クリアは当然、腕を上に向けた動作に警戒する、そして全速力で当麻の元に走り続ける

当麻「……プロセッサユニット装着」

クリア「…？」

やっとしゃべったかと思ったら、いきなり意味不明な事を言い出す当麻に警戒を強くするクリア、そして腕輪が黄色に光りだす

クリア「なっ……なんだこの光は…！？」

クリアが一時、動きを止め、目を片手で隠し目を瞑る、そして光が晴れると黒い髪の美人ともいえる左手にブレイブソードを持ち、両手には真っ黒なグローブを装着しパープルハートと同じレオタードの様な衣装を装着していた

クリア「貴様…一体何者だ…まさか…上条当麻か！？」

するとイマジンハートは体制を整え、クリアに言い放った

イマジンハート「…だったらどうするの」
するとクリアは「血色魔剣（ブラッティジルバ）」をイマジンハートに向け
クリア「無論！殺すまでだ！」
そしてクリアが霊装を構え、イマジンハートの元に走り出そうとする…が

パキン！！

クリアの持つ霊装「血色魔剣（ブラッティジルバ）」が一瞬で刀身が砕かれた
クリア「なっ…私の霊装を…たった一瞬の内に…たった一振りで…」
クリアは分かっていた、そう霊装「血色魔剣（ブラッティジルバ）」はたった一瞬の内、そしてたった一振りで砕かれたのだ。
イマジンハート「今度はこっちからいくわよ」
するとイマジンハートはクリアに瞬間移動で近づく、そしてクリアを軽く持ち上げて空中に投げ飛ばす
クリア「（しまっ…態勢を…」
突然、投げられてしまった事で大きく態勢を崩すクリア、そしてその隙を突いてイマジンハートは空中にクリアを追跡する

イマジンハート「地面に…叩き…落とす！」

イマジンハートは両手に力を込め、思いっきりクリアを地面に叩きつけた、叩きつけられたクリアは地面に何度もたたきつけられる

クリア「クソ……」

地面に叩きつけられたクリアがイマジンハートを強く睨むと

クリア「こ……の……クソ猿がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

クリアが歪んだ怒りを大きく叫び声として放つと、手をイマジンハートに向けエネルギーが収束しはじめる。

クリア「最後にありったけの魔力を使い……貴様を殺す！！」

おそらくクリアが残されている魔力すべてを使い本気でイマジンハートを殺しにいくようだ

クリア「これが……ローマ正教の底力だぁぁぁぁぁ」

クリアは立ち上がり、左手に溜まった魔力を放出するようにその魔力をイマジンハートに向けて放つ為にどんどん魔力をためる

クリア「これで終わりだな…」

ネプギア「……大丈夫…当麻さんなら…きっと…」

クリアが完全に勝ち誇りネプギアは当麻なら絶対になんとかしてくれると信じていた、するとイマジンハートは収縮されている魔力の

塊を見て

イマジンハート「（おそらく…この一撃は…カーテナと同じくらいの力を持っている筈…）」

イマジンハートのいうカーテナというのは天使長の力を持つ刀カーテナ＝オリジナルの事だろう、プリテン・ザ・ハロウィンの首謀者である第二王女が使っていた刀である。二割の力で次元を切断する力を持つ剣である。おそらくこの魔力でのいちげきはそのカーテナオリジナルの二割程の力と同等ではないと考えていた、するとイマジンハートがチラッと自分の右手を見る

イマジンハート「（…右手ばっかりに頼ってたら…やっぱりだめだよね…）」

イマジンハートが真剣な表情をすると、ブレイブソードを縦に居合いの構えを取って構える、するとそれを見たクリアは変な表情をした。

クリア「なぜ幻想殺し（イマジンブレイカー）」を使わない…」

クリスはイマジンハートに問いかけると、イマジンハート少し笑う

クリア「……何がおかしい…」

クリアが鬱陶しそうにイマジンハートに話しかける、するとイマジンハートは真剣な瞳でクリアを見つめる

イマジンハート「今までの私は…すべて幻想殺し（イマジンブレイカー）で事件を解決していたりしていた…でもそれは私はこの右手

に頼りきっていただけで…決して私自身が強い訳じゃ無い…それどこか…私一人では何もできなかった…この右手はただ異能を壊すだけで守る事はできない…」

クリアは何も言わなかったが、イマジンハートはそのまま話を続ける

イマジンハート「でも今は違う！たとえこんな幻想殺し（イマジンブレイカー）に頼らなくても、ネプテューヌ達を守ってみせる！」

するとクリアは魔力な溜まった左手を確認すると、イマジンハートに言い放つ

クリア「…そうか……なら…」

するとクリアは巨大な魔力を放出する、放たれた一撃は金色の閃光になったイマジンハートに真っ直ぐに放たれる

クリア「貴様のすべてを打ち破る！！」

するとイマジンハートは閃光に真っ直ぐに向かって行く

イマジンハート「ハァァァァァァァァァァァ！！！！」

するとイマジンハートの持つブレイブソードにエネルギーが溜まり、赤き大きな刀となる

クリア「何！」

クリアはイマジンハートが作り出した、大きな刀に驚くがイマジンハートはその刃で閃光を切り裂く様に技を放つ

イマジンハート「閃光ごとたたっきる！豪神斬（ブレイブクラッシャー）！！！」

イマジンハートの放った一撃は巨大な刃となり閃光に向かっていき、その刃は閃光と真っ二つに斬りさいた、斬られた閃光は消滅した。

クリア「馬鹿な！私の最終奥義を！」

クリアは最後の一撃を切り裂かれた事に驚く、するとクリアは突然、膝を付き魔力を使い果たしたのかそのまま倒れ気を失った

ネプギア「……すごい…」

ネプギアはイマジンハートの放った一撃に驚いた、おそらく今の一撃はあの後方のアックアでも一撃で倒せるのではないかという程の一撃を持っていた。

イマジンハート「……」

気を失っているクリアを見ると、無言のまま、ネプギアも元に足を進める

ネプギア「当麻さん……」

イマジンハート「……ネプギア」

するとイマジンハートは腕輪を掲げて、解除コードを言葉で発するとイマジンハートから不幸な高校生の上条当麻に戻った

ネプギア「…当麻さん……あの…」

ネプギアがこの先、何話すのか理解した、当麻は静かに笑って

当麻「……俺の事なら心配すんな」

ネプギア「えっ……」

ネプギアは驚いた、なぜ自分が当麻に何を言おうとしたのか悟られたからもしれないが

当麻「…なんでネプギアが悲しい顔をするんだ」

ネプギア「……」

悲しい顔をするネプギアに当麻が言葉を放つ

当麻「今、お前が悲しい顔する必要なんてどこにもないだろ、それに俺はお前達に笑っていてほしいしな」

ネプギア「……今、一番苦しいのは当麻さんじゃないですか…」

ネプギアが低く小さな声で当麻にいうと、当麻は笑った表情を変えずに

当麻「…そうだな、確かに俺は今とても心の中では苦しいけどな、それでもネプギアが笑っちゃいけないなんてルールはどこにも無いんだからな」

するとその一声で元気を取り戻したのかネプギアは悲しい顔から明るい顔に戻り

ネプギア「……ありがとうございます、でも当麻さんも無茶するんですからたまには私達も頼ってくださいよ」

するとその一声に当麻も少し元気を取り戻した様に

当麻「でもこの性格は生まれつきだからな～無茶するのも人助けるのも…俺に取っちゃ幸運の様な物だからな」

ネプギア「ハハ…当麻さんはやっぱり何も変わりませんね、最初に出会った時から…」

すると上条はめんどくさそうに返答を返す

上条「はいはい、どうせ上条さんはお人よしでお節介ですよ」

するとネプギアが何かを思い出した様に上条に話しかけると

ネプギア「そういえば当麻さん」

当麻「ん？…どうしたネプギア？」

ネプギア「当麻さんって高校生ですよね？」

当麻「そうだけど…それがどうかしたのか…？」

するとネプギアはニッコリ笑って

ネプギア「それじゃ～高校に通わないと駄目ですね♪」

すると当麻が呆気に取られた様な顔をしてネプギアの方を向く

当麻「…すいませんなんていってるのか分からなかったのでもう一度お願いします。ネプギアさん」

当麻は確認の為に丁寧口調でネプギアに聞くと

ネプギア「高校に通わないとだめですね♪」

すると当麻は慌てはためきながら、ネプギアに聞く

当麻「でも…高校を途中から受けいれてくれる所なんて…」

当麻は高校に通いたく無いのか、それともただ単に心配なのか、ネプギアに聞く、でも…

ネプギア「大丈夫ですよ、当麻は年齢も高校生でしかも守護女神で有名なんですよ、どんな高校でも一発で受け入れてくれると思います。」

すると当麻は逃げられないと悟ったのか、でも当麻は知らない相手がいる高校に通うのは抵抗があるのか

当麻「だったら、ノワール経ちとかどうなんだよ！学校通ってないじじゃん！」

…どうやら悟った訳では無いらしく、必死に抵抗を見せる

ネプギア「私達、女神は齢を取らないんです、だから高校なんて通いませんし、せいぜい通えて大学だと思います。」

すると当麻が女神について初耳…っていうか初めて聞いた事に、耳をお傾ける

当麻「ちょっと待てネプギア！女神が齢を取らないなんて初耳だけど！…っていうかつまり女神は不老って事か？」

ネプギア「簡単に言えば、そうなりますね…ついでに当麻さんも今は立派な女神なんで恐らく当麻さんも不老だと思います、しかし現時点の女神の中では一番若いと思いますよ」

当麻「おい待て！俺が不老って科学でも魔法でも説明がつかないけど！」

ネプギア「大丈夫です。それは作者の力で…」

当麻「メタは禁止！…やっぱり俺って…」

すると当麻は大きな声で…

当麻「不幸だーーーーーーーーーーーーーー！！！」

そうゆう訳で当麻は高校に通う事になった。

～～～～～クリア・ステインについて～～～～

クリア・ステイン
性別：男性
目の色：赤
容姿：とあるのステイル＝マグナスの服を来たビアージオみたいな感じ
性格：冷酷で残酷
所属：ローマ正教
レベル：２７００
戦闘能力：Ａ
武器：霊装「血色魔剣（ブラッティジルバ）」
備考：ローマ正教の魔術師で当麻の存在を学園都市から消失させた張本人（マジック・ザ・ハードに黒い水晶を渡した）人の苦しむ姿に快感を覚える冷酷な男でローマ正教にかなりの信仰をしており、上条をローマ正教の邪魔者と見なし、この世界から存在その物を消した、戦闘能力は霊装で身体能力が強化されているので高いが、激怒した上条には手も足もでなかった、どうやってゲイム業界に来たのかは不明で上条に敗北した後、終息は不明に（戦いの際に霊装をイマジンハートに叩き折られた為、恐らく人を殺してはいない）
能力：魔力究極開放（テンペストマジック）（魔法を一つに圧縮して打ち出す技でかなり強力だが、使用後は気を失ってしまう程魔力の消費量が大きい）
　絶対十字（アルトクロス）（クリスに敵意を向ける相手の攻撃を無効化する「天罰術式」の元となった術式でもある、しかし幻想殺しを持つ上条には効かなかった）

5話：新たなる真実（後書き）

魔界魔「今回はシリアスが強かったですね」

ブレイブ「…当麻が高校に行くという事は新章はじまるのか」

魔界魔「始まるます！」

ブレイブ「そうか、今日はここで終わりです。」

6話：学校へ行こう！（前書き）

魔界魔「今回から新章スタートです！」

ブレイブ「まさかの学園編とは…」

魔界魔「そんな事よりスタートします。」

6話：学校へ行こう！

＜プラネテューヌ＞

前回、なんやかんだで高校に途中入学する事になった不幸な高校生上条当麻はクリア・ステインという魔術師をボッコボコに叩き潰して、久し振りに平穏な日常に戻れるんじゃね？と思ったが、やはり不幸高校生の上条当麻にはそんな幸運は無かった

当麻「魔界魔！俺に喧嘩売ってんのか！」

残念だが、作者である私に君が勝てる訳が無いだろう。それより入学早々遅刻するとは…やはり君は不幸高校生なのか

当麻「悪かったな！人助けしてたら遅くなったんだよ！」

やはりお人好しだな、それよりも話ここで戻そうとしよう。

当麻「なんか…また頭に変な電波が流れたけど…まぁ…いいか、じゃなくて…入学早々遅刻かよ！やっぱり不幸だーーーーーーーーーーーーー！」

そうゆう訳で入学早々、遅刻しそうな上条当麻は転入する学校に向けて、全速力で向かっていた。

当麻「（もしかしたら、女神化すれば間に合うかも…って町中では無闇に変身したくない…）」

当麻は案を考えついたみたいだが、断念したみたいだ

当麻「（それよりも良かったのか…こんな高等学校で…俺勉強だけは全然ダメなんだけど…）」

上条当麻が転入する高校は高貴高覧学園という高等学校である。勉強に関してはプラネテューヌの中ではトップクラスの天才高校だが、なぜ当麻がそんな学校に入れたかというと、我が力に不可能は無いBY魔界魔…っとここでも冗談は置いておいて、本来この高等学校は筆記試験、受付試験、感想文提出というここのプラネテューヌの女神様じゃ一生合格できないのでは無いかというレベルなのだが、当麻は英雄兼守護女神という立場だけで一発合格という甘かった結果だった（英雄兼女神の通った高校はかなり人気を集められる為という教師達の策略かもしれないが…）とりあえず現在は転入早々の初登校日である。

当麻「……ってこんな事、考えてる場合じゃ無かった！急がないと！」

ついでだが、当麻の服装はいつもの学生服（冬服）に鞄である。そして鞄の中身は教科書類に勉強用具、そして…仕事の書類である。なぜこんな所に仕事を持ってきてるかって？それは当麻は仮にも守護女神であり国家を動かせる程の権利を持っている（本人は国を動かす気なんてさらさら無いし、彼は権利なんて物を殆ど使わない為、意味が無い）ただそれでも大統領レベルの職の為守護女神の仕事に休みは無いのだ。

当麻「……早く行かないと！転入早々遅刻なんて恥ずかしすぎる！」

息をきらしながらも走りつづける上条であった。

数分後……

＜プラネテューヌ：高貴高覧学園＞

当麻「ハァ…ハァ…ここで…いいんだよな…」

走り続けて数分後、なんとか着いたようだ、学校が始める前に1時間前に出て来たのにもうすでに遅刻5分前である。

当麻「……で…どっから入ればいいんだ？」

この学園は大きく、校門はすぐにわかったが、入口がぜんぜんわからなかった。当麻であった。

当麻「大きすぎて迷うぞこの学校……俺が前にいた学園とは大きさが違うなぁ～」

当麻が関心していると、入口を探さないととすぐに正気を取りもどす…すると…

？？？「おい」

当然、男の子に声を掛けられると、当麻は男の方を向く、その男はいかにも不良って感じがプンプンする。

？？？「こんな所でなにしてんだ？」

すると当麻は恐れること無く、普通に初対面の男の子に話す

当麻「いや…この高校の転入生なんだけどさ…迷っちゃって…」

当麻は申し訳なさそうに男の子にいうと、男は表情を少し緩めると

???「ハハハハハ、迷ったのか！やっぱりこの高校でかすぎて迷う人が必ずいるんだよ、ハハハ！」

当麻「……」

当麻は少し無表情になって、笑ってる男を睨みつけた、すると男はごめん、ごめんと誤って

???「ついてこいよ、入口まで案内してやるからさ」

当麻「本当か！」

当麻が感激すると、男は笑いをやっと押さえたのか、表情を元に戻し

???「ああ、ついてこいよ、そういえば年齢と名前、聞いて無かったな」

すると当麻は感激する気持ちを抑え普通に紹介する。

当麻「俺は上条当麻、そして１５歳の高校一年だ」

???「俺と同じか、俺の名前は朝霧裕也だ俺も１５歳で高校一年、一緒のクラスになれたらよろしくな当麻」

当麻「おう！」

こうして当麻は入口まで案内してもらい、朝霧と別れた、そして職員室で色々、話が合った後、1年1クラスに配属が決定し恐怖の自己紹介に入る（恐怖の理由は自分がもし守護女神だと知られていた場合すごい大問題になるかもしれないから）しかし不幸高校生の上条当麻にそんな幸運が起きる筈が無かった…

＜高貴高覧学園：1年1クラス教室＞

教師「皆さん、今日から新たにこの学園に転校生が来ます。」

この学年の教師がそういうと、いきなりクラスがざわめき始める

「えっ、転校生って？」

「まさかあの守護女神が転向してくるという噂、本当だったの？」

「しかもその子、女神初の男性らしいわよ。」

「えっ…本当！」

「絶対来るって！」

やっぱり上条の存在はここでもかなり有名のようだ、すると青い髪のサラサラヘアーである朝霧が寝むそうな顔を上げる。

朝霧「転校生って…、まさかあいつか？」

？？？「えっ、朝霧君、転校生と知り合いなの？」

朝霧「それらしい人に朝あってな、それよりお前は興味津々だな星風」

星風と呼ばれる少女はにっこりと笑って

星風「もしかしたら…いや…守護女神が転向してくるらしいから」

朝霧「あいつが守護女神か……ありえるかもな…」

すると先生が咳ばらいうぃするとなぜか生徒達が一瞬で静かになった

先生「それでは高校生、入ってきて」

先生がそういうと、廊下からツンツン頭の黒髪の男が入ってくる、もちろん誰かは言わなくてもわかるだろう。

先生「それでは当麻くん、自己紹介を」

すると当麻は少し固まっていたが、直ぐに落ち着きを取り戻し、普通に挨拶する。

当麻「は…はい、えっと…上条当麻です。よろしくお願いします。」

すると生徒全員が一気に静まり返った、するといきなり一人の生徒が生徒「すいません……あの…先生…質問があるんですけど・・」

先生「えっと…なんですか…」

先生はいきなり手を上げて質問してきた生徒に少し戸惑いを見せると、先生はなぜか廊下近くの扉に避難する体制を取る。

生徒「当麻くんは、噂の守護女神でしょうか。」

するとその質問に当麻は何かを感じ取ったのか、上条も廊下前の扉に避難する。

先生「……はい…上条君は…あの…守護女神です。…」

すると先生が廊下にダッシュで逃げる。すると生徒（主に女子生徒）が机から立ち上がり

生徒（男）「すげーーーーーーーー本物だーーーーーーーー！！！」
生徒（女）「本当に転向してくるなんて…」
生徒（男）「まさか本物に出会えるなんて…」
生徒（女）「とりあえず…サインもらおうよ！」

すると当麻も廊下に逃走！そして生徒達も…

生徒「サインくれーーーーーーーーーーーーーー！！！」

クラスに残ったのは朝霧と星風だけだった

朝霧「まさか…本当に守護女神だったなんてな…」

星風「なんにせよ…内のクラスは楽しくなりそうだね～」

なお、生徒と上条＋先生の鬼ごっこは2時間続いた、上条はヘトヘトになり、結局捕まり、サイン地獄だの拍手地獄に合った、そしてここ高貴高覧学園のまた新たな仲間である上条当麻が追加された。

～～～～～～～～短編集～～～～～

＜出番無し＞

ネプテューヌ「まさかの初めて出番無かったね、私とネプギア」

ネプギア「ハハハ…しかたないよ…この作品は当麻さんが主役な訳だし…」

ネプテューヌ「しかも新しく始まった章のせいでもう当分出番が無い気がするよ」

ネプギア「でも当麻さん、やっぱり人気物だったね、大丈夫かなこの先…」

ネプテューヌ「あれ……私の意見は無視？」

＜まさかの事実＞

朝霧「まさか本当に当麻が守護女神だなんてなぁ」

当麻「着きたくて着いた職じゃ無いんだけどな…」

星風「でも、私達に取ったら雲を掴むぐらい届かない職業だよ。いいな～」

当麻「でもそのせいで色々苦労しおてるんだけどな…」

星風「カンバ！」

朝霧「がんばれ当麻」

当麻「……一言かよ・・・」

～～～～～～当麻の友人～～～～～

朝霧裕也
クラス：1年1組
年齢：１５歳
職業：高校生
容姿：茶色の髪に短い髪
成績：優秀
好きなもの：辛い物・子供
嫌いなもの：ピーマン・チーズ
備考：当麻の学園初めての友人で成績は優秀である、子供好きでお人良しでもある、喧嘩は強く、普段の当麻なら勝てるが不良相手５人くらいだと実力的に逃げ出す実力、星風の幼馴染

星風麗
クラス：一年一組
年齢１５歳
職業：高校生
容姿：金髪の下ろした髪に整った顔であり美少女
成績：普通
スリーサイズ：８０／５２／８３
好きなもの：甘い物・鏡

嫌いなもの：勉強（それでも成績は普通レベル）
備考：朝霧の幼馴染で優しい性格で当麻の第二の親友人で守護女神の職業に憧れを持っている、朝霧が好きだが自覚が無い、変な子で勉強嫌いだが怒るときは怒る、クラスも認めるほどの美少女

6話：学校へ行こう！（後書き）

魔界魔「オリキャラ紹介ありました。」

ブレイブ「今後も増えていくのか？」

魔界魔「わかりません、でも期待はしててください。」

7話：平和な学校生活・・・になるわけないよなｂｙ上条当麻　（前書き）

魔界魔「今回もバトルシーンあります。」

ブレイブ「そうかでは始めるぞ」

7話：平和な学校生活・・・になるわけないよなｂｙ上条当麻

＜高貴高覧学園：教室＞

～～～放課後～～～

当麻「プシューーー（頭から湯気が出ている状態）」

当麻は最後の授業を終えて、頭が爆発しそうになっていた

朝霧「……当麻、だいじょうぶか？」

朝霧が当麻を心配するが、当麻は返事を返せる状態じゃ無かった

星風「それ以前に生きてるかな？」

突然、怖い事を言い出した星風だが、それから数秒後上条は復活した。

当麻「……だめだ…」

朝霧「どうした？いきなり？」

朝霧がいきなりだめだという変な事を呟く上条に聞く

当麻「ここの勉強…むずかしくないか？」

当麻が質問すると、朝霧がそれは当然だろ、っとでもいうように上

条にいう

朝霧「勉強が難しいのは当然だろ、ここは超名門だぞ、それよりもう授業は終わったんだから一緒に生徒会に行こうぜ」

すると当麻が頭に?を浮かべ

当麻「え……生徒会?」

すると星風が驚いている当麻に普通に言い放つ

星風「聞いて無かった?実は当麻君には生徒会に入ってもらいたいんだよ」

すると当麻が反論する。

当麻「ちょっと待て!俺は成績も悪いし生徒会なんてやって行く自信なんかねえよ!!」

おそらく当麻は生徒会に入りたくないから、なにかしら理由を言って生徒会に入るのを逃れる為だろう。

朝霧「大丈夫だ、生徒会長がお前を生徒会に絶対に入れさせたいらしいし」

すると朝霧が逃げようとする当麻を無理やりにでも連れて行こうとする

当麻「離してくれ朝霧さん!俺は生徒会なんて入りたくないです!」

当麻が少し敬語になり朝霧に反論するが完全スルーされ連れて行かれる事になった。

＜高貴高覧学園：生徒会室＞

朝霧「すいませーん、当麻を説得してたら遅くなりましたーーー」

星風「上と同じ理由でーーーす。」

朝霧と星風が当麻を強制連行して生徒会に辿り着く、

???「遅いぞ！どんな理由があろうと生徒会は時間厳守だ…といいたい所だが今回は特例として認めよう」

男の声が生徒会室に響いた、上条が察するに生徒会長だろうか、すると今度はまた女の声が響いてきた

???「まぁまぁ、それよりも先に転校生との挨拶を済ませましょうよ、会長」

おそらくこっちは生徒会副会長であると上条は察する

朝霧「ほら当麻、会長と副会長だ、挨拶しとけ」

朝霧に強引に引っ張られると、当麻は男と女の前に出る。

???「ほう、君が上条当麻君か」

???「特徴はいたって変哲の無いツンツン頭だね。」

すると当麻は重くなりそうな肩をしぶしぶ持ち上げて目の前の相手にいう、おそらく先輩なのだから変に接するのはいけないだろうと思った。

当麻「ハハハ……転校生の上条当麻です。」

当麻は敬語で挨拶する。

???「そんな堅くならなくてもいいよ、僕の名前は加藤零時で2年2の生徒会会長さ」

???「私は銀姫麗奈、2年4で生徒会副会長、よろしくね当麻君」

二人の先輩も自己紹介を済ますと、さっそく本題に入る事にした。

加藤「それでは本題に入ろうか、当麻には生徒会に入ってもらいたい。」

しかし上条はやっぱり生徒会に入りたくないのか反抗を始める

当麻「でも俺、成績良くないし、特にずば抜けた部分は…」

上条は自信なさげに反論するが、やっぱり…

銀姫「それでもあなたに入ってもらいたいのよね、生徒会に」

当麻は大体こうゆう答えがくるのは予想してたのだが、それでもなんて断ればいいかわからない

朝霧「とにかくお前が生徒会に入るのは決定事項なんだ、あきらめろ当麻」

当麻「なんで決定事項なんだよ！」

当麻が反論する、しかし反論した所で何が変わるわけでは無い

加藤「それで当麻、生徒会に入るのかい」

当麻「・・・・・・」

当麻はどう答えたらいいかわからず黙りこんでしまう…すると…

ドカン！！

全員「！！！」

いきなり校庭に大きな爆発音が響いた、そして生徒会全員は窓から見てみると…

加藤「まさか…ここにいたなんてね…」

校庭にいるのは本来いる筈な無い生命体であるモンスター、〇ットイーターのオウガテイルをそのまま赤くしたモンスター、ファイア

ーテイル5体が校庭を攻撃していた。

朝霧「なんで校庭にモンスターなんか……まさか…」

加藤と朝霧が何か心当たりがあるようで上条が聞く

当麻「朝霧……なにか心当たりがあるのか？」

朝霧「……実はな、犯罪組織が潰されてからな、秘密裏に違法ディスクが色んな所にばら撒かれたんだよ」

当麻「違法ディスク…」

当麻は聞いた事がある。違法ディスクとは犯罪組織が作った違法なプログラムの事でその中にモンスターなどが埋め込まれており実際ルウィーでも違法ディスクの当然変異体と戦闘した。

星風「あ…もう一体5体と違って大きいのがいる！」

星風が指さすと、ファイアーテイル5体と一緒にもう一体、モンスター〇ンターのナルガクルアと似たモンスターがいた。

当麻「（あれ…ナルガクルアじゃないのか…ってこんな事考えてる暇じゃ無かった！）」

すると当麻が生徒会長に聞く

当麻「会長、あのモンスターを早くなんとかしないと・・・」

すると加藤が一時校庭を見渡す、すると少し安心したように

加藤「生徒会で時間を稼ぐぞ！その間に生徒を避難を上条君はここで待っているように！」

生徒会全員（当麻以外）「「「はい！！！」」」

すると生徒会全員が外に出て行った、無論、上条一人を取り残して、すると当麻が顔を上げて、勢い良く生徒会の扉を開け生徒会室を出てどこかに向けて走り出した。

当麻「（待っていられる訳が無いだろ！待ってろみんな！！）」

上条当麻は教室では無く、急いで校庭に向かった

＜高貴高覧学園：校庭＞

現在ここに生徒会メンバーもとい加藤、銀姫、朝霧、星風が生徒を安全な教室に誘導していた。だが会長だけは護身銃を持ってモンスターに対抗してた、あとなぜ護身銃なんか持ってるんだとか突っ込んではいけない

星風「会長！生徒全員の避難が終わりました！」

星風が生徒全員の避難が終わった事を報告すると。

加藤「だったら生徒会だけでも戦うんだ！みんな護身銃を持ってるだろう！」

生徒会「「「はい！！！」」」

すると朝霧、星風、銀姫が加藤と同じ銃を取り出す、なぜ全員が同じ銃を持ってるんだとか突っ込んではいけない

バン！バン！

校庭に銃弾の音が響く、銃弾はファイアーテイルに当たってはいるが、ダメージは全然無いようにみえる。

加藤「だめだ…銃弾じゃびくともしない…」

加藤がダメージを与えられない事に悩む、もしこのままモンスターをほっておくと恐らく学校に潜入し生徒達に危害が加わってしまう

朝霧「星風！このままじゃヤバい！」

星風「そんな事いってもダメージが無いんじゃびくともしないよ！」

朝霧と星風も苦戦している、すると

ファイアーテイル「ガアアア！！！」

ファイアーテイルが加藤にとびかかり攻撃を仕掛ける、こんな物喰らったら普通の人間じゃ軽傷じゃ済まない、しかし加藤は他の事に気を取られていて、避けられる余裕が無かった

加藤「しまった！！」

ヤバいと思った加藤だがもう遅かったファイアーのとびかかりが炸裂する…が、その時…

???「会長!!危ない!!」

すると黒髪ツンツン頭の男もとい上条当麻がタックルをファイアーテイルにしかけ間一髪の所で直撃を免れた

加藤・朝霧・銀姫・星風「「「「当麻（君）!!!!」」」」

当麻「大丈夫か会長!!!」

当麻が加藤に駆け寄る

加藤「当麻…どうしてここに…」

加藤が驚いた顔で当麻を見ると

当麻「ハハハ……困っている人は絶対に見捨てられない性分なんですよ…」

するとファイアーテイルが5体が生徒会に近づいてくる

星風「やばくない…もう弾無いけど…」

朝霧「こうゆうのを絶体絶命っていうのか…」

銀姫「このままじゃ…」

どうやら生徒会は完全に戦う事ができない、絶体絶命である。する

と当麻が…

当麻「みんな…下がっててくれ、ここは俺がやる」

すると朝霧が心配そうに上条にいう

朝霧「おい大丈夫なのか、いくら当麻でもこれじゃ…」

加藤「当麻！！君は早く教室に戻るんだ！！それに君は生徒会じゃ無いし…」

すると当麻が真っ直ぐな瞳で加藤に向かって言う

当麻「人助けするのに理由が必要か？」

その言葉を受けた加藤は少し驚いた顔になる。

加藤「でも……こんな奴らが相手で…」

するとファイアーテイルの一体が上条に突然飛びかかって来た

星風「危ない！上条君」

すると当麻がその一撃を回避してブレイブソードでファイアーテイルを斬りつける、斬りつけられたファイアーテイルは少し体から血を出しただけだった、そしてその光景に驚く生徒会

星風「あのモンスターに一撃を加えた…」

朝霧「それよりも当麻…その剣…」

加藤「まさか…当麻は本当にあの守護女神(ハード)？」

すると当麻が

当麻「って…信じてなかったのかよ！！！」

当麻が突っ込むが、真っ直ぐに剣を構えファイアーテイルに剣を向ける

当麻「（モンスター6体か…俺は魔術師とかの戦いなら大得意だけどモンスターはかなり相性が悪い）」

当麻は異能な力を使い相手とはかなり相性がいいが逆の相手は相性が悪い

当麻「……やりたくはないけど、やるしかないか……」

すると当麻が生徒会の方を見て、言い放つ

当麻「あのさ……今からする事、絶対に生徒に言わないでくれないかな…」

生徒会「？」

生徒会は意味が分からず頭に？マークが出現する、すると当麻が右腕を上に上げる。

当麻「プロセッサユニット装着！！」

当麻が唱えたのは女神に変身(イマジンハート)すつ為の女神の腕輪、起動ワードである。すると当麻の体が光に包まれる、そして光が晴れると黒髪のパープルハートと同じ服装を着た美人に変身した。

イマジンハート「守護(ハード)女神イマジンハート参上！！」

こんな自己紹介して恥ずかしくないのか、そう思うと、後ろの生徒会の人が全員驚いた

全員「「「「「えええええええええええええええええええええええ！！！！！！！誰なのこの人！！」」」」

イマジンハート「驚くのはわかるけど、まさかここまで驚くなんてね…」

イマジンハートが少し呆れると、ブレイブソードを構え直し、ファイアーテイルに向ける。

イマジンハート「あなた達を倒して、早く後ろの大物を引っ張りださないとね」

するとファイアーテイルが今度は2体で飛びかかる、がファイアーテイルが飛び掛る直前にイマジンハートは一瞬で姿を消した

加藤「消えた！」

加藤が消えたイマジンハートに驚くと、目標を失ったファイアーテイルはあわてふためいていた

イマジンハート「こっちよこっち」

朝霧「えっ・・・・・・」

生徒会全員が声をしたほうえを見ると、イマジンハートは空中にいた、女神は空での浮遊なだが可能なのである。しかしあくまでも女神化してる時だけだが

イマジンハート「今度はこっちの番よ」

するとイマジンハートが地面に降りてきて、ファイアーテイル2体にブレイブソードをもう一度構え・・・

イマジンハート「閃光斬（アクセルブレード）！！！」

一瞬の速さでファイアーテイル2体を斬りすてた、斬られたファイアーテイルは姿を変え、残ったのは2枚に割れた黒いディスクになった。

星風「わぁ～／／／／」

銀風「すごい…／／／／」

そしてさっきの剣技に星風と銀風が見惚れていた。

ファイアーテイル「グアアアアア！！！」

すると残りのファイアーテイル3体が今度は生徒会メンバーに向かってきた

加藤「やばい…このままじゃ…」

生徒会メンバーは突然の襲撃に反応できなかった。このままじゃ全滅…だったが…

ズバズバズババババババ！！！

今度は3体のファイアーテイルが一瞬の内に切り捨てられた、切り捨てられたファイアーテイルは黒い割れたディスクとなる。

イマジンハート「私の仲間に手をださないで」

ファイアーテイルをすべて討伐すると、今度はモンスターの親玉、ナルガクルア似のモンスターもといガルウルフが前に出てくる

イマジンハート「あなたが親玉ね」

するとガルウルフが突然、疾風の速さでとびかかり攻撃を仕掛けた、そしてその一撃をイマジンハートは避ける

イマジンハート「速さも姿も本当にナルガクルガに似てるわねこのモンスター！」

そしてイマジンハートが避けた後にすぐ態勢を整え、ガルウルフと距離を一気に詰める

イマジンハート「行くわよ！充電（チャージ）！！」

今度はイマジンハートのブレイブソードから赤き光が宿る、豪神斬（ブレイブクラッシャー）と比べて少し小さい赤い光が宿る、赤き光が宿るブレイブソードを

ガルウルフに構える、そして……

イマジンハート「覇王撃（ゼロインパクト）！！」

イマジンハートがブレイブソードをガルウルフに向けて一撃を放つと、ブレイブソードはガルウルフの体を大きく吹き飛ばした。吹き飛ばされたガルオルフは大きな校庭に何度も叩きつけられる。しかしガルウルフは気づずいた体を持ち上げて、イマジンハートに牙をむける

イマジンハート「結構しぶといわね、しぶとさもやっぱりナルガクルア並ね……でも」

そうするとガルウルフがイマジンハートに牙を立て噛みつきを仕掛ける、が……

イマジンハート「これで本当に最後！！」

ガルウルフが噛みつきを仕掛けるよりもイマジンハートの右拳がガルウルフの顔面を捉えた、そしてガルウルフは大きく吹き飛ばされる…そして

ドカン！！

学校の壁に大きく激突する。ガルウルフは動かなくなり、砂煙が引く頃には割れた違法ディスクに戻っていた、するとイマジンハートが生徒会メンバーに黒く長い髪を鬱陶しそうにどかす。そして生徒会に向けて言い放つ

イマジンハート「早く戻りましょ、生徒会に」
そういってイマジンハートの体が光に包まれた。

＜高貴高覧学園：生徒会室＞

さっきの騒動が終わり、現在時刻は午後６時という完全に夕方だった、イマジンハートが壊した壁などはすぐ直せるためどうとでもなるようだが、今の問題はそれでは無く違法ディスクという犯罪組織が残した負の遺産が問題だった。

加藤「当麻……いや女神様、助かりました。」

銀姫「転校早々に迷惑かけちゃったね」

朝霧「まさか本当にお前がな…いやうそです女神様」

星風「美しかったよ女神様！」

生徒会メンバーがお礼を口にする。

当麻「やめてくれよ女神様なんて、俺はそんなに立派じゃ無いし、今まで通り当麻で十分だよ。」

当麻が生徒会にいうと、生徒会も

加藤「それじゃいままで通り呼び捨てで呼ばせてもらうよ当麻……さて、それよりも」

加藤が深く顔を下げる、おそらく会長が考えているのは、違法ディスクは高貴高覧学園にまだ眠っているという事だ、回収しようにもそれはそれで生徒に悪用する輩がおそらく出てくるから生徒会で何とかしなければならないのだ

朝霧「当麻」

当麻「どうしたんだ、朝霧」

朝霧が真剣な顔で上条を呼ぶと、朝霧は土下座してこう言い放った

朝霧「当麻、この問題が終わるまででい、この生徒会に入ってくれ！お前の力が必要なんだ！」

突然、朝霧が土下座をした事には驚くが、当麻は意味をしっかりと理解すると朝霧だけじゃ無く生徒会全員に言い放った

当麻「俺は生徒会に入る、そして一刻も早くこの問題を解決しようぜ」

生徒会メンバーが当麻の返答に驚くと、生徒会長の加藤が手を出した、そしてこう言い放つ

加藤「生徒会へようこそ、当麻」

当麻「ああこちらこそ」

二人が握手をする、そして当麻は生徒会に加入した

＜ネプテューヌの家＞

あれから2時間経って、当麻はもうネプテューヌの家に帰宅していた、そしてネプギアとネプテューヌに今日の事を報告した。

ネプギア「違法ディスクですか……」

ネプテューヌ「それも様々な都市にばらまかれたと…」

当麻「ああ、幸い変身してなんとかしたけど、このままじゃ…」

ネプギア「はい、私が当麻さんの学校に待機してます。それならいつディスクの問題が発生しても安心ですし、被害も…」

当麻「そうだな、サンキューなネプギア」

違法ディスク問題はどんどん大きくなっていった、そしてまた明日の学校でも…

余談だがイマジンハートにファンクラブが設立されたらしい

＜高貴高覧学園：用具室＞

???「くそ～いつもみんな僕をいじめやがって…くそくそくそく

そくそ！！」

暗い学園の中にある一つの部屋の用具室にいり学生服がボロボロな学生が言葉を放つ、すると学生が薄暗い用具室である物を見つける。

？？？「おい、まさか…この黒いディスクは…」

この学生がこの用具室で違法ディスクを見つけた。すると男は狂った笑いをする。

？？？「ハハハハハハ！！これで僕はもういじめられない！まさか違法ディスクを5枚も見つけるなんて…明日学校で…楽しみだな…ハハハハハハ！！！！」

夜の学校の中に狂った笑い声が響いた

～～～～～～～生徒会のメンバー～～～～

朝霧裕也

星風麗

銀姫麗奈
クラス２年４組
年齢１６歳
職業：高校生、生徒会副会長
容姿：ディスガイアのフロンの髪を白にした状態
成績：学年トップ
スリーサイズ７７／５４／８１

好きな物：甘いお菓子、おもしろい物、親切な人
嫌いな物：唐辛子
備考：高貴高覧学園の生徒会長で性格はディスガイアのフロンと殆ど同じ、でも愛とかは言わない、成績もかなり優秀で学年では常にトップを保っている。実は暗い所も嫌いだという、自分の体に自身を持っていないらしく、スタイルが良く巨乳のイマジンハートに憧れを持っている

加藤零時
クラス２年２組
年齢１６歳
職業：高校生。生徒会会長
容姿：灼眼のシャナの坂井祐二そのまんま
成績：良
好きな物：本、生徒会、生徒、酸っぱい物
嫌いな物：人を傷つける人
備考：高貴高覧学園の生徒会会長、人当たりが良く、優しい為生徒に絶大な支持を得ている、隠し事があるらしいが誰もしらないらしい、同じくイマジンハートに憧れを持つ

7話：平和な学校生活・・・になるわけないよなｂｙ上条当麻　（後書き）

魔界魔「次回は本編で紹介したと思うんですけど、もう一度上条当麻とイマジンハートの紹介をします。」

ブレイブ「なぜだ？」

魔界魔「二人共、色々と設定を詳しく説明したり変更したい部分もあるので、それではさよなら」

上条当麻とイマジンハートの紹介

魔界魔「それではさっそく紹介し直したいと思います。」

上条当麻
職業：高貴高覧学園生徒、守護女神
性別：男性
容姿：中肉中背でやや筋肉質で黒髪ツンツン頭
性格：めんどくさがりだが熱血漢で敵にさえ手えお差し伸べる程のお人良しであり善人
守護大陸：自由（現在当麻がいる大陸は守護の力が強化される）
レベル：１８００
戦闘能力：？
武器：ブレイブソード（剣）
補助装備：女神の腕輪（イマジンハートに変身できる。）
備考：この作品では元、学園都市の少年で無能力者（レベル０）だが右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）というあらゆる異能を打ち消す力を持つ、魔術師クリア・ステインの持つ黒い水晶のせいでゲイムギョウカイに訪れる、そこでネプギアと共闘し犯罪組織を全員倒し（一人は和解）女神救出した功績により、４人の守護女神により、守護女神に任命された（強制的にだが）性格は優しく熱い熱血漢で敵にさえ手を差し伸べる善人であり死亡フラグクラッシャーでありフラグ建築士でもある。戦闘では幻想殺し（イマジンブレイカー）を使い、異能な力を打ち消して戦意を喪失させそして必殺の右拳で相手を倒すスタイルだが無意識に「前兆の予知」という技能を持っており、相手の攻撃を先読みし臨機応変に戦うスタイルである。そして異常なタフネスと不屈で相手を追い込む為どんな相手にも互角に戦う事ができる（その為戦闘能力は？である）ただ自分より身体能力が自分より高い相手には弱い、そして自他共に認める

不幸体質である。ただそれは本人が人の不幸を止めるという上条にとっては幸運としてみられている。現在は守護女神という一番偉い立場に困惑していたが現在は落ち着いた様子、またゲイム業界ではヒーローまたは伝説の人間女神と呼ばれかなり信仰されている。（また当麻はシェアの効果を受ける為、身体能力の弱体化もある）その為普段の身体能力は土御門より上の部分、また守護女神全員と仲が良く、ネプテューヌの家に居候している。また神界に立ち入りもできる。また上条の装備している女神の腕輪には当麻にしか外せないまた女神の腕輪自身にも制約があり条件を満たしてないと女神化できない。

女神の腕輪の制約

・男性にしか使用不可である。

・女神化する時は精神力を集中させないと暴発を起こしてしまう為、強い精神力が必要になる。

・超能力や魔術を覚えている相手はこの腕輪を使用できない（幻想殺（イマジンブレイカー）しは例外）

能力：幻想殺し（あらゆる異能な力を打ち消す、ただし効果範囲は右手のみ）

不屈　（どんな絶望にも立ち上がりそれを守ろうとする力）

前兆の予知（相手の行動を無意識に先読みし戦闘する技能）

女神化（女神の腕輪により女神イマジンハートに変身する）

信仰力（シェアによって力が増大される）

不幸（不幸になる）

臨機応変（どんな相手にも優れた戦闘体制を取る事で互角に戦闘できる）

イマジンハート

職業：守護女神（ハード）
性別：女性
容姿：黒髪長髪でパープルハートと同じレオタードの衣装で美人
性格：上条当麻と同じ、しかし変身後は無意識に女性口調と思考に
守護大陸：自由（現在当麻がいる大陸は守護の力が強化される）
スリーサイズ：８８／５７／８５
レベル：３７００
戦闘能力：？
武器：左、ブレイブソード　右、ブラックグローブ
補助武器：疾風雷刀（ハイボルテージ）（短剣）
備考：上条当麻が女神化した姿、普通の守護女神とは違い、思考や口癖が変わっただけで人格は上条当麻のままである、普通の守護女神と同じくプロセッサユニットを装着している為、空も飛べるまた女神化した事で身体能力が遥かに上昇して聖人を圧倒できそうな程の能力を持っている戦闘スタイルは上条と変わらず臨機応変なスタイルで戦う為身体能力が上がった分遥かに強力になった、しかし幻想殺し（イマジンブレイカー）が弱体化してしまうのが弱点で、打ち消せるのは、せいぜいスティルの放つ炎の炎剣ぐらいの強さだが、余り強さが関係ない一方通行（アクセラレータ）の反射や自分の右手を巻き込む術式である。「天罰術式」などは普通に防げる、戦闘能力は上記のように高く、一対一の戦いは大の得意で一対一の対決なら守護女神の中でも一番強い、だがその逆の多人数との対決はさほど得意では無い、戦う時は普通の時と違って、パープルハートと同じく刀剣を使用して戦う、普段は一刀流だが本気を出す時は二刀流になる。またこの姿の時には剣を使い魔法を斬り裂く事もできる。（幻想殺しが弱体化してしまった為、打ち消すのでは無く切り裂く事しかできない）（イマジンブレイカー）またこの姿では無闇に右手に頼らなくなった。また恐らくこの姿をインデックスや御坂に見せると恐らく攻撃されるだろう（嫉妬による物）そしてネプテューヌと同じくらい普段と変身時では変化が大きい（性別自体変わってしまう為）また他の女神の例に漏れず、ス

タイルも良く守護女神の中で2番目に胸が大きい

能力：幻想殺し（あらゆる異能な力を打ち消す、ただし効果範囲は右手のみ、しかも女神時は弱体化）

不屈　（どんな絶望にも立ち上がりそれを守ろうとする力）

前兆の予知（相手の行動を無意識に先読みし戦闘する技能）

臨機応変（どんな相手にも優れた戦闘体制を取る事で互角に戦闘できる）

信仰力（シェアによって力が増大される）

浮遊（プロセッサユニットによって空を自由に飛べる）

魔界魔「変に直してあったらすいません、それでは」

上条当麻とイマジンハートの紹介　（後書き）

魔界魔「次回はちゃんと本編に戻ります」

ブレイブ「それではさよならだ」

8話：人が人をいじめるのは自分が弱いからだと俺は思うｂｙ朝霧裕也（前書き

魔界魔「今回も始まります！！」

ブレイブ「テンション高いな…」

魔界魔「そんな事はどうでもいいんだよ！とっとと始めろコメント係！」

ブレイブ「お前がやれ！この駄目作者！！」

魔界魔「なんだと！！良し決着つけてやろうじゃないか！！」

ブレイブ「上等だ！！」

ネプギア「ハハハ……始まりますよ」

8話：人が人をいじめるのは自分が弱いからだと俺は思うｂｙ朝霧裕也

＜高貴高覧学園・１－１教室＞

前日の違法ディスクの中のモンスターの暴走があって、この高貴高覧学園でも体制を取るようになった。昨日はたまたま上条の手によってモンスターは駆逐されたものの、今後は戦えない生徒が危険にさらされる為、生徒会はまず生徒全員に護身銃の所持を許可（ただし弾は生徒会が所持しており、生徒会の許可をもらい弾をもらう必要がある）また上条は特例としてブレイブソードの携帯が許されている。また違法ディスクを見つけたら触らずに生徒会に連絡し回収する。という注意を呼びかける、見つけた違法ディスクは上条がすべて処分する対策を取った。

そして話が変わるが、現在は授業が終わり昼休みである。

朝霧「……という訳だ。」

上条「いきなりそんな事言われてもわかんないんだけど…」

上条がいきなり変な事をいう、生徒会の一人である朝霧裕也に困っていた。

星風「詳しくは一番上の文章を・・・」

上条「ちょっと待て！いきなり出て来てメタ発言かよ！」

読者の諸君は分かると思うが、メタ発言というのは、作品の中に関わらず、現実の事をホイホイ口にする事である。よく知りたいのな

ら〇タルギアをプレイすれば分かるかもしれない…と冗談はここまでにして話を戻します。

上条「とりあえず…メタは置いておいて、生徒会が対策取ったって？」

上条が朝霧と星風に聞くと、二人はお弁当を取り出してから、上条に言う。

朝霧「ああ、昨日の事件は直ぐに先生の耳に入ってな、さっそく態勢を取る事にしたんだとさ」

朝霧がお弁当のタコさんウインナーをパクっと口に放り込む

当麻「でもなんでわざわざ生徒会にそこは普通に先生の方で態勢を取るべきじゃ…」

するとお弁当を食べていた星風がいじわるそうに言う

星風「それは当麻君が一番わかってると思うよ、だよね？女神様」

すると上条が少しいやそうな顔をして、いつの間にか出していたお弁当を食べる

当麻「ハァ……あの時の事だろ…」

当麻は何かを思い出したように嫌そうな顔をする。一体何回嫌そうな顔をするんだ、とか突っ込まないでほしい、当麻がいうあの時というのは昨日の事件にイマジンハートに変身してモンスターを討伐した事だろう。実はあれを一人の生徒に壁を空けた時に見られてし

まい真実は瞬く間に広まりファンクラブまでできた程だ、おそらく守護女神（ハード）である当麻がいる生徒会の方が先生方で対策を取るよりも安全と考えたのだと思う。

朝霧「でも良かったな昨日の件でお前が本当に噂の守護女神（ハード）である事が証明されたな」

当麻「……あの姿だけは見られたく無かった…他の生徒に…」

当麻は変身をどうやら他の人に見せたくなかったらしい、ついでに学園に真実が広まってからはイマジンハート様と呼ばれるようにもなった（当然だが本人はやめてほしいと思っている）また現在当麻と呼んでくれるのは生徒会のメンバーだけである。

星風「でもよかったじゃん、これで学園の立派な有名人（アイドル）だよ」

上条「おい、さっき有名人と書いてアイドルと言わなかったか！？」

当麻が突っ込むが見事にスルーされる。

朝霧「それよりも授業が終わったら、生徒会だぞ今日は違法ディスクを学園から探すみたいだし」

すると当麻がまたまた嫌そうな顔をする、それもそうだ違法ディスクを壊すのは当麻である最悪の場合また女神化するようになってしまう、当麻はそれだけは避けたかったみたいだ

星風「また当麻君の変身を拝めるかもしれないね」

当麻「ハァー……不幸だ…」

星風が嬉しそうに言って、当麻は溜め息を吐く、

朝霧「ま……違法ディスクも俺達で力を合わせればなんとかなるだろ、がんばろうぜ！当麻、麗」

朝霧がお弁当を食べ終わり、大きな声でいう。

当麻「そうだな……いつまでもクヨクヨしてたらしょうがないし…がんばろうぜ朝霧！」

朝霧「おう！」

当麻もお弁当を食べ終わり朝霧と肩を組む、そしてそれを少し羨ましそうに見る星風

星風「仲良いね二人とも…それよりも早く席に戻ろうか、授業始まっちゃうし…」

当麻「そうだな」

朝霧「ああ、じゃあな当麻」

二人が離れ席に戻ろうとする、そしてもう直ぐ授業が始まる…と思ったとき

「キャアアアアアア！！！！！」

当麻・朝霧・星風「「「！？」」」」

突然、廊下から女の叫び声が聞こえてきた、悲鳴が聞こえると、１－１教室はザワザワと騒ぎ始める、そして当麻、朝霧、星風は…

当麻「朝霧！…まさか！」

朝霧「ああ、多分そのまさかだよ！星風、お前はここで生徒全員を静めてくれ！」

星風「う……うんわかった！当麻君、裕也、気をつけて」

朝霧・当麻「「おう！！」」

そして二人は勢い良く、廊下に出て行った。

＜高貴高覧学園：１年教室側廊下通路＞

女生徒「…た……助けて…」

女生徒が足を崩し、大きく怯えてきた、目の前には昨日とはまた違うモンスターがいた。そのモンスターは生徒に襲い掛かってもおかしくない程、殺意を放っていた

モンスター「ウウウウウ……」

モンスターはどんどん生徒に近づいている。このモンスターは恐らく白い体毛を持ち、ゴリラみたいな体系をしたモンスターで名前はスノウコンガという。

モンスター「アアアアアア！！！」

生徒「キャアアアアアア！！」

スノウコンガは生徒に向かって、パンチを仕掛ける、ゴリラの一撃を一般の人が喰らったら軽症じゃすまないだろう。しかし生徒は腰を抜かして避けられる余裕なんて無かった、すると……

グサ！！

生徒「えっ……」

生徒はいきなりの光景に驚いた、いきなり剣が飛んできてスノウコンガの体に刺さって血を出していた

スノウコンガ「ガアアアアアア！！」

スノウコンガが怒って暴れだす、そしてもう一度生徒に大きな拳でのパンチを繰り出す。がパンチは生徒には当たらなかった、いや何故かスノウコンガが少し後ろにいつの間にか後退してた。そして生徒の前に立っていたのは…

当麻「大丈夫か！？」

ツンツン頭の黒髪少年である上条当麻である。そしてもう一人…

朝霧「俺はおまけか！！…ってそんな事よりも早く安全な所へ！」

朝霧が女生徒を保護すると、今度はスノウコンガがおそらく一番最初に目に入った相手当麻に目をつけた、そして当麻に豪快なパンチ

を仕掛ける…が

当麻「そんなもん、あたんねぇよ！！」

当麻が軽々と一撃を避けると、今度は当麻がスノウコンガの右に回りこんで拳を構える

当麻「喰らえ！」

当麻の一撃をスノウコンガはモロに受けると、スノウコンガは倒れ黒いディスクにはならず消滅した。

朝霧「黒いディスクにならないで消滅した……一体どうゆう…？」

朝霧が混乱するが、おそらく原因は上条の右手の力「幻想殺し（イマジンブレイカー）」とりあえず分からない事はいっぱいあるが、とりあえず被害が無かった事に安心する、当麻と朝霧

当麻「で……それよりもあの子は大丈夫だったのか？」

朝霧「あの子ならもういないよ」

朝霧の話によると、襲われていた生徒は怖くて保護されてそのまま逃げ出したようだ

当麻「ま…問題は片ついたし…早くもどろうか」

朝霧「ああ、そうだな…」

二人が問題もかたずけ教室に戻ろうとすると…

???「何してんだよ……」

当麻・朝霧「「！！」」

朝霧と当麻が教室に戻ろうと後ろを振り向くと、そこには眼鏡をかけた気弱そうな男が立っていた

???「お前等が……邪魔したせいで…仕留めそこなった…全部お前等の所為だァァァァァ！！」

すると眼鏡を掛けた男はポケットから４枚の黒いディスクを取り出す。

当麻「そのディスク…まさかさっきのモンスターは！」

朝霧「お前の仕業か！」

朝霧と当麻が眼鏡を掛けた男に敵意を露にする、そして眼鏡の男が１枚のディスクを地面に投げ捨てると黒い投げ捨てられたディスクは黒い光に包まれる、そしてディスクから１体のモンスターが姿を現す

モンスター「ガアアアアアア！！！！」

現れたモンスターは竜王バハムート、ちなみにＦＦ４にでてくるタイプである。

朝霧「おい……当麻……こいつ…」

朝霧が現れたバハムートに威圧され、後ろに自らも分からない内に後ろに後退していた、でも当麻だけは違った、当麻は一歩も動かないで立っていた。

当麻「朝霧……怖いのならさがってくれ…ここは俺がやる」

そう言うと朝霧が一言も言わずに後ろに下がる、おそらく自分じゃ当麻の力になれない…そう思ったんだろうか。

???「僕を邪魔したお前が悪いんだぞ!!!さぁ…跪け!そして僕を崇めろ!!そうすればお前を見逃してやってもいいぞ!ハハハハハハハ!!」

眼鏡男が狂った笑いえをするが、当麻はそれを無視しただ目の前の相手竜王バハムートをどう倒すか考えていた

???「お前が強いのは分かった……でもお前如きが竜王バハムートに勝てる訳が無いだろう!!ハハハハハハ!!!」

狂った眼鏡の男は当麻は完全に格下に見ていた、が当麻はそれに返答するように言い放つ

当麻「そうだな……たしかにこのままじゃこいつには勝てない…」

朝霧「えっ……」

朝霧が驚く、当麻が弱気の所を見せるなんて珍しいからかもしれな

い、だが当麻の表情は変わっておらず、あきらめているようにも見えない顔でもう一度言い放つ

当麻「そもそも空を飛んでいる相手になんて、普通の人間が…唯の高校生が勝てる訳が無い…」

???「……何がいいたい」

当麻「でもな……抗う事くらいはできるだろ……戦いには勝てなくても少しくらい抗う事くらいはできるだろ……お前にそれを見せてやる…結局最後に勝つのは抗った方だってさ…」

???「ハハハハハ、唯の高校生がこのバハムートに勝てる訳が無いだろう!!抵抗するというのならお前を先に始末してやろう!!行けバハムート!」

バハムート「ギャアアアアアアア!!!!」

眼鏡男が命令すると、バハムートは口が赤くなる、おそらく炎のブレイでも放つのだろうか、なんにせよこんな一撃を喰らったら普通の人はもちろん女神でもひとたまりもない筈だ、が当麻は一歩も恐れる様子を見せる、そして微かに笑い右腕を上げる、そうこのポーズは……

当麻「プロセッサユニット装着!!」

上条に女神化起動ワードと共上条に光が包む

???「なっ……一体なにをする気だ!!」

すると光が晴れると、そこに立っていたのは先ほどの男性では無く、黒く長い髪にレオタードみたいな衣装、そして頭にゲーム形をした髪飾りをつけた美人が立っていた

???「き……貴様は誰だ！！！」

眼鏡の男が驚くと、黒い髪をどかしそこに立っていた美人は言った

イマジンハート「どこかの頭がバカでお人よしな不幸な女神様よ」

ボロボロになったこの廊下通路に女神が降り立った、すると眼鏡男が焦った表情を浮かべ

???「な…なんだと……貴様があの伝説の人間女神…」

すると焦った眼鏡男はバハムートに指示を下す。

???「こ……殺せ！！今すぐにバハムート！！」

するとバハムートが口から巨大な炎の塊はイマジンハートに向けて放つ、しかしイマジンハートはさっきのスノウコングに使ったブレイブソードを回収していなかった、だが今はとりに行く暇も無い、だがこの一撃をかわしたら後ろの教室にまで被害が出てしまう

朝霧「当麻！！！」

朝霧が呼びかけるが、イマジンハートは一歩も動かない

???「は……はは……どうやら対処できないようだな…そのまま死ね！！」

眼鏡男は勝ち誇った顔をする……が…

ズバッ！！！！

巨大な火炎弾は一撃で真ッ二つになり消滅した、そして一瞬の早さでバハムートに近づき…首を切り落とした

？？？「馬鹿な……バハムートが一撃で……」

驚く眼鏡男にイマジンハートは右手にブレイブソードとは違う剣を持っていた、その剣は少し小さく小さい刀を二つ組み合わせたくらいの大きさだった。

イマジンハート「この剣は「疾風雷刀（ハイボルテージ）」といって使用者の素早さを上げる刀…わたしがあの剣一本しか持ってないと思ったら大間違いよ」

そしてイマジンハートは目の前の眼鏡男にいい放つ

イマジンハート「こっから先は本気だすから命の保障……できないわよ。」

イマジンハートは「疾風雷刀（ハイボルテージ）」を構えていい放つ、ただ目の前の男を倒す為に

～～～～～～短編集～～～～～～

＜女神様の体＞

星風「ねーねーイマジンハート様って胸大きくない？」

イマジンハート「胸？私胸の大きさの基準とか知らないんだけど…」

銀姫「見た感じだと…巨乳…よね…」

星風「やっぱり触ってみるのが一番かな…」

銀姫「そうね…確認するにはやっぱり触った方が…」

イマジンハート「ね…ねえ…なんで二人ともこっちを見るの？…それも獣を狙うような目をして…」

星風「よし！その豊富な胸を私に触らせてくださーーーーーーーーい！！！！」

銀風「私にも！！！！」

ドカバキドコボカバキィ！！

イマジンハート「以後、気をつける様にね二人とも？」

星風・銀風「ハイ…すみませんでした…（ボロボロ）」

8話：人が人をいじめるのは自分が弱いからだと俺は思うｂｙ朝霧裕也（後書き

ネプテューヌ「どうも～プラネテューヌの守護女神、ネプテューヌだよ～」

ネプギア「あれお姉ちゃん…作者さんとブレイブさんはどこに…？」

ネプテューヌ「あそこ」

魔界魔「……（血だらけ）」

ブレイブ「……（焼けていた）」

ネプギア「二人に一体なにが！？」

ネプテューヌ「…それよりもこのバカ二人は放っておいて…この学園編では当分出番が無さそうだから、この章ではコメント係に回ったの」

ネプギア「ハハハ……しばらくここでお世話になります。それでは今日はこの辺で…」

ネプテューヌ「次回も見てね～」

9話：目の前の事から絶対に逃げない！！byイマジンハート（前書き）

ネプテューヌ「今回はイマジンハートがピンチに！？」

ネプギア「ネタばれはだめだよ、お姉ちゃん」

ねぷテューヌ「始めるよ～」

9話：目の前の事から絶対に逃げない！！byイマジンハート

ここにいじめられている少年がいる。しかしあなたは臆病である。
それでもその子を助けるか。
ここに困っている少年がいる。しかしあなたは今、自分の事で精一杯だ、それでも助けるか。
ここに泣き叫ぶ少年がいる。しかしあなたはその子の為にできる事はない、あなたならどうする？
……当然、普通の人ではこれらを何一つ解決する事なんてできないだろう。でも今ここで戦っている少年は右手に不思議な力しか持ってないそれ以外はただの高校生なのに、これらを解決してしまう。
それはなぜか？それはだな……

ーけっして目の前の事から逃げないからー

＜高貴高覧学園：イマジンハートＶＳ眼鏡学生＞

イマジンハート「早くかかってきなさい…早く終わらせたいの」
すると眼鏡学生が鬱陶しそうに言う
眼鏡学生「どいつもこいつも……力のあるやつはみんなそうだ……みんな寄ってたかって力の無い奴をいじめる……」

イマジンハート「……？」

イマジンハートは何と言ったのか聞こえなかった、すると眼鏡学生が1枚の違法ディスクを取り出す

眼鏡学生「現れろ！モンスター！！」

すると眼鏡学生が持っていた違法ディスクが黒く光モンスターを生み出す

眼鏡学生「白い鱗を持つドラゴン！アイスドラ！」

アイスドラ「グァァァァァァ！！！」

アイスドラと呼ばれるモンスターが黒き光の中から生み出された、白い鱗を持つドラゴンの姿をしている。おそらくルウィーに住んでいるモンスターの一種か、でもどちらにしろこのモンスターを野放しにしていたらこの学校はさらなる被害が出る、それだけは避けたかったのだ。

眼鏡学生「アイスドラ！お前はあそこに隠れている生徒会の一人を狙え！！」

イマジンハート「えっ！？」

イマジンハートは驚いた、狙いは自分でも無く、周りにいる無関係な生徒でも無い、ただ近くにいた自分の友人であった。

アイスドラ「ググググァァァァァァ！！」

アイスドラが白いブレスを吐く、それはやはり朝霧を狙って吐かれたもので、少しでも当たった所が白く染まっていた、しかしイマジンハートが今、朝霧にできる事それは……

イマジンハート「危ない！！」

イマジンハートが朝霧を強引に押した、当然、朝霧には氷のブレスは当たっていなかったが、逆に言えば朝霧を助けた人物はこの一撃を喰らう。

ドガン！！！

氷のブレスがイマジンハートに命中する。

イマジンハート「……ア…ッ…」

声にならない声を上げるイマジンハート、今の一撃で一時的に視覚、聴覚、感覚は消えた筈だ、そして白い煙が晴れる、押し倒された何とか立ち上がった朝霧がそこで見たのは……

朝霧「当麻ーーーーーーーーーー！！！！」

朝霧がそこで見たのは、レオタードの様な衣装が凍りつき、露出していた肌もすこし白かった、そして黒く風にゆれる長い髪も完全に凍りつき触っただけで割れるんじゃないかと思える程になっていた。それどころが意識があるのかも分からない。朝霧が最後に目に入ったのは地面に落ちていた凍りついた疾風雷刀（ハイボルテージ）だった。

眼鏡学生「ハ…ハハ…勝ったぞ…女神に勝ったぞ…俺に…もう…怖

いものは無いぞ…ハ…ハハ」

眼鏡学生が歪んだ感情を表に出し続ける、そして朝霧は彼に巨大な怒りを向ける。

朝霧「この野朗……」

朝霧が小さく暴言を吐いた、普段の温厚な彼ならありえない事だった、だが彼はそれ程くやしかった、何で自分を守ってくれた相手がここまでバカにされなくちゃならないのか朝霧は怒りを抱く

眼鏡学生「フフフ……何を怒ってるんだよ…君ごときが今何をできるというんだい…」

朝霧「ク……クソったれが！」

朝霧が悔しかる自分の余りの無力に目の前にいる友人一人救えない自分に嫌という程の感情を持つ

朝霧「（俺には何もできないのか……たった一人の友人を救えないなんて…）」

朝霧が絶望してる中、ゆっくりとアイスドラが近づいてくる、標的は唯一人、生徒会の一人、朝霧裕也。

眼鏡学生「アイスドラ……生徒会なんてこの学校にいらない…なぜなら…それは…この学園は俺が統一する。いじめの無い…平和な学園にする為に！！」

すると眼鏡学生の言い放つ言葉に驚く朝霧

朝霧「（えっ……まさか…こいつ…）」

朝霧は今の言葉を聞きたった一つの事が頭に浮かぶ、この少年をここまで歪ませた原因を

眼鏡学生「殺せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

しかしアイスドラの行動の方が朝霧が考えるより遥かに早かったもう一度氷のブレスが放たれる。

朝霧「しまった！！」

しかし朝霧は反応できずにそのまま立ち尽くしてしまう。このままでは朝霧は氷のオブジェになってしまうそう思った……

スバッ！！

何かが氷のブレスを叩き割り消滅した。朝霧の目の前に立っていたのはある人物ピンクの髪に見た目的には中学生の体系の少女…ネプギアだった。

ネプギア「大丈夫ですか？」

ネプギアが立ち尽くしていた朝霧に問いかける。

朝霧「あ…ああ、大丈夫…でも…君は…」

朝霧が質問すると、ネプギアは剣を下に向け朝霧に言った。

ネプギア「私の名前はネプギア、この大陸の女神候補生です。」

朝霧「女神候補生？じゃ…あなたも女神様ですか？」

ネプギア「候補生ですけどね…ってそれよりも当麻さんは！？」

ネプギアが慌てて当麻の場所を聞くと、返答を聞く間も無くある人物がユラユラと静かに歩いてくる。

イマジンハート「私なら……ここよ……」

白い息を苦しそうに何度も吐くイマジンハートが疾風雷刀（ハイボルテージ）を持って歩いてきた

ネプギア「当麻さん！大丈夫ですか！？」

ネプギアが心配そうに聞くが、イマジンハートは苦しそうだが「ええ」と一言言ったそしてさっき拾ったらしいブレイブソードと疾風（ハイボ）雷刀（ルテージ）を右手と左手に両方構える。

イマジンハート「ネプギア……行くわよ準備はいい？」

イマジンハートが聞くといつの間に女神化を済ましたネプギアが武器を構える。そして二人の女神はアイスドラに向かっていく。

眼鏡学生「くそ！殺せ今すぐに！！！」

眼鏡学生がアイスドラに命令すると、アイスドラはあの氷ブレスを口に溜め込み一揆に放出した。

イマジンハート「同じ技は……二度は聞かないわよ！！」

イマジンハートは疾風雷刀（ハイボルテージ）で氷のブレスを切り裂く

眼鏡学生「くそ！死に底無いの分際で！」

眼鏡学生が焦りの表情を見せる。しかしこうしている間にはもう…

パープルシスター「行きます！爆炎剣（ファイアークラスター）！！」

パープルシスターの持つ武器はアイスドラを一瞬で切り裂き、大爆発を起こし消滅した。

眼鏡学生「何！？」

眼鏡学生が完全に冷静を失った、そしてこの隙に走ってきたイマジンハートに眼鏡の学生は思いっきりつかまれる

眼鏡学生「は……離せ！僕に触るな！！！」

眼鏡学生が触られるのに過度な拒絶反応を起こす……が

イマジンハート「歯を食いしばりなさい！！！！」

ゴシャ！！！

イマジンハートの右こぶしに殴られ思いっきり眼鏡学生は飛んでいく、そして壁に激突して違法ディスクと掛けていた眼鏡を落とした

朝霧「……終わったな」

朝霧がそう言うと、眼鏡の男は眼鏡を取らずに立ち上がる、そして言い放つ

眼鏡学生「なんでだよ……みんな寄ってたかって俺をいじめる…所詮は力のある奴なんてみんなそうだ…力があるから俺みたいな弱い奴をいじめて楽しんだろ！！！」

眼鏡学生が言い放った言葉にようやくイマジンハートと朝霧はすべてを理解した。この少年がここまで歪んだのはいじめに耐えて耐えた結果だった。そして眼鏡学生が言い放った言葉は感情の塊なんかじゃない、無意識の内に助けて欲しいという訴えだった。

眼鏡学生「だから俺がこの学校を支配して作ってやる！！弱い奴がいじめを受けない学校に！」

その言葉にパープルシスター、朝霧は黙り込む、唯一人を除いて……

イマジンハート「それは違う」

眼鏡学生「何！？」

突然、イマジンハートの言った事に眉をひそめた眼鏡学生

イマジンハート「あなたがいじめにあってたのは……弱いからじゃない…本当に弱かったのなら…すでに生徒会や誰かに助けを求めていた筈」

イマジンハートは言った、眼鏡学生が弱い訳では無いという意味にパープルシスターと朝霧はチンプンカンプンになる。

イマジンハート「あなたは弱いんじゃ無くて怖かっただけ…唯誰にも救って欲しいなんて一言も言えない臆病者なだけ…」

眼鏡学生「臆病者……」

イマジンハート「だったら泣きすがろうが、鼻水たれながそうが、どこにでも頼ればよかった。別にそんな事をされて笑う相手なんて一人もいないんだから……」

眼鏡学生「……」

眼鏡学生は途端に無口になった、まるでイマジンハートの話に聞き惚れたみたいに…

イマジンハート「そしてそんな相手を私達は絶対に見捨てない！それがこの学園の生徒会だから！」

そういうと眼鏡学生の目に涙がこぼれだした、涙は地面にポタポタと落ちる、そして眼鏡学生は静かに言葉を放つ。

眼鏡学生「あり……がとう……本当に……ありがとう…」

眼鏡学生は泣きながら枯れそうな声で言い放つ、そしてイマジンハートはにっこりと笑って…

イマジンハート「これにて問題解決！さって…朝霧…やる事が一つ増えたわよ…あ…それと…」

イマジンハートが変身を解いたネプギアの方を向き言い放った…

イマジンハート「ありがとう、ネプギア」

そうゆうとネプギアも笑って戻っていった。

またこの後は問題を起こした眼鏡学生…本名、物時善弥は退学処分を受ける筈だったが…生徒会が協力して善弥の事をすべて先生に話した上で善弥をいじめていた生徒全２０名に話を聞く（その内１２名は強引に吐かせた）それにより善弥は停学１週間に免れた、またいじめられていた生徒は１ヶ月の停学処分となり。損壊した学園の修理は先生がすべて負担した。また善弥は去り際にもう一度「ありがとう」とお礼にいいきたのは別の話。そして明日にはまた新たな不幸が待っていた・・・・・・

～～～～～～～短編集～～～～～～～

＜学園の人気者＞

朝霧「当麻、またお前昨日の騒動で人気者になったな」

星風「すごいね！このままどんどん人気が上がって来るんじゃない？」

当麻「なんだろう…全然嬉しくない…」

星風「それに写真が秘密裏に販売されてたりもするし…」

当麻「おい待て！じゃその写真はだれがどこで…？」

朝霧「青いコートを着た人物が撮ってた、名詞には…魔界魔と書いてあるけど…」

当麻「あいつの仕業かあああああああ！！！！！」

星風「うわ！当麻君のキャラが崩壊した！！」

＜女神様の体２＞

銀姫「当麻君、服破れてるよ」

イマジンハート「えっ…本当？」

星風「うん、後ろの部分が結構破れてるよ」

イマジンハート「でも自動再生するから大丈夫だと思うけど…」

銀姫「だめだよ！見てるあたし達が安心できない！服脱いでついでにスリーサイズなんかも・・・」

星風「銀先輩の言うとおりですよ！さっ脱いで脱いで！！」

ドカッバキィボコボコドカッボキッ！！！！！

イマジンハート「欲望が駄々漏れよ！この変態！！」

星風「そこまで言わなくても…ガクッ」

銀姫「本当ですよ…ジョークですよ…ガクッ」

イマジンハート「……ちょっとやりすぎちゃったかな…」

９話：目の前の事から絶対に逃げない！！ｂｙイマジンハート（後書き）

ネプテューヌ「そうだそうだ！魔界魔がこれの外伝書くって？」

魔界魔「はい、そしてその話はとあるオンリーなので残念ですけどあなた達の出番はカットです」

ネプテューヌ「プ～残念…今回はこれで終わりだよ！次回もよろしく！」

魔界魔「また次回は、他の大陸に旅行するかも？」

１０話：安らかな休息？なにそれ？おいしいの？（前書き）

；すいません、パソコンがぶっ壊れた、学校の行事などでトラブルが重なり更新が遅くなりました、すいません。できるだけ更新を早くできるようにしたいと思います。

１０話：安らかな休息？なにそれ？おいしいの？

＜ルウィー＞

当麻「…この大陸って年中ずっと寒いのか…ハクシュン！！」

当麻が豪快にくしゃみをする。いきなりだが現在プラネテューヌの女神二人と当麻はルウィーに来ていた…えっ？学園編はどうしたって？…実は今の季節は夏だから現在は夏休みなのさ…多分…とにかく3人の女神はルウィーに訪れていた。

ネプテューヌ「夏にはやっぱりいいね♪涼しいよ」

ネプテューヌは元気そうだ、どうやら寒さには強いらしい、ただネプギアの方はやっぱり寒そうだった。

ネプギア「寒いですね…お姉ちゃんは大丈夫みたいですけど…当麻さんは大丈夫ですか？」

当麻「ネプギア、上の文章見て、俺が暑いと思うか？」

当麻はツッコミをかますが、華麗にスルーされた、今当麻が涙を浮かべていたような気がするが気のせいだ、いやそうにちがいない。とりあえずそんな当麻を置いて二人は先に進む

当麻「って…おい！待ってくれよ！」

当麻は涙をこらえて、ネプギアとネプテューヌ達を追いかけた。

数時間後……

当麻「また迷子になったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

当麻は迷子になっていた、リーンボックスで一回迷子になったのだが、今回はこの前に訪れたにもかかわらず迷子になった当麻、おい、そこ、当麻方向音痴とかいうな

当麻「…ネプテューヌとネプギアを探すか…あの二人も探せばどっかに…ん？」

当麻が止めていた足を動かそうとするとある物が目に入る、そこに落ちていたのは小型の銃でこの白い雪で染まる町には似合わない物騒な物があった。

当麻「一体なんでこんな物が…それに…弾も入っているし…一体誰の落し物だ？」

当麻が小型の銃ハンドガンを拾い上げて、中を確認する。弾は５つ入っていてまだ使える。しかしなぜこんな所に弾が落ちているのかが不思議でたまらなかった。そして顔を上げると暗い先の見えない

路地裏とも呼べる場所が目に入る。

当麻「まさか…この路地裏で何かあったのか？」

当麻は推測する。たしかにこんな所にこんな物騒な物が落ちてるのはおかしいし不気味だった。当麻はもしかしたらこの路地裏に行けば何かわかるかもしれない。そう思っていた。

当麻「ネプテューヌ達を待っていた方がいいか…いや、そんな暇は無い！とにかく言ってみよう！」

当麻はハンドガンをポケットに入れて暗く先の見えない路地裏を走り出した。そして当麻の姿はすぐ見えなくなってしまった。

＜路地裏＞

当麻「ハァハァ…この路地裏…結構長いな…」

当麻は2分程路地裏を本気で走っていたがまだ終わりが見えそうになかった。ここの路地裏は雪が多少積もりすべりやすくなっているため体力を奪われるとうっかり転んでしまいそうになる為少しペースを落とした

当麻「とりあえず…もう少しいってみるか」

当麻が少しペースを上げ足の動きを早くして走り出すと…

パン！！

当麻「！！」

どこからか飛んできた銃弾になんとか反応し立ち止まる当麻しかしいきなり止まった事でバランスを崩し豪快にころんでしまった。

当麻「（銃弾か！一体どこから…？）」

転んでしまい雪と泥で汚れた服で立ち上がった当麻は口部分についた泥を拭って、銃弾が一体どこから飛んできたのか推測するがそれよりも早く足が無意識に動いていた。おそらく当麻の無意識に立ち止まっら打たれる。という防衛反応が働いたらしい。

バンバンバン！！

当麻「ヤバい！！」

前方からいきなり銃弾が飛んでくる。それを間一髪でかわした当麻だが飛んできた銃弾の内２つはかすった、致命傷にはならないがそれでも痛いのは変わらない、しかし痛いのをこらえて当麻は走る

当麻「（なぜ正確に当てられる、相手は俺を見えてない筈なのに・・・？」

この路地裏は暗い、懐中電灯がないとはっきりいって前が見えない、それなのになぜか相手は当麻を正確に狙うことができる。

当麻「（たしかにこの路地裏は狭いけど・・・それでも正確に狙える程細い通路じゃないし・・・）」

現在、当麻が走ってる路地裏ははっきりいって人二人分の広さでお世辞にも広いとはいえない。それでも適当に銃弾は放って正確に命中する狭さでも無い

当麻「・・・やりたくは無いけど・・・空に浮かんでいる方が安全かもしれない」

そういうと当麻は上にジャンプする。そして一瞬の内に女神へと変身し浮遊し飛ぶように移動する。

イマジンハート「（打ってるかな・・・）」

しかし一発も銃弾は放たれない、おそらく向こう側からして狙いが定まらないのかは知らないがイマジンハートはどんどん先に進む。

＜路地裏奥地＞

ここは路地裏の奥地でさっきの狭い奥地よりも広い所に１２人の男がいた一人は高級な持ち物ばっかり来た貴族みたいな男で後全員は黒服スーツを纏っている、怪しさだらけの男達である。

??「まだか！なぜ始末できない！！」

高級品を纏った男が怒りの声を黒服スーツの男に向けると、黒服はスナイパーライフルを持ち焦った様子で言い放つ

黒服「ボスだめです！！狙いが定まらなくて・・・それになぜか空を飛び始めて・・・」

ボス「空？！、ばかいうんじゃねえよ・・・唯の人間が空を飛べる訳ないだろ・・」

ボスと呼ばれる男が馬鹿馬鹿しそうに黒服の男に厳しい表情で言い放つ、そして黒服の男は固まってしまう、ボスの怖い厳しい表情に

ボス「とにかく殺せ！！せっかくもうかってるこの取引もばれたら俺達は終わりだぞ！！」

ボスが遂に立ち上がって言い放つと、黒服の男が驚いた表情し固まる。

黒服「ひっ・・・・・・なんかこっちに・・・来る・・・」

すると暗い路地裏から現れた灰色の髪をした女性が刹那の速さで現れ、スーツの男を両手で掴み…

イマジンハート「どっせーい！！」

バシッ！！！！！

思いっきり壁に叩きつけた、スーツの男は持っていたスナイパーライフルを自分に落してからピクリとも動かなくなった。そして地面に着地しボス達の方を見る。

イマジンハート「あなた達に聞くけど・・・ここがこの路地裏の奥

地でいいのよね。」

ボス「なっ……なんだこの女(あま)は！！」

ボスが荒荒しい声を上げると、今度は後ろにいる黒服の男達の方に顔を向け命令しだした。

ボス「俺達はこんなに数がいるんだ…たかが女一人に…なめられてたまるかァァァァ！！おいお前ら…やっちまえ！！」

黒服「えっ……でも…」

黒服の男が戸惑った表情を見せると、ボスは懐から銃を取り出しその銃を一人の黒服の顔に突き立てて言い放った

ボス「やるんだよ！！やんなきゃ俺がお前らをやっちまうぞ！！」

すると黒服の男たちはそれぞれ武器を取り出した、銃や鉄パイプに……そこら辺に落ちていたのであろう石ころなどを構えてイマジンハートに特攻するが…

…色々問題ありで省略、理由はお察しください。（テレビのピーを想像してください）

ボス「なっ……全滅しやがった。」

一体何があったかは置いといて、黒服の男達は数秒で全滅した。イマジンハートは無傷である。

ボス「くっ……」

ボスが銃を取り出そうとするが、イマジンハートの方が行動は早かった。銃を取り出して手に持つとイマジンハートに手首を掴まれ銃を落とす。そしてそのまま背負い投げの体制をとって…

バキっ！！！！

ボスは地面に叩きつけられて気を失った。そしてイマジンハートは変身を解除して元に戻るとこの路地裏から姿を消した。

＜プラネテューヌ＞

なんだかんだでプラネテューヌに戻ってきた当麻達だが（迷子についてはたっぷり怒られた）テレビをつけるとこんなニュースがやっていた。

『お知らせします。先ほどルウィーのある路地裏を拠点とし違法ディスクの違法取引をする違法集団が全員ボロボロの状態で発見され逮捕されました。違法集団は『灰色の悪魔』と意味わからない事を呟き精神がボロボロの状態でしたとの報告がありました。』

当麻「……」

当麻はテレビを見て固まってしまった。それから当麻はこの事実を胸の奥に隠す事に決めたらしい。また当麻はハンドガンに暗視スナイパーライフルを手に入れた。（バトルで使うかわかんないけど）

当麻じゃ『灰色の悪魔』の称号を手に入れた

～ゲイム業界質問コーナ～

魔界魔「…という訳で始まりました。新コーナーであります。」

当麻「新コーナーっていうからまたくだらない事でもやるかと思ったよ上条さんは」

魔界魔「とりあえず新コーナーについて説明すると。この作品は、友情・努力・勝利・適当・戦闘・ギャグ・矛盾・メタ・カオスでなり立ってる為に疑問や質問があると思うんですけど。それはその矛盾や質問に答えるコーナです。」

当麻「…ってちょっと待て！友情・努力・勝利って〇ャンプの三大原則だし関係無いだろ！それに適当ってなんだ！この作品書くに当たって一番あってはいけない物だろ！！」

魔界魔「…とりあえず質問の例を行きたいと思います。」

当麻「無視するなぁ！！」

質問1　例「当麻さんは一日暇な時何をしてますか？」

当麻「暇な時はネプギアとかとゲームしたり買い物で時間つぶしてたりしてるぞ」

ネプギア「でも買い物に行くと必ずボロボロになって帰って来ますけど」

質問2　例「当麻へ女神化して初対面の相手と会うと、どうゆう反応される。」

当麻「かなりの高確率で「えっ、誰？」みたいな事を聞かれる…」

魔界魔「それは女神化したお前と今のお前て共通点が一つも無いし」

当麻「…でも悲しくなんかないから大丈夫だ」

魔界魔「…目に水が溜まって見えるのは気のせいか？」

質問３　例「ノワールさんへ、ノワールが主役のゲームが公式サイトで決定したらしいけどどう思う？」

ノワール「えっ…私が主役…ま…まぁ…当然よね、人気投票も１位だったし」

当麻「ノワール、あの３人の殺されてもしらないぞ」

ネプテューヌ「私が主役交代？人気投票でたった１００票差だったのにこの扱い？」

当麻「…ネプテューヌ諦めろ、絶対にもう覆せないからこの現実」

魔界魔「…という風に質問に答えていきたいと思います。また質問は感想など募集しますのでよろしくお願いします。ただし批判や苦情は受け付けませんのであしからず」

当麻「それじゃあ、この編で今日は終わりだな、感想や質問、待ってるぜ！」

１０話：安らかな休息？なにそれ？おいしいの？（後書き）

；そうゆう訳で感想と質問をお待ちしております！後イマジンハートの灰色の悪魔というのはミッドチルダの白い悪魔とは関係ないですよ。いやマジで。

１１話：主人公ってそんなに偉い物なのか？ｂｙ上条当麻（前書き）

；今回は死人がでるかもしれない闇鍋パーティーです。また今回は久しぶりにバトル無しです。

１１話：主人公ってそんなに偉い物なのか？ｂｙ上条当麻

＜プラネテューヌ＞

当麻「・・・なんでこうなった？」

さっきまではネプテューヌの家で他大陸の女神を呼んでギャーギャー騒いでいた闇鍋パーティーだったが、今では見るも無残な状況になっていた、まずネプテューヌが泡を吹いて倒れており、他の女神達も起きる気配は無い、そして今、当麻の目の前にあるのは大きめのテーブルの上に置かれた何か黒い液体みたいな物が入っている鍋である。

当麻「・・・・・・とりあえず何かあったのか振り返って見るか、読者の為にも。」

という訳で振り返ってみる、それはだたしか・・・・・・３時間くらい前の出来事だったと思う・・・

～数時間前～

ネプテューヌ「闇鍋をやろう！！」

当麻「唐突すぎるぞネプテューヌ・・・」

いきなり闇鍋をやろう！！とか言い出したネプテューヌに呆れて突っ込みを入れる当麻、見た感じ当麻は闇鍋をやりたくなさそうに見える、当然である。闇鍋なんかやったら一体何食わされるかわからない、当麻は説得しようとするが、ネプテューヌの行動は圧倒的に早かった。

ネプテューヌ「もうノワール達も誘っておいたし・・・」

当麻「早っ！今日は行動早いなネプテューヌ」

ネプテューヌ「それじゃ今からノワール達来たら始めるから食材もってきてね」

そういうとネプテューヌはリビングの方に歩いていった、おそらく闇鍋の準備をしにいったのだろう。当麻も食材を探す為冷蔵庫を行こうとするとネプギアがやって来た。

当麻「どうしたんだネプギア？そんな心配そうな顔して？」

当麻が心配そうな顔をしているネプギアに尋ねるとネプギアは食材を持っている、中身は見えないけどネプギアの事だから心配はいらないだろと当麻は思いとりあえず用件だけ尋ねる事にした。

ネプギア「いや・・・あの・・・最近お姉ちゃんが・・・自分の部屋で仕事中に何かボソボソ言ってるのが聞こえて・・・ちょっと心配で・・・」

当麻「ボソボソ？・・・そういえば最近ネプテューヌが時々元気ないように見えるし、また虫歯にでかかったんじゃないかって・・・」

ネプギア「多分無いと思います、虫歯は再発してませんし・・・」

当麻「再発って・・・・・・」

当麻は虫歯が再発するとまで言われたネプテューヌに同情する。どうやらネプテューヌが虫歯にかかるのはめずらしい事では無くなってしまったようだ。

ネプギア「最近お姉ちゃんが元気が無くなりそうな出来事といえば・・・・あっ！」

ネプギアは何か思い当たる節があるようだ。

当麻「どうしたネプギア、何か思い当たる事があるのか？・・・・・・あっ！」

そうゆう当麻も何か思い出した様だ、ネプテューヌの元気が無くなりそうな出来事といえば恐らく・・・

当麻「・・・ノワールに主役の座奪われた事か？」

ネプギア「・・・恐らく十中八苦まちがいありませんね・・・」

この前公式サイトでネプテューヌが完全に主役を降格されたのはお分かりであろう。恐らくそれに恨みを持っているのはネプテューヌだけでは無い筈だ」

当麻「・・・という事はネプテューヌが他の女神呼んだって事は・・・グルか？」

ネプギア「ええ・・・・・・恐らく・・・・」

そうだとしたら他の女神の狙いはノワール一人である。そしてネプテューヌ、ブラン、ベールはグルでどうやら闇鍋で潰すらしい。だとしたらあの3人を何とかしないと絶対に危ない、最悪ノワールが死んでしまう。

当麻「・・・ノワールの罪は無いから助けないとあれだな・・・・その・・・一生恨まれそうだよな・・・」

ネプギア「お姉ちゃんには悪いけど今回はノワールさん側に回ります。」

当麻「ああ・・・・・・なんとしてもノワールを守らないとな・・・・」

とりあえずそんなこんなで闇鍋パーティーが始まった・・・・・・

ネプテューヌ「・・・闇鍋パーティーを始めるよ～」

全員「おおーーーーー！！」

闇鍋パーティーで盛り上がる一同、そして盛り上がってない当麻とネプギア、この闇鍋で死人が出るかもしれないのに盛り上がってるなんて言えない、ついでに現在いるメンバーは女神5人に女神候補生4人である。

ネプテューヌ「とりあえず食材いれる前にルール説明説明するよ～」

プラネテューヌ闇鍋ルール

１：全員が食材入れる、食材は余程の危険物（爆弾や鋭利な物など）で無ければなんでもｏｋ

２：まず順番を決めて鍋から食材を取る、取った食材は絶対食べなければいけない、食べらない場合は全財産没収

３：ギブアップする時は闇鍋を茶碗一杯分食べる

４：勝者は最後に残った一人のみ

ベール「予想以上にハードな闇鍋ですわね・・・」

たしかにハードだ、ギブアップをしてもおそらく死は免れない、ギブアップ＝死、なのだ

ノワール「・・・とりあえずさっさと始めましょう、お腹すいたし」

ノワールがネプテューヌに言う、しかしその一言はノワールの死期を早めているだけなのだが・・・

ネプテューヌ「それでは始めようか・・・まず電気を暗くして・・・順番ずつに食材入れてって。」

ネプギアが電気を暗くするついでに食材を入れる順番を決めてって・・・

長いんで省略！！ｂｙ魔界魔

ネプテューヌ「それじゃ電気をつけるよ～」

ネプテューヌが電気をつけるとさっきまであったお湯だけの鍋は黒く染まり鍋と言えるものでは無くなってしまった。

ノワール「・・・これ食べられるの？」

ベール「・・・もはや鍋じゃありまでんわね・・・」

ブラン「・・・これは殺人兵器・・・」

ブランが物騒な事をいう、間違ってはいないのだが・・・

ネプテューヌ「だって大丈夫だよ・・・それにこの鍋を食べるのは・・・」

するとネプテューヌが黒いドロっとした液体は茶碗の中に入れて・・・それをノワール・・・では無く・・・当麻に向ける。

当麻「えっ・・・・・・・・」

当麻は呆気にとられて驚く、しかし驚く暇も無く当麻の防衛反応と前兆の感知という技能が働きとっさに立ち上がっていた。

ネプテューヌ「おりゃーーーーーーー！！！」

するとネプテューヌが茶碗を当麻に投げつける、しかし当麻は回避、投げられた茶碗は大きくカーブしブランの顔面にクリティカルヒットした。

ブラン「・・・・・・・・・・・（ドサッ）」

ブランは顔面に茶碗が隠れたまま倒れた、おそらく当分は目覚めないだろう。するとネプテューヌは舌打ちをした・・・ような気がする。

ネプギア「まさかお姉ちゃんの狙いって・・・」

ネプギアはずっとノワールを狙ったと思っていたがどうやらネプテューヌが狙っていたのは当麻らしい

ネプテューヌ「惜しい！もう少しだったのに」

ネプテューヌは悔しがる、すると当麻が冷静を取り戻し、ネプテューヌに怒鳴りつける

当麻「何すんだよ！！ネプテューヌ！危ないだろ！」

ネプテューヌ「当麻が主人公だからいけないんだよ！！」

当麻「それ思いっきり逆恨みじゃねぇか！！」

すると今度はネプテューヌが剣をブンブン振り回しどこから持ってきたのか銃を乱射する。すると闇鍋が中に舞ったりなんだりで他の女神達にも黒い液体が降り注ぐ

全員「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

そして降り注がれた黒い液体は他も女神と候補生も巻き込み全員を

意識不明の重体にさせた。そして落ちた鍋は綺麗にテーブルに着地、中身は少し残っているようだが・・・

～回想終了～

当麻「・・・とりあえず俺だけ食わないのはずるい気がするし・・・・・・一口だけ食ってみるか・・・」

とりあえず一杯茶碗によそりそれを口にした当麻、しかしこの不幸男がどうなったかはいうまでもないだろう

～ゲイム業界質問コーナー～

魔界魔「・・・っという訳で始まりましたこの質問コーナー！」

ブレイブ「元犯罪組織四天王ブレイブ・ザ・ハードだ・・・当麻はどこだ？」

魔界魔「あそこ」

魔界魔が指差す方向には顔が青ざめている当麻の姿が・・・・・・・

ブレイブ「・・・あれがあの鍋を食べた物の末路なのか・・・」

ブレイブは何故かよくわからない恐怖に襲われる。

魔界魔「ついでに女神候補生達はネプギアを除いて無事だったよ、避難したから。」

ブレイブ「あの鍋食ったら軽く二十日くらい目覚めないんじゃないのか？」

魔界魔「おそらくな・・・さて、質問コーナー行きます。神夜晶さんからの質問です。」

質問１：「女神の中で誰が一番強いんですか？（当麻と候補生も入れて）」

魔界魔「これは私がお答えします。一番強いのは当麻です。ただしそれは女神時と一対一の時だけで人間時は一番弱いです。」

ブレイブ「それじゃ多人数での戦いは誰が一番強いのだ？」

魔界魔「それはネプテューヌです。」

ブレイブ「そうかそれでは次の質問だ、これも神夜晶からだな」

質問２：「当麻は、今後誰かと付き合ったりするんですか～？」

魔界魔「それもいいですね、でも当麻は原作でもご存知ラッキースケベの癖に鈍感だからな～」

ネプギア「そうですね・・・・・・進展に時間が掛かるというか・・・」

魔界魔「ネプギアは好きなのか？当麻の事？」

ネプギア「えっ・・・・・・・いや・・・あの・・・その・・・・はい／／／」

魔界魔「そうか・・・がんばれよ、当麻は鈍感だからな・・・かなり」

ブレイブ「がんばるんだぞ・・・・・・いざという時は・・・」

魔界魔「いざという時は？」

ブレイブ「ピーーーーーーーーーーーーー（テレビに入る放送禁止用語のピー音）」

ドカッ！！バキッ！！グシャ！！

魔界魔「・・・・・・・ったく・・・この小説ノクターンにする気かテメーは！！」

放送禁止用語が入った為、即刻元凶であるブレイブ・ザ・ハードを抹殺しました。皆様本当に申し訳ございませんｂｙ魔界魔

ネプギア「・・・それでは次の質問行きます。これも神夜さんからですね」

質問３：「有り得ない事？なんですが当麻はずっと女神化してると仕草とか恋愛感情まで女性になるんですか？」

ネプギア「・・・・・・この質問は当麻さんには見せられませんね・・・」

魔界魔「私が答えます。まず仕草ですが・・・女性になります。無意識に・・・」

ネプギア「無意識って・・・怖いですね・・・」

魔界魔「そして恋愛感情ですが・・・これは人格は当麻なので女性が好きなのは変わりません」

ネプギア「・・・それって百合って事ですか？」

魔界魔「正解♪、そうゆう事になるな♪」

イマジンハート「・・・・・・・・・（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

魔界魔「えっ・・・当麻・・・いつからそこに・・・」

凄い殺気を放つ当麻（現在イマジンハート）に聞くと、イマジンハートはにっこり笑って・・・

イマジンハート「それはもうさっきの質問始まった時から♪」

顔は笑っているが、明らかに怒ってる、それはもう並のモンスターがビビッて逃げ出しそうなくらい

魔界魔「あの・・・なんでそんなに怒っているのでしょうか・・・」

イマジンハート「自分で考えてみたら♪さて・・・」

するとイマジンハートが本気モード（二刀流）になる。魔界魔が逃げ出そうとすると・・・

イマジンハート「死ねえええええええ！！！魔陣大次元断！！！」

魔界魔「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

哀れ魔界魔・・・やすらかに眠れ・・・・・

ネプギア「・・・また次回会いましょう、感想を質問お待ちしております。！」

魔界魔「助けろおおおおおおおおおおおおお！！」

イマジンハート「逃がさない！！獅子十連斬！！！」

魔界魔「まじで死ぬからやめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

ネプギアは魔界魔に合掌した。

１１話：主人公ってそんなに偉い物なのか？ｂｙ上条当麻（後書き）

；神夜さん質問ありがとうございました。他ユーザーの皆様も質問があればよろしくお願いします。後ユーザーお一人様に付き、質問は３つまでとお願いします。

１２話：弟子二人（前書き）

；この話から外伝に合わせ小説の書き方を変えていきたいと思いまず、読みにくいかと思いますがよろしくお願いします。

12話：弟子二人

＊

なぜこうなった。
前回の冒頭でも似たような台詞を吐いた思う当麻、しかし今当麻の目の前でそういえるべき状況がまた起きているのだ。
とりあえず当麻の目の前に写る状況を見てみよう。
「あなたこそ何よ！」
「あなたこそなんですか！！」
とりあえず簡潔に説明しよう。日本一ちゃんとシアンが口喧嘩をしている。上条当麻の弟子が対立しているのだ。
「あの・・・俺おじゃまみたいなんで失礼させていただきま・・・」
当麻がこの場から逃げようと一歩下がる・・・が
「「いかないでください師匠！！」
「は・・・はい」
日本一とシアンに止められその場で硬直してしまう上条、かつてゲイム業界を救ったヒーローでもたった二人の女性に勝つ事はできなかった。まだまだ収まりそうのない口喧嘩を続ける日本一とシアン
（なんでこうなったんだろう・・・）
上条がその場で小さく溜め息を吐く、そして頭によぎる少し前に記憶、当麻はまたあの時と同じ様に記憶をさかのぼる。

＊

ピンポーン！
プラネテューヌのネプ姉妹の家に響くインターホンの音、しかし現在ネプ姉妹が出かけている為、家でお留守番していた当麻が玄関の

扉を開ける、しかしその結果が今の状況を作りだしてしまうとも知らずに・・
「こんにちは師匠」
玄関を開けると当麻の目に入ったのは緑の長い髪と大きなあれを持つ女性であり上条の第2弟子である。あの女性である。
「シアン！どうしてお前がここに」
「偶然通りかかったついでに寄っていったのです。挨拶がしたくて」
すると当麻が頭をポリポリとかく、すると当麻がどこから持ってきたのかスリッパを玄関に置く
「まぁ・・・来たんだから入れよ、せっかく来てもらったんだし」
「それでは遠慮無く」
シアンがご親切に靴を揃えスリッパを履き、ネプ姉妹の家に入る
リビングを使うのはネプ姉妹のどちらかに聞いたほうがよさそうなのでとりあえず上条は自分の仕事場に案内する事にする。

＊

「へぇ・・・それで偶然通りかかったついでに挨拶しようってのはわかったけど・・・それ以外にも用事があるのか？」
「は・・・はい・・・その・・・あの・・・／／／」
上条が頬を赤くさせてもじもじするシアンを見るが、なぜ頬を赤くしてもじもじしているかなんてフラグ建てまくりのくせに自覚無し鈍感とどうしようもない上条当麻にわかる訳が無かった。
「あの・・・私は師匠の事が・・・／／／」
読者の皆さんにはまる分かりなシアンの告白、だがこの告白は都合よく次に起きる出来事で伝わらない事がきまりとなっている。そしてシアンが最後の言葉であり一番の本命部分である場所を伝えようとした時・・・
バタン！！
いきなり扉が思いっきり開かれた

「ヤッホー!!師匠いる!!」
突然入ってきたのはぺたんこ胸が特徴である。青い髪の少女、日本一ちゃんである。そしてここで弟子二人の目線が合った、するとシアンが突然立ち上がり、日本一の前に立つ
「あ・・・あの・・・私に何か用かな・・・」
自分より身長が上の相手にちょっと恐怖を覚える日本一、だがその恐怖は次のシアンの一言で吹っ飛んでしまう事になる。
「今、あなた師匠の事、師匠っていいましたよね・・・もしかしてあなたも」
勿論、日本一もシアンの発した師匠の言葉に反応する。
「・・・そうゆうあんたも師匠の事師匠っていったよね・・・まさかあんたも・・・」
なぜだろう、錯覚なのか分からないが当麻には二人の目線がバチバチ音を立てているように見える
「・・・あなたまさか師匠の弟子ですか?」
「かくゆうあんたもまさか師匠の弟子?」
二人は聞くと、お互い数秒間の沈黙が流れる、その沈黙を破ったのはほぼ二人同時だった
「「師匠」」
「は・・・はいぃぃな・・・なんでございましょう!!」
いきなり二人から師匠と呼ばれ、びびる当麻、すると二人の弟子は笑顔で
「「こいつは師匠の弟子ですか?」」
どうしよう、やばい、うそついたら絶対に殺される、当麻は覚悟を決めコクリと頷く
「「そうですか・・・なら弟子は二人もいりませんね」」
えっ・・・と驚く当麻をよそに上記に醜い口喧嘩に・・・
「「誰が醜い口喧嘩ですって(だって)?」」
ハイ、スミマセンデシタ
「作者弱いなオイ!」

当麻が突っ込むが作者は見事にスルー、そしてこれがどうなったかは上記の通りである。

＊

回想終了
当麻が現実に戻るが二人の口喧嘩はまだ続く、いい加減ここから早く離れたいと思う当麻であったが離れたら何言われるかわからないので、動く事ができない。二人には聞こえない声で不幸だ・・・と呟く当麻、すると・・・
「どうやら・・・あなたには消えてもらいましょうか」
「何いっているの？そうゆう死亡フラグ的な台詞がいうあんたには負ける訳にはいかない！」
なんと日本一が銃、シアンが杖を構え、まさかの戦闘準備に入る、さすがにこれは止めないと仕事とか自分の身とか危ない当麻は止めようとするが・・・二人の攻撃はあまりにも早かった
「切り刻め！エアシュート！！」
「喰らいなさい！ディメンジョンバレット」
二人が魔法と銃技をぶつけ合う、余波はこの部屋では大きかったようで仕事なだが切り刻まれていき、部屋に傷がついたりもしている。
「頼むから二人共やめろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
当麻は余波に巻き込まれ机にしがむつく、それでも飛んでくるごみなどに当たるのだが、それもすべていろいろな所にクリティカルヒットする
飛んでくるのは・・・椅子にスイカに分厚い本に・・・招き猫に・・・木刀にダンボールである。
「痛て！痛て！痛てて・・・なんで全部俺のあそこやら弱点に都合良くあたるの？・・・それになんであの傭兵のダンボールがあるんだよぉぉぉぉぉぉ！！！！！」
当麻は全力で突っ込むがこの突っ込みを聞いている物など誰もいない

「これで決めます！起こせ大爆発！」
シアンが呪文の詠唱を終えると、シアンの杖にエネルギーが集まる
「シアン！頼むからやめてくれ！この部屋が吹っ飛ぶから！いや本当に！！」
当麻は説得しようとするが、声が聞こえてはいないみたいだった。
そして巨大な爆発呪文が放たれる
「弾けろ！次元爆発（ビッグバーン）！！」
ドガーン！！と音と共が上条の部屋に響いた。

＊

「あちゃー・・・」
「やりすぎちゃいましたね・・・」
二人はすっかり熱が冷めたようで周りも見渡す、上条の仕事場はボロボロで机や椅子はもちろん回りの物はすべて壊れていた、ついでに二人は当麻の姿も探していたが見当たらない、おそらくぶつかり合いの時にどこかに逃げたのだろう、そう思っていた
「こっそり退散した方がよさそうですね・・・」
「そ・・・そうね・・・」
シアンと日本一、二人がこっそり逃げようとするが、勿論この二人には災いが降りかかるのである。
「どこへ行くのかな？二人共♪」
ビクッ！！突然、声をかけられ肩を震わせる日本一とシアン、声をかけた人物は二人の現在後ろに立っている笑顔だが黒いオーラーが見えるイマジンハートである。
「「いや・・・あの・・・その・・・」」
「まず日本一ちゃん、あなたには言いたい事が一杯あるんだけどね、なんで家に勝手に不法侵入しているの？」
「それは・・・その・・・」
今、怒りは日本一に向けられる、そう思いシアンは逃げようとする

が勿論、英雄守護女神はそれを許さなかった
「そしてシアンちゃん、こんな所で魔法使うなんてここの場所の広さと大きさ考えているの？」
「・・・その・・・あの・・・」
二人は分かっていた、このままでは唯では済まない、だって笑顔なのに黒いオーラが見えるし、なぜか呼び捨てに筈なのに『ちゃん』ずけされている。明らかにやばい、それは誰でもわかっている。そして二人に下された判決は・・・
「二人共、何か遺言ある？」
すると二人は全速力で逃げ出した。だが勿論イマジンハートは逃がすともりなどサラサラ無い
「逃がすと思う？閃光斬（アクセルブレード）！」
「「すいませんでしたァァぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」」
二人は全速力で逃げながら謝ったが、時すでに遅し。二人がどうなったかは当麻の口から語られる日は無いだろう・・・

１２話：弟子二人（後書き）

；今回は諸事情でゲイム業界質問コーナーは休みです。どうもすいませんです。

１３話：目覚めし黒き力（前書き）

；今回は前編はギャグありですが。後半は人によってはかなり重いです。重いのが苦手な人は回れ右をお勧めします。

13話：目覚めし黒き力

＊

エリート、という言葉を知っているだろうか？
エリートとはその名の通り、頭のいい奴の事を指す。ついでにその逆をバカという。
え？何そんな事知っているって？しかしエリートには色んな種類がいる。
自慢型だったりまぁ…色々といる訳だが。つーかそれよりも本編に入る

＊

「不幸だーーーーーーーーー！！」
ツンツン黒髪少年のお決まりのあのセリフが本編に入って冒頭で流れた、いや正確にはそのツンツン男が発したといえば正しいのだが。勿論、彼がこの決め台詞をいっているのにも理由はある。その理由とは……

「待ちなさい！そこのツンツン黒髪男！！」
「待てといわれて待つ奴なんていねーよ！！」
簡潔に述べよう、上条当麻は現在、プラネテューヌな町中を走り回っている。理由は追われているからだ。そして追いかけるオリジナルキャラクターと逃げる不幸男
「なんでこうなってんだよーーーーー！俺は日ごろの行いが悪いでございましょうか！神様！！」

「つまらない一人言いってないで待ちなさい！！」
追いかけっこは続く、当麻は普段あのビリビリに追いかけられているので、スタミナは半端では無い量を持っている為、捕まるのはまだまだと思われる。すると当麻が時計を目にやる。
「げっ……早くかえんないとネプテューヌ達に殺される…。」
ついでに当麻は買い物の帰りに追われているので、早くかえんないとネプテューヌに殺される。ネプテューヌも尋常じゃない程の胃袋を持っており胃袋の強さはインデックス以上かもしれない。でもネプテューヌはインデックス程、食欲の欲望は薄いので、殺されても遅れたという理由ではせいぜい、噛みつきでは無くげんこつ一発ぐらいですむだろう。
「なんでこうなったんだよ、いつもいつも…不幸だ…」
とりあえず説明不足すぎるのでこの小説お得意の回想タイムに入る事にする。興味ない人は回想を抜かしてどんどん先に進めとでもいっておこう。

＊

「えーと…これで食材はオッケーと…」
上条が歩きながら、買ってきた品物を確認する。使用しているのはエコバックと資源に優しく再利用できる優れ物でもあるのだ！…と冗談はここまでにして。本編に戻ろうか…
「さて・・・と買い物を済ませたし、とっとと帰ろうかな…」
普段通り買い物を済ませ家までゆっくりのんびり帰ろうとする。それが上記の悲劇につながる事になるのだが…
「あの…すいません…」
「ん？」
突然、後ろから声をかけられ後ろを振り向く当麻、どうやら女性に声をかけられたらしいが所詮は自覚無しのリア充の当麻には美人でもブスでも何も思わないのかもしれんが…

「あの…その…ちょっとお願いがあるんですけど…」
「お願い？」
当麻は人を見捨てられない超が付くほどのお人好し、勿論首を突っ込むのである。
「友達がちょっとカツアゲにあってまして助けてくれないでしょうか？」
明らかにおかしいだろう。なぜカツアゲされているのに警察では無くそこらへんにいた男子に頼むのか
「イテテ！お願いというか強制だよね！なんで頼みながら手を引っ張るのんですかー？」
とりあえず首を突っ込む事にした当麻、仕方なく女性についていく事にする。

＊

「ここか？友達がカツアゲに会った場所って？」
「はい……」
なんだかんだで女性につれてこられたのは。プラネテューヌに本当にこんな所あったのかと思える所である、無人の空き地である。当麻達が入ってきた入口を除いて回りが壁に囲まれており回りからは中がわからない構造になっている。
「それにしてもプラネテューヌにこんな所あったんだな…未来都市って感じなのに…あ、それは学園都市も同じか。」
学園都市も上から見れば綺麗に見えるが、所詮は見た目だけである。実際は武装集団（スキルアウト）のアジトがあったりと中身は変わらないのだ。
「それでカツアゲにあっている友達って……」
「あ…はいあそこです。…」
当麻は女性に待ってろといって一人歩きだす。だがだれもいない。
これはどうゆう事だろうか？しかしここぞという時に勘がするどい読者の皆様は大体わかったであろう

シュン！
「うわ！！」
突然後ろから魔法弾が飛んでくる。当麻はなんとかかわし立ち上がる。
「…チッ、まさか避けるとはな」
すると逃げ場の無い空き地の入口方面からあの女性がやってくる。
持っているのはハンドガン並の大きさを持つ銃、それを当麻に向ける
「テメェ…最初から罠にはめるつもりで…」
「気付かなかったの？とろくさい男ね、見逃してほしかったらそのエコバックとお金を全部置いて行きな」
すると当麻がポケットから財布を取り出す。まさか見逃してもらうつもりなのか、だが当麻は勿論そんな事はしない。
「…俺今所持金３００クレジットだけど。」
すると女性が持っていた銃を落とす。どうやらよっぽどショックだったのだろうか…
「なんだとお前、高校生みたいな体してるくせに所持金が３００だとお前ふざけているのか！！」
「ふざけている訳ないだろ！カミジョーさんのお財布事情は複雑なの！」
「もういい！お前はどっかいけ！そしていまここで起きた事すべて忘れろ！」
「あ、は～い」
当麻はそそくさと退散しようとする。そして当麻は初めてお金を持っていなくてよかったと思った。が…しかしここからがあの悲劇の始まりである。

「そこの二人！止まりなさい！！」
空き地の一つしか無い入口が突然塞がれてしまった。見た感じは普通の女性警官が立ちふさがっている、勿論仁王立ちで。
「貴方達を恐喝の疑いで逮捕します！」

するとあの不幸男が反論する。それよりも反論しないとネプテューヌにひどい目に合されそうだからだ。
「ちょっと待てよ！俺は被害者だって！」
すると女性警官は当麻を見る。当麻の服装をじっくり見ると当麻をいきなり指さしてこんな事を言い放ちやがった。
「あなたもそこにいた女性の仲間ですね！逮捕します！」
「えええぇぇぇぇぇ！！何でそうなるんだよ！！カミジョーさんは納得いきませんの事よ！！」
だが当麻の反論も虚しく、反論はすべて女性警官の前ではクラッシュ！されてしまった。
「関係ないです！このエリート中のエリート警察大学校を卒業したこの私カレン＝エレリーナには間違いはないのよ！！」
…こんな奴もいるとはここの警察もあれである。と密かに思った当麻だった。
「と・に・か・く…あなたを逮捕します！！」
カレンは懐から小刀を取り出す、あと手錠
「…とにかく逃げるが勝ちだ！！」
当麻は逃亡、そして追いかけるカレンであった。ついでにあの女性は二人がギャーギャーしている間に逃亡した。

＊

回想終わりである。とにかく現実に戻る、戻りたくないのならまわれ右をしろ…本日2度目の冗談もここまでにして、マジで現実に戻る、いや本当にマジで
「ハァ…ハァ…とうとう追い詰めたわよ！」
「やば……」
回想に入っている途中、行き止まりでピンチになっていた上条当麻、そして小刀と手錠を持って間をつけるカレン、このままではマジで逮捕されるかもしれない

「大人しく捕まりなさい！」
するとカレンが小刀を持って突撃する。回りから見たらどう見ても警官がする事では無い。が…予想外の出来事が起きた
バン！！
「ぐっ……」
突然、横に吹っ飛ばされるカレン、当麻も何が起きたのか理由はさっぱり分からなかった。
「カレン！！」
カレンは何とか立ち上がる。血は出て無いがダメージは大きかった筈だ。
「…まさかあなたがここに来るなんてね。」
いきなり現われた人物は警官の服を着て銃を持っていた黒髪の女性である。女性は銃を下に向けるとカレンなどに目もくれずに当麻に話しかける
「大丈夫でしたか。襲われそうになっていたみたいなんで…」
「あ、ああ…それよりもあなたは一体…」
当麻が女性に聞こうとすると。それよりも先にヨロヨロと立ち上がったカレンが口を開く
「お…姉…さま」
カレンが途切れ途切れの声でそういうと女性は溜息を吐いて銃を突然カレンに向ける
「私に気安く話しかけないで汚らわしい。」
バン！！
すると女性はカレンに躊躇いもなく銃から魔法弾を発射する。これには当麻も驚いた。しかし当麻はすでに勝手に体がカレンを守る為に動いていた
バキン！！
発射された魔法弾は消滅した。上条当麻の右手に宿る力『幻想殺し（イマジンブレイカー）』によって
「…なぜ邪魔をするのですか。その子はあなたを殺そうとしたので

しょうなのになぜ助けたのですか？」
さっきの行動には守られる側だったカレルも驚いた。
「あなた…どうして…私はあなたをうっかり殺そうとして…」
…あれはどう考えてもマジで殺しにきたのではないか。と余計な突っ込みは頭の中にとどめておく事にする。当麻は目の前の女性に向かってこう言い放つ
「…今、あんたこいつにお姉様って言われたよな、じゃあお前をこの子の姉か？」
すると女性が構えていた銃を一旦下に向け返答する。
「・・・私の名前はエレカ＝エレリーナ、プラネテューヌのエリート警察組織総長にしてそこにいる落ちこぼれの愚妹の姉です。」
すると当麻のエレンの言葉に耳を傾けた、たった一つの単語に
「落ちこぼれ・・・？」
さっき当麻はそこの空き地でエリートと聞いた、もしかしたらこの子はエリートでは無いのか、それともこいつにしては落ちこぼれなだけなのかわからなかった、先に口を開いたエレカの方であった。
「あなたは今ここで起きた事をすべて忘れていただけませんか？そこの愚妹は後で私がきちんとしかっておきますので。」
エレナの言葉にボロボロのカレンは怖気つく、当麻はカレンを引き渡すのか。それとも引き渡さないのか、しかし当麻の答えは決まっている。
「・・・一つ聞くけどよ。」
「・・・なんですか？」
当麻がさっきの表情から一変、真剣な表情に変わる
「もし俺があんたにこの子を渡したら、お前はどうするつもりだ？」
当麻の問いにエレナが当たり前じゃないですか。とでもいうように返答する。
「その子は私の家の落ちこぼれです。その子一人死んだくらいで何も変わらないですよ。」
「テメェ・・・」

エレナの返答に当麻は怒りを露にする。エレナのやろうとしている事、それは妹を殺すという事、ここでカレンを引き渡すことなんて上条には考えられない事だった、
「・・・どうやら一般庶民には私達エリートの考える事なんてわかる訳ないか・・・。ほら守るなら守ってもいいですよそこの落ちこぼれ・・・まぁ・・・あなたは自分の身を心配した方がいいかもしれませんがね。」
「キシャアアアアアアアア！！！！」
「！！」
当麻は突然の出来事に驚く、上空から落ちてきた物それはモンスターだった。見た目は巨大なムカデみたいな感じで名前は・・・キングムカデとでも名づけよう。当麻は突然現れたキングムカデを前にして固まってしまう。キングムカデは当麻の真上で当麻をかみ殺そうとする。しかしそんな暇は無い、すると・・・
ドカッ！！
「うわ！！」
突然押される当麻は倒れる。すると当麻は驚きの光景を目にした。さっき自分を押し倒した人物それはカレンだった。キングムカデはもうカレンをかみ殺そうとする。もう絶対に間にあわない。
当麻は見ている事しかできなかった。
「カレェエエエエエエエエン！！！！！」
そして当麻の叫びは虚しくカレンはキングムカデの巨体に呑まれてしまった。

＊

「カレン！！」
当麻は駆けつける。キングムカデはもういない。そして当麻の一番最初に目に入った光景、それは血だった。カレンの手だけが残され残ったのは多量の血とちぎれた手だけだった。

「うそ・・・だ、ろ・・・・・・」
当麻はこの世界に来て一番悔しい光景だった、守れなかった。殺されてしまった。当麻は巨大な罪悪感に押しつぶされそうになる。しかしその光景を見て一人笑う人物がいた。
「フフフフ・・・ハハハハハハ！！命を助けてもらったんですねカレンの命と引き換えに・・・まぁ良しとしましょう。愚妹は始末するのが目的でしたし・・・」
エレナは悔やむ当麻を前にして狂った笑いをする。はっきりいってこんなの警察がする事では無い。
「・・・おいテメェ・・・今自分が何をしたのか分かって笑ってるのか・・・。」
「勿論ですよ！ワハハハハハハハハ！！！！！！」
すると当麻がさっきとは違う表情をしていた。ただ一つ分かる事がある。それは殺気、とんでもない殺気、普段の当麻は敵でさえ救おうとする。殺気を放つような狂戦士とは違う存在である。しかし当麻は今間違い無く殺気を放っている。この殺気で軽く虫を殺せるくらいのレベルまで
「・・・テメェ警察やってるっていってたよな・・・こんな妹を平然と殺す事する奴が警察だと・・・いやテメェは警察どころが人間ですらある資格はねぇよ・・・テメェだけは・・・絶対に許さねぇ！！！！！」
「フフフ・・・怒るのはご勝手ですが・・・後ろ危ないですよ・・・」
すると後ろからキングムカデが現れ今度は当麻を飲み込んでいった。だが・・・・・・
ズバッ！！！
「・・・な・・・キングムカデが一瞬で真ッ二つに・・・一体なにがおきたというんだ・・・」
エレナは驚愕する、キングムカデが当麻を呑みこんですぐに真ッ二つになって消滅した。そして砂煙が晴れると現れた人物は・・・上

条当麻・・・では無く・・・イマジンハートの方であった。
「なっ・・・貴様は一体誰だ！！」
エレナが突如、現れたイマジンハートを指差していう。イマジンハートはエレナの問いにこう返答した。
「外道に名乗る名前なんてないから。」
そう言うとイマジンハートは剣を構える。しかしこの時だけは持っていた剣が違かった。ブレイブソードでも無い、疾風雷刀（ハイボルテージ）でも無い。持っていたのは刀身が漆黒の太刀だった。
「漆黒（ゼロ）ノ太刀（ブレイド）・・・展開」
そう唱えるとイマジンハートの持っていた太刀が黒い光を放ち黒き刀身にさらに黒い魔力が宿り刀身が巨大な太刀になる。
「なっ・・・なんなのだその刀は！！」
エレナは驚く、が、イマジンハートの考えている事は”倒す”では無く”殺す”だった。
「黒天剣（クロノブレイド）！！！！！」
ドカーン！！！！
黒く大きな刀が叩きつけられた。叩きつけられた刀は地面を大きく抉りとる。エレナはこの一撃を喰らったら助かる筈が無い。いや助からない。するとイマジンハートが突然、漆黒（ゼロ）ノ太刀（ブレイド）と呼ばれる刀を地面に落とした。
（今の・・・力は・・・一体・・・）
イマジンハートは困惑している、自分でも今なにが起きていた理解できなかった。そして今地面に落ちている漆黒の太刀の意味すらも。すると突然イマジンハートの頭に何か冷たい何かが当たる・・・それは雨粒だった。
するとぽつぽつ振っていた筈が突然の土砂降りになる。雨により煙が晴れるとエレナはそこにいた。傷は一つもついていなかっ、。が気絶はしていた。
「・・・一体何がどうなっているの・・・さっき血と手が目に入ると、いきなり思考が・・・だめだ・・・なにがあったか思い出せな

い・・・」

イマジンハートは何があったか思い出せない。唯一つ分かっている事は・・・カレンが殺されたという事だ自分の力がないせいで、仮にも守護女神（ハード）である。上条には一般市民を守るという役目がある。それによりイマジンハートの罪悪感は大きくなっていく。そしてこの土砂降りの雨の中血で汚れた・・・カレンの死んだ場所をただ見つめて・・・そして。

「ウゥ・・・ウ・・・ウ・・・うわアアアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！！」

イマジンハートの泣く声が雨の音と一緒に響く。普段絶対に泣かないような男が・・・今ここで泣いた。

上条当麻は新武器『漆黒ノ太刀（ゼロブレイド）』を手に入れた

ゲイム業界質問コーナー

魔界魔「前回は諸事情で休みでしたが今回も始まりますこのコーナー！！」

ネプギア「ハハハ・・・テンション高いですね・・・プラネテューヌ女神候補生のネプギアです。」

魔界魔「・・・今回は当麻は休みだ・・・仕方ないかあんな事があったんだもんな。」

ネプギア「・・・はい。今はそっとしておいた方がよさそうですね。」

魔界魔「それでは質問行くぞ・・・えっとＰＮ『オルソラ＝アクィナス』ってなんで禁書メンバーが！！」

ネプギア「オルソラ＝アクィナス？」

魔界魔「いや・・・なんでもない。それで質問は・・・？」

質問１：実は学園都市を目指していたらいつの間にかげいむぎょうかいという場所に来てしまったのですよ、あの・・・一体ここは本当に・・・」

魔界魔「って！迷子かよ！！ここは迷子を保護する場所じゃねーんだよ！！」

ネプギア「・・・とりあえずこの質問は無視しましょうか。それで次の質問は・・・ってもう無い！」

魔界魔「どうゆう事だネプギア？質問は一体どこに？・・・ってええ！なんでヤギがここにいるんだよ！！」

ネプギア「ああ！こうしている間にも質問が！！」

魔界魔「・・・もう間に合わないな・・・すいませんまさかのアクシデント発生ですので！このコーナは今日で終りです。」

ネプギア「みなさん本当に申し訳ございませんでした！！」

魔界魔「それではさようなら！！」

１３話：目覚めし黒き力（後書き）

魔界魔「そういえばいつの間にかアクセスが１００００超えました！」

当麻「マジかよ！すごいな！」

ネプギア「これからも応援よろしくお願いします！！」

１４話：冒険の始まりは突然に…（前書き）

；いきなりですがスタートします！新章！今回の当麻がゲームの世界に殴りこみ！？

上条「…それよりも学園編は？」

；夏休み明けるまで待ちやがれってんだい、この不幸男！

上条「…そういえばこの世界、今夏休みだったんだ…すごい強引にような気がするけど…」

１４話：冒険の始まりは突然に…

＊

今このゲイム業界で話題のゲーム、なんとこのゲームは二次元に入れるというこのゲイム業界初？のゲームです。その名も『パラレルゲームズ』あなたも二次元に入りレッツトライ！…とあるゲイム業界のＣＭでした。そしてこのゲームが今から起こる事件の元凶となる事をまだ知る人は居なかった…。

＊

～プラネテューヌ～

ここはプラネテューヌ・・・ってなんだかもういちいち説明すんのもめんどくさいから、くわしい事はインターネットで調べるなりなんなりしてくれ。さてさっそく本題に入るが上記のＣＭを見たゲイム業界の猛者達はこの二次元感覚体験ゲーム『パラレルゲームズ』略して『パラゲー』、別に略しなくてもいいが書いてる方はめんどいのでこれからは『パラゲー』と表記する。そして今回このパラゲーを買いに来た猛者の中にとある人物がいた。まず一人は黒い髪でツンツン頭をした見た目そのまんま高校生、そしてもう一人は金髪に巨乳と美人という非の打ち所のないスペックを持つのに廃人ゲーマーである一応女神グリーンハートことベール、そしてもう一人はこの大陸の女神の妹であるネプギアである。

「…まだまだ長いな。」

上条がそう呟いた後今自分達がいる場所を確認する。現在地はこの長い行列のまだまだ最後尾である。

…ついでにベールは内緒でお忍びでプラネテューヌに来ており、ネプギアはゲームを見てみたいという理由でついてきた。
「このままじゃゲームを手に入れられるかわかりませんわね…なんとしても今日中に手に入れないと…」
「あの…ベールさん？さすがにゲーム機一つで燃えすぎじゃないですか？」
「新作のゲーム機は一瞬一秒でも早く手に入れないといけない性分なんです。昔から…」
どんな性分だよソレ、とかベールに突っ込んではいけない。してもいいけど殺されてもしらない。ベールがとにかく燃えていると。上条が溜め息を吐きながら頭をポリポリかきむしりながら言う
「でもベール、これじゃ…ゲーム買えるかもわからないぞ…さすがにこんな行列じゃ…」
ついでに行列では１２００人程が並んでおり。当麻達はだいたい１１００人あたりにいる。たしかにゲームが自分達が買う前に在庫が尽きてもおかしくはない。
「その時は買った人を脅迫してでも…」
「いやいやいや、駄目ですからねベールさん！そもそもそんな事したらベールの信仰が薄くなりますよ！」
かなり危ない事をいうベールにネプギアはツッコム、さすがにベールの優先度も1信仰、2ゲームである筈…
「別にいいですわ、女神の仕事よりゲーム優先ですから。」
すまない読者の皆様、訂正するとベールの優先度は1ゲーム、2信仰、であるらしい。すると突然ネプギアが……
「あれ…二人共、あのゲーム屋…」
ネプギアが指差した方向を二人は見ると、そこには一件のボロイ建物があり、看板にはゲーム屋と書いてありそらにその隣にはこう書いてあった。
『パラレルゲームを先着3名に無料プレゼントキャンペーン！！』

「……あれ絶対怪しいよな…二人共…」
「はい。もう見た目だけで怪しさ倍増ですよ…どう思いますか？ベールさ…あれ？」
ネプギアが言うとベールがいつのまにか居ない、どこにいったんだと答えはすぐにわかった。ベールはあの店に一直線に向かっていった。それはたしかに買えないとかえるでは買えるを選ぶに決まっている。
「……何か嫌な予感がする。」
「…実は私も…でもベールさん置いて帰るのもちょっと…」
お人よし二人は仕方なく、ゲーム屋に足を進める事にした。

＊

……二人はゲーム屋についた。しかし二人はこの店を見た第一印象は…怪しい。
「…これ本当にゲーム屋か？」
「…ゲーム屋とは信じ難いですね…見た目は…」
このゲーム屋は明らかに見た目がゲーム屋では無い、まずさっきは遠くて良く見えなかったが木の看板。
窓はひび割れてボロボロ、屋根は良くみると穴が開いてたりしてたでどう見てもゲーム屋では無い。見た目は。
「…とりあえずベールはどこいったん…「…いらっしゃいませ。」
うわ！！」
いきなり声を後ろからかけられてびっくりする上条当麻。
「おっと…いきなり声をかけてびっくりなされましたかな…実は今『パラレルゲーム』の特別無料キャンペーンを行っておりまして一つどうでしょうか…」
怪しい、どこからどう見ても怪しい、３６０度どこからどう見ても怪しい…しつこかった？すいませんもうやらない。そういえば、と

ネプギアが何か気づいた様な顔をすると。
「あれ…先に一人だれかきませんでしたか？」
ネプギアが聞くと怪しい店員は不気味に表情を変えずに言い放つ
「いえ…あなたたちが始めての客ですか…？」
「それじゃ…ベールはどこに…？」
上条が言うと、なぜか店員がコソコソしだした。怪しい、この一言に尽きる、すると店員がポケットから何かを取り出した。それは一機のゲーム機であった。
「あれ…それは一体…？」
ネプギアが聞くと、突然店員が……

「これはね…あなたたちを閉じ込める為に檻ですよ！！」
すると突然眩しい光が上条とネプギアを包む、そして光が晴れる頃に残っていたのはゲーム機を持った店員だけだった。
「クックックッ…馬鹿な奴等め…これで女神は二人も手に入れたぞ…」
不気味な店員はそういうと、店の中に戻っていった

＊

～ステージ１：草原～

ここは草原そのまんまである。その名の通り草原である。それ以上でもそれ以下でも無い。そしてここはゲイム業界とはまた違う場所…つまり別世界である。

「痛てててて…腰を思いっきり打ったのか…それよりもここどこだよ…」
痛めた腰を抑えて冷静に状況を分析する上条、今いる場所はその名の通り草原である。しつこいようだがそれ以上でもそれ以下でも無

い。
「そこもかしこも草一色だな…ってここ本当にプラネテューヌか？」
…勿論ここがプラネテューヌの筈は無い。心の中ではそう考えていた。ほんのちょっぴりだが…とりあえず合流するか、と上条が立ち上がる
「それよりもネプギアはどこいったんだ。後ベールも」
上条が言うと。返答が来る。この緑一色の世界で
「と…当麻さん…私はここですよ～」
…返答が来た場所は当麻の後ろ、その人物はネプギア、どうやら彼女も丁度さっき目覚めたらしい。とりあえず二人は合流する。
「それよりもここどこだ？プラネテューヌ…な訳ないよな…」
「はい…おそらく…ゲームの中に引き込まれたと思います。」
「えっ…ゲームの中？それじゃあの怪しい店員の仕業で二次元の世界で入れられたのか？」
当麻は驚く、だがもしこれが一部の人からはかなりの幸運かもしれないが…
「…どうすんだよ、もしベールがここにいたら大暴れしかねないぞ、主にゲームの事で…」
「…それはどうゆう事ですか？当麻さん？」
するといつの間にか後ろにベールがいた。なにやら物凄い殺意を放ちながら
「ベールさんいつの間に…それにどうしてここへ…？」
ネプギアが聞くとベールは低い声で返答する。
「二人と同じです。あの腐れ店員にこの世界に落されました」
「…それよりもどうすんだ？それにどうやったら戻れるんだよ！」
上条が言う、それはおそらく自分の身を守る為である。もしベールがゲームを買えなかったら半殺しにされそう。なんとなくそう感じたのだ。
「……これは私の予想ですがゲームをクリアすれば出られると思いますよ。以前ネプテューヌもディスクの中に閉じ込められたらし

いですし…」
「…まずどんな状況でディスクに閉じ込められるかわからないけど…まぁいいや。それよりもしここがゲームの中なら俺達にもステータスってもんがあるんじゃないか？」
たしかにここがゲームの中ならステータスは存在するはず。上条はそう思いステータスをどう見るか考えてみると…
「あっ…開けましたよ」
ネプギアがステータスを開く、どうやって開いたのかはわからないがとにかくすごい。
「どうやって開いたんだネプギア？」
「えっと……たしか…こうでしたっけ…」
…読者からしたら全くわからないが、とりあえず上条とベールもステータスを開く事に成功する。そして3人がステータスを見比べてみる。

『上条当麻Ｌｖ１：ＨＰ４５、ｓｐ０：称号、自称勇者』
『ネプギアＬｖ１：Ｈｐ４０、ｓｐ２０：称号、自称乙女』
『ベールＬｖ９９：ＨＰ９９９、Ｓｐ９９９：照合、廃人』

「ってなんだよこの称号！何自称勇者って！？自称の部分いらないだろ！」
「なんなんですか私の称号！？乙女はいいですけど私も自称付くんですか！？」
それと、と上条が更に言葉を付け加える
「なんでベールのＬｖが高いの！？しかも全ステータスＭＡＸって一体どんな手を使ったんだよ！」
「そこにいた青いコートの男に脅し……頼んだんですよ。」
「今脅したって言おうとしたよなオイ！それにそこにいる青いコートの男を丸焼きにして滝に落そうぜ、こいつがすべての元凶だろ。」
何気に怖い事をいう上条、そして丸焼き→滝落しという行動が始ま

る中、青いコートの男もとい作者魔界魔が立ちあがる
「お…おい、ちょっと…うそだよね…三人共…？」
魔界魔は助けを乞うが時すでに遅し…行動は始動した。
「「「お前ちょっと滝で頭冷やしてこいやーーー馬鹿作者！！！」」」
上条・ネプギア・ベールのコンビネーションプレイにより魔界魔は滝に落された。
ついでにベールのＬｖは元に戻ったらしい。

＊

「さて、と…忌々しい作者も抹殺した事だし…とりあえず町にでも行くか、ＲＰＧで基本中の基本だけど…」
「その前にＬｖをあげた方がいいんじゃないですか当麻さん？」
たしかに当麻のいう町での情報集めもいいがネプギアのＬｖ上げという意見にも一理ある。だがここで廃人ゲーマーが切り出した
「私的にはＬｖ上げの方がいいと思いますわね。町でいきなり襲われるっていう心配もありますし…」
「それじゃ…ベールとネプギアの意見を採用してＬｖ上げにするか。…さてモンスターを探さないと…」

チャララチャララー！！
「……何今の」
「もしかしたらエンカウントボイスじゃないんですか？」
「いやこれは〇ラクエのＬｖアップ音声だと思うぞ…って気にしたら負けかこの世界では…」
なんだかんだでモンスターとの戦闘が始まる。現われたのは普通のアリの大きさの１０倍くらいの大きさを持つビックアントＬｖ１５が２体である。
「でかっ！！なんだこのアリ！？」

上条が驚くとネプギアは冷静に分析する。
「…どうやらビックアントという生物ですね…Ｌｖ１５とこの地域では一番Ｌｖが高いです。」
「ってヤバいじゃん俺達、こっち全員ｌｖ１だぞ！どうしろってんだよ！」
するとベールが武器である槍をビックアントに向ける、戦闘する気マンマンである。
「ベールいくらお前が女神でもこの状況はさすがに…」
「大丈夫だと思いますわよ、だっていくらＬｖが高くても運動能力が低かったら戦えないでしょう？」
するとネプギアが、そうか、と何か閃いたようで…
「つまりこっちのＬｖが低くてもこっちの身体能力が高ければ勝てると…」
するとベールが頷く、とりあえずこのままでは逃がしてくれる雰囲気では無いので戦う準備をする。
「そうだなたしかにこのままやられてゲームオーバーになるのもあれだし…やるしかないか…」
当麻が言うと、一斉にビックアントが襲ってきた、が……

「一文字スラッシュ！」
まずは当麻の一撃がビックアントよりも先に炸裂、ビックアントに２５のダメージ。
「ソニックスラッシュ！！」
これはネプギア、ビックアントに３０のダメージでビックアント１体を撃破
「プリュンヒルデ！！」
そしてベール、ビックアントにクリティカルで９７ダメージで撃破
Ｌｖ１の集団がこの地域の首領を瞬殺してしまった。そして３人のレベルも上がる。

「…思ったより強くありませんでしたね。」
「ああ…なんだか凄く一方的だったような…」
「この調子でドンドン行きますわよ」
ちなみに上のは戦闘終了ボイスである。とりあえず3人はビックアントを瞬殺し順調にＬｖを上げをし町に向かう。だがまだ3人は知らなかった…この世界で何が起きているのかを……

ゲイム業界質問コーナー

魔界魔「えーっと…今日は質問がありませんのでやりません。」
当麻「お前適当すぎんだろ！一応やれよ！質問なくてもなにか！」
魔界魔「そうだな…じゃ…この世界の法則でも書くか」
当麻「この世界って…ゲームの中か？」
魔界魔「ああ、まぁくわしくは下の文章を見ろ、すぐわかるから。」

～ゲーム世界の方式について～

１：戦いにおいての重要なのはこの世界ではＬｖだけじゃ無く身体能力も問われる。つまりＬｖが高くても身体能力が低ければ意味が無いという事である。

２：この世界でのＨＰ０は死を現す。ただし生き返る方法はある。ようするに仮死

３：もしこの世界でＰＴが全滅したら上記の仮死では無く本当の死

なので生き返る事は無い

魔界魔「とりあえず上記が基本的な法則だな。」

４：この世界は広大である。

魔界魔「どれくらい広いかは言えない、自分で考えてみてくれ。

５：魔王を倒せばゲームクリアである。

魔界魔「ま…大体これくらいか…法則は…」

当麻「そろそろ時間だな…それじゃ次回もよろしくな！」

～現在のＰＴメンバーにステータス（最大ＰＴは６人）

『上条当魔Ｌｖ１→７：称号、駆け出し勇者：武器、ブレイブソード』

『ネプギアＬｖ１→６：称号、自称乙女：武器、ビームカリバー』

『ベールＬｖ１→８：称号、槍使い：武器、メタルスピア』

１４話：冒険の始まりは突然に…（後書き）

；今回はこれで終わりです。次回もよろしくお願いします！！…後今回の章のメインは上条、ネプギア、ベールの３人です。

１５話：どこの世界でも作者は最強（前書き）

；今回も普通にバトルありです。しかも今回バトルする人物はチートな相手で？

上条「ネタバレはだめだぞ」

15話：どこの世界でも作者は最強

＊

～ソフト王国城下町～

ここはソフト王国の城下町、ついでにソフトというのはソフトウェアのソフトの部分を取っただけである。でも所詮ゲームの中なので町の名前なんてどうでもいいだろうと思った人は正解だ。とりあえずこっちもいちいちソフト城下町と書いてもめんどいので城下町と書く事にする。

とりあえず前話で巨大なアリやらと色々なモンスターを討伐し順調にレベル上げをする上条当麻達の自称勇者パーティーがこの城下町に辿り着く。

「さてと…ここが城下町か、少しリーンボックスの町並みにそっくりだな。」

上記の言葉をこの城下町の広場の中央でつぶやいた上条当麻。

「本当ですね…リーンボックスの中世の町並みに似ています。」

これはネプギア。

「私ちょっと感動していますわ…まさかゲーム世界の町並みを拝めるなんて」

そして何やら感動しているベール。３人共リーンボックスに似た中世の町並みに少し見惚れていた。

「それよりも早く探さないか魔王の手がかり、もしベールの読みが正しければ魔王を倒さないと俺達永遠にこの世界に閉じ込められんだぞ」

「それはそれでいいではありませんか、ゲーム世界の中で住めるな

んてまるで夢のようですわね。」
「いや、だめだろ！そもそもお前がいなくなったらリーンボックスはどうなるんだよ！」
「その時は第二第三の私が……」
「現われないから！そもそも第二第三もそうそういないだろお前の分身！」
…さっきの怪しい店員に向けていた殺意は一体どこに消えたのだろうか…そう考えながらツッコミをし続ける上条当麻。
このままでは話が進まないのでこの流れに終止符を打とうとネプギアが口を開く
「とにかく…何か装備とか整えませんか、さっきも戦闘しまくって金はある程度あるようだし…」
ネプギアがそう言うと上条が返答する。
「そうだな、たしかに装備は整えておいた方がいいかもな…ベール先生もそれでいいか。」
この世界ではゲームの知識はかなり重要な物なのでなぜか二人はベールを尊敬と畏怖の念を込めてベール先生と呼んでいる
「ええ、何時敵に襲われてもいいように装備は整えておくのが妥当な判断ですわね…」
「よし、それじゃまず武器屋にでも行くか」
こうして女神三人御一行はまず武器屋に行く事に……

～城下町・武器屋～

ここはソフト王国の武器屋である。ゲームでいうそこらへんにある武器屋である。そして冒険者は必ずこの武器屋を愛用するのがＲＰＧの決まりである。
「…ここが武器屋ですのね…まさか本物を拝めるなんて…」
ベールが武器屋に来たのに武器には目もくれず感動している。とりあえず先生は置いておいて武器を選ぶ事にする。

「いろんな武器があるんだな…」
「それは武器屋ですからね…」
上から上条、ネプギアの台詞である。２人は感動に浸るベール先生を置いておいて武器を見ていた。売っている武器はどれも元祖ＲＰＧで本当にありそうなのばっかりであった。

・ブロンズソード：銅で作られた使いやすい剣、初心者にお勧めな７００ゴールド
・メタルブレード：鉄で拵えた体験、値段は１３００ゴールド
・妖刀：妖刀、とにかく妖刀、だれがいおうと妖刀、これを持っていたのはあのマヨラーのニコチン男だとかの噂も…３０００ゴールド
・無銘刀：名前の無い刀切れ味は抜群、５０００ゴールド

「…ネプギアは何か欲しい物あるか？俺はこのブレイブソードで十分だけど…」
「いえ…特に私も…」
「私もありませんわね…そもそも私は刀や剣は使いませんし…」
３人はそういうと、武器屋を出ていき今度は防具屋に向かう事にした。

～城下町・防具屋～

…三人は防具屋に入ったが中身はやっぱりというか…武器屋と内部構造がまったく変わらなかった。その後３人は防具を見たが、店員にあぶない水着などを進められた女神二人は、店員をボッコボコにしたのは別の話である。その後３人は防具屋を出た。

～城下町・宿～

ここは城下町の宿である。武器屋と防具屋にいってもまったく収穫の無かった女神3人パーティーが次の訪れた場所である、目的は魔王の情報を得る為である。……え何、そんなの国王にでも聞いた方が早いって？バカ野郎！あの3人は選ばれた勇者じゃないから国王が直々に合う訳ないだろう！…久々の冗談もここで置いといて本編に戻る。

「ここが宿か…やっぱりゲームと似ているな…なんかこう…その…ベットの配置とか…」

「当麻さん、一人でぶつぶつ言ってないで手伝ってください。私達は魔王の情報を得る為にここにきたんですよ。」

「ああ…ごめんベール先生」

とりあえず上条は聞き込みを始める、目的は魔王の情報、それ以外には興味が無い

「つーか魔王なんて聞き込みで見つかるモンなのか？そもそもこの国とかの人達には魔王という存在すら知らない可能性が…」

上条が聞くとベールが返答する。

「その時はそこら辺にいる巨大なモンスターを倒して聞き出せばいいんですよ。」

「怖いよベール先生の発想！なんでそんなやり方しか思いつかないの！？」

「私達には魔王を倒してこの世界を乗っ取るという目的があるじゃありませんか。」

「無いから！俺達の目的はゲイム業界に戻る事だから！そもそもお前の発言でどっちが魔王かもうわかんないよ！！」

…ヤバい、ベールの目的がどんどん悪い方向に変わっている…早くなんとかしないと…そう思う上条当麻であった。

結局、魔王の情報を得られなかった女神御一行はベールのモンスターによる聞き出しを始める事に…

しかしこの時点でこのソフト王国滅亡の歯車は回り始めた事をまだ知らない…

＊

～ソフト王国近くのダンジョン・絶望の谷～

…ここは王国近くのダンジョンで、絶望の谷と呼ばれる場所である。どうゆうダンジョンかは想像に任せるがとにかく危ない谷なのである。それはもう普通の人がこの谷から落ちたらもう即死レベルなくらいに…そして女神御一行はモンスター狩りの為にこの絶望谷に来ていた

「うわ……不気味だなこの谷…」

上条はこの谷を不気味だと呟く

「この谷の下に落ちたら命は無いですね…」

これはネプギアの発言

「でも私達は変身すれば飛べるではありませんか。」

最後の発言はベールの発言、ついでに3人共注意しながらこの谷を渡っている。

「早く奥に進んだ方が私はいいと思いますわよ、こうゆうのって大体重要なイベントが…」

「まさかそんな都合良くイベントが起きる訳…」

ベールの発言に上条が呆れる。そんな話をしながら絶望谷を歩いていると……

チャララーチャララー！

…いきなりあの音声と共にモンスター出現である。

「…なんかこの音声聞くと…あの…なぜか戦う気が失せるよな…」

「そんな事いっている場合ですか！モンスター来ましたよ当麻さん！！」

そんなこんなで始まった戦闘、現れたモンスターは……

・盗賊ＬＶ１８×１５体

「多いな！一体どっから沸いてきたのこいつら！」
上条が突っ込みをすると盗賊がナイフを持って接近してくる。
「クックックッ…見逃してほしければ持ち金と女を置いていきな…」
ゲームでありがちな盗賊な台詞である。上条はめんどくさいオーラを放出しつつも戦闘態勢に入る。
「ケッ…マジかよこいつら、俺達１５人相手にたった３人で挑むらしいぜ…ファッキンユー！！」
「勝てる訳ないのにな…ファッキンユー」
「それじゃお前の命を頂くぜ…ファッキン「「「うるせぇぇぇぇぇぇ！！！」」」グハァ！！」
「「「「「「「「兄者ああああああああああ！！！」」」」」」」」
何だ…このつまらないコント…誰もがそう思ってであろう。
ついでに今なにが起きたのか説明すると盗賊一人がユーと言う所で上条ら３人にドロップキックを喰らった。
「貴様ら！兄者を不意打ちで倒すとは…最低な行為だとは思わないのか！！」
明らかに盗賊が正しい事を言っているのはなんだかおかしい事だか気にしてはいけない。
「うるせーよ！ファッキンユー、ファッキンユーってさっきから、お前等がファッキンユーだよ」
「それに明らかに大人数で襲い掛かってきた盗賊さん達に正しい事を言われるとなぜだか腹が立ちます」
「もうさっさと終わらせますわ、こんなモブの中のモブなんかに構ってられませんもの」
上から上条、ネプギア、ベールである。すると盗賊よりも先に３人が盗賊に攻撃を仕掛ける
「なっ…貴様等、本当に容赦ないな！！この状況を見てなんとも…

グハァ！！」
盗賊が言いかける前に右ストレートを喰らい撃沈する盗賊の一人
「くそっ！盗賊の名にかけてこいつ等からお金を頂戴するぞ！！」
「おおーーー！！」
盗賊の士気が上がった。しかし何の意味も無かった。とにかくなんやかんやで戦闘が始まる。

＊

あれから2分後、盗賊は見事駆逐され山になっていた。
それにくらべて3人はまったくの無傷である。
「…一体なんだったんだこの盗賊？」
上条が言う、しかしそんな事などわからないしどうでもいい。
「つーかよくよく考えてみればこの小説大事な所を圧縮しすぎじゃないか？」
「そういえばそうですわね…かなり圧縮してますわよね。」
「…だったらまた作者どっかに落とせば解決するんじゃないですか？」
ネプギアの発言に上条がツッコミそうになるが、それはとある声でかき消された。
「俺を落とせばなんだって？」
「「「！」」」
突然耳に届く声に驚く3人、現れたのは前回3人のコンビネーションプレイで滝に落とされた作者こと魔界魔である。
「お前は…魔界魔！！」
「ああ、そうだよ、前回お前等に滝に落とされた魔界魔だよ。」
上条の問いかけに魔界魔は答える。
「魔界魔さん、何か用ですか？それともまた落とされにきたんですか？」
ネプギアが聞くと魔界魔が返答する。

「ああ、最近、俺って扱い悪いだろ？だからお前らに作者の偉大さと強さを教えてあげようと思ってさ」
「それはつまり…私達と戦いに来たって事ですか？」
「ああ、その通りだ。言っておくが今回の俺はふざけ無しだ真面目で行かせてもらうぞ」
すると魔界魔が巨大な斧を構える、どうやら今回は彼もマジの様だ
「魔界魔…テメェ一体何が目的だ…」
上条が聞くと、魔界魔は吐き捨てる様に言い放つ
「別に…お前等がこの世界でちゃんと生きていられれかの実験だよ。遠慮はいらねぇ殺すつもりでかかってきな！！」
すると上条が敵意を剥き出しにして。戦闘態勢に入る
「上等だよテメェ…お前を倒して何考えてっか聞き出してやるよ…」
そして作者：魔界魔と女神３人のゲームの中での激突が始まる

＊

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！」
上条が魔界魔に単身突っ込む、そして思いっきり右拳を魔界魔の顔面向けて放つ。
「遅すぎるぞ、当麻」
しかしその一撃は簡単に避けられる。魔界魔は巨大な斧を上条に叩きつけようとする。だが…
「俺は囮だよ」
上条の一言ですべてを理解した魔界魔、魔界魔が周りを見渡すと後ろでネプギアがビームカリバーを魔界魔に向けて振り下ろす。

カキン！！！！

鉄と鉄がぶつかり合う鈍い音が響く、ネプギアのビームカリバーが魔界魔の斧によって防がれる。

「ふーん…当麻は囮でその間にネプギアで後ろを取りそして…」
すると魔界魔がネプギアを振り払い後退させると魔界魔は大きく飛翔する。するとさっき魔界魔が居た場所に風が切れる音がした。そこにあるのは一本の槍だった。
「ベールで横から突くという戦法だったのか。…さすがは女神か…だが…」
すると魔界魔が斧を上空に構えると、斧が突然、光を放つ
「展開せよ！次元斧アクセラレイド！！」
すると魔界魔が次元斧を先端の刃の部分を下に向ける落下してくる。
「クラビトンフレア！！！」
魔界魔が斧を下に向け落下してくる。そして次元斧の炎が纏い地面に着地する。それを止めようとする上条、しかし間に合わない、いや…たとえ間に合ったとしてもこの巨大なエネルギーを上条を一人で…右手一つで止める事ができるのかわからない。
（間に合わない！！このままじゃみんなが…ちくしょう！この右手一本じゃ守れないのか…みんなを！！）
そして……

ドガアアアアアン！！！！！

グラビトンフレアのエネルギーが大爆発を起こした。そしてこの絶望谷の地面が大きく抉れる、そして残ったのは…たった3人のボロボロになって横たわる女神だった。
「……俺の勝ちだ、お前等が相手じゃ１０００人いても俺には適わないって事で…！！」

カキン！！
魔界魔が言うと突然、剣が一本飛んでくる、そして咄嗟に飛んできた剣を斧で弾く、そして弾いて落ちた剣を拾いあげるとその剣は当麻のブレイブソード、そう…この剣が飛んできたって事は当麻はま

だ立っている。そして煙が晴れるとやはりというか当麻が立っていた、しかし明らかに様子がおかしい。
「……」
当麻…いやイマジンハートは何も言わない、ただボロボロの体で真っ直ぐ立っているだけだった。そして手に持っているのはいつもの刀では無い、あの時の黒き刀だった。
（なんだ…あの黒い刀身を持つ刀は…禍々しい力を感じるぞ！！）
魔界魔は驚く、当麻では無く当麻の持っていた黒き太刀に…
「あの刀は危ない！今すぐに叩き折る！！」
すると魔界魔がイマジンハートに向けて突っ込む、するとイマジンハートも漆黒の太刀を構える。
「おらあああああああああああああ！！！！！！」

ズガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

そしてぶつかりあう次元斧と漆黒の太刀、二つの武器はぶつかり合い火花を散らす
「俺の動きについてくるとはやるな当麻、だがその刀はあまりにも危険だ…叩き折らせてもらう！！」
魔界魔が次元斧を思いっきりイマジンハートに向けて振るう、だがその一撃をもあの刀で防がれる。これには魔界魔も驚く
「なっ…俺の一撃を真正面から受け止めるなんて……」
魔界魔は驚きもう一度距離を取る、そしてもう一度次元斧でイマジンハートに攻撃しようと向かって行くが……

バタッ！！

「えっ……」
突然イマジンハートが倒れ変身が解けてしまった。漆黒の太刀もイマジンハートが当麻に戻るのと同時消えてしまった。すると魔界魔

がネプギアとベール、そしてさっき倒れた上条を抱え歩き出す。
「…さてと、当麻からは目覚めたら事情も聞かないとな…そしてあの剣の事も……」
魔界魔はソフト王国に向けて歩き出した。たくさんの疑問を抱えながら。

ゲイム業界質問コーナー

魔界魔「さてさて今回も始まりましたこのコーナー！！」

上条「テンション高いなお前」

魔界魔「それはもう本編に出られたからね…機嫌はかなりいいよ！！」

上条「ま、とにかく本編に出れてよかったな魔界魔、さて質問コーナー行くぞ」

質問当麻へ、どちらかをやらないと絶対に学園都市に戻れないってなったら君はどうする。もし両方できなかったら永遠にゲイム業界に居るようだよ。
１：御坂美琴１０００人から１０時間逃げ切る
２：ひとりかくれんぼを実行して生きて帰る
３：宇宙最強魔王ゼタの人間時と一気討ちで勝利する。

上条「どれも無茶苦茶だろこれ！！…でもまあ…やるとしたら１番だな。女神化して空中に逃げてれば勝てるし」

魔界魔「ひとりかくれんぼってたしかあれだよな…現代版こっくり

さんみたいな奴」

ネプギア「怖いの苦手な人はまず出来ませんよね…これ。」

上条「俺がゼタと一騎打ちして勝てる訳ないだろ！宇宙最強魔王だぞ、あれでも」

ゼタ「あれでも、とはどうゆう事だ小僧、まさか我の本の時の姿を言っているのか？」

魔界魔「うわ！ゼタがなんでここにいるの！？」

ゼタ「暇つぶしに来たのだ、そしてそこの小僧を殺しにきた。」

上条「いや…なんで？」

ゼタ「何となくだ。」

上条「よし、逃げるか。」

魔界魔「逃がすと思ったか！このフラグ建築士が！！（上条の後ろを取りホールド）」

上条「やば、しまった！！」

ゼタ「喰らえ！！ゼタビィィィィィィム！！！！！！！」

上条「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！！！！不幸だあああああああ！！」

ゼタ「さて、我は満足した。帰るとするか…」

宇宙最強魔王ゼタが姿を消した。

上条「もう二度度来ないでくれ……（ボロボロ）」

魔界魔「良く生きてたな、あんなやばい技喰らって…」

上条「多分、俺の右手が威力を半減させたんだと思う、さて次の質問行くぞ」

質問：一級フラグ建築士の上条さんに質問です。いい加減に本妻を決めちゃえば？

魔界魔「よし、さっさと答えてもらうおうかお前のフラグ建築効果に終止符を打つ為にも」

上条「いきなりそんな事いわれてもな……」

魔界魔「答えられない程、君は彼女候補が多いのか、すいませーん！誰かこいつに天罰を下してください！！」

上条「だめだ…そもそも俺には彼女どころか俺に好意を持っている相手すらいるわけないだろ。」

魔界魔「聞いててネプギアがかわいそうになってくる…駄目だこいつ…早くなんとかしないと…」

上条「さてと…この質問は無視して次の質問いくぞ」

質問：禁書メンバーは一体いつでてくんですか？

魔界魔「禁書メンバーはまだ出しません、けど出す予定はあります。」

上条「さてと今日の質問はここまでだ、また次回もよろしくな」

～現在のＰＴメンバーにステータス（最大ＰＴは６人）

『上条当魔Ｌｖ７→１０：称号、駆け出し勇者：武器、ブレイブソード』

『ネプギアＬｖ６→１０：称号、自称乙女：武器、ビームカリバー』

『ベールＬｖ８→１１：称号、槍使い：武器、メタルスピア』

１５話：どこの世界でも作者は最強（後書き）

；今回も無事、終わりました。次回もよろしくお願いします。

１６話：黒い真実（前書き）

；小説の書き方がまた元に戻りました、理由は質問コーナーで明らかになりますのでそちらをご覧ください。

16話：黒い真実

＊

まず最初に目に映ったのは木造の屋根、視界が戻るのと同時に眠っていた五感も機能し始める。
まず戻ったのは痛覚、体中が痛い、体を良く見ると包帯があちこちに巻かれていた。
そして次は感覚、何かやわらかい物の上で寝ているのを感じ取った、予想はできるのだがおそらくベットの上で横たわっているのだろうか。
そして最後に聴覚も回復してベットで眠っていたツンツン頭の不幸な男は目を完全に覚まし立ち上がる。

当麻「ここは…宿か…？」

起き上がって無意識に口から出てしまった第一声がこの言葉だった。
それよりもネプギアとベールはどこにいるのだろうか、そう考えてベットから完全に立ち上がると――――――

？？？「起きたのか？」

突然、当麻の耳に響く低い声。当麻は声をした方を振り返るとそこに立っていたのは青いコートを身に纏った人物、作者こと魔界魔である。

上条「…アンタはたしか…」

ここで当麻がある事を思い出す。なぜ自分が宿で眠っているのか、すると当麻が過去の出来事を振り返り始める

1：ソフト王国で武器などを探す。

2：ダンジョンで盗賊という名のファッキンユ―一族を撃破して。

3：魔界魔と戦い敗北。

…この時に当麻はすべてを思い出した。なぜ自分がこんなに重症を負っているのかも何もかもすべて、そしてその怒りはまずすべての元凶である青いコートの男に向けられる事になる。

上条「…フフフフフフフ…思い出した…思い出しましたよ上条当麻…今この状況の元凶はここにあり…即刻顔面パンチじゃあああああああああああ！！！」

そして当麻の右ストレートが思いっきり放たれる、だが魔界魔はその右拳を片手で掴む。

魔界魔「落ちつけ当麻、傷口が開くぞ」

上条「傷口が開くぞ、じゃねーよ！！誰の所為でこんな状態になってると思ってんだ！！」

魔界魔「さあ？誰だろうね？」

上条「やっぱり一発殴らせろコンチクショー！！！！！」

魔界魔「落ちつけって当麻、ストレス溜めすぎるとハゲるぞ」

上条「ストレスの原因はお前なんだよ！！理解できたか！！アンダスタン！？」

魔界魔「ノーアンダスタン」

上条「理解できるようにしてやるから、一発殴らせろおおおおおおおお！！！！！」

宿でうるさい声がガンガン響く、結果当麻は注意されて宿の人からがみがみ言われる羽目になってしまうた。ついでにアンダスタンの意味は理解である。

＊

なんだかんだで目覚めて直ぐにキャラが壊れる程の怒りとツッコミをぶちかました当麻と青いコートを着たすべての元凶である魔界魔、当麻程では無いが体中に包帯を巻いていたネプギア、そして怪我が少なかったのか当麻とネプギアとはまた少ない量の包帯を体に巻かれているベールが宿の中央のテーブルに集まっている。

魔界魔「さて、とりあえず全員揃った訳だが…まず話したい事がある。」

魔界魔がめずらしく真剣な表情をしている。きっと重要な話であろうと当麻は姿勢を整える、だが魔界魔が話そうとする前にネプギアが珍しく先に口を開いた。

ネプギア「あの…その前に質問いいですか？」

まかい「ああ、なんの質問だ？」

ネプギアの質問を認める魔界魔、するとネプギアがなぜか顔を真赤にして静かに言い放つ。

ネプギア「あの…その…私達の体に包帯を巻いてくれたのって……」

するとこの質問に魔界魔が爆弾発言をする。

魔界魔「それは俺だ、お前ら3人の包帯は俺が巻いた。」

そしてその発言と同時にネプギアのビームカリバーが魔界魔の額に突き刺さった、それにネプギアと上条、そしてベールが青いコート

の見る目を今の一言で完全に変わった。
当麻「…まさか魔界魔がそんな変態だとは思わなかったよ。俺は……」
ベール「最低ですわね……」
ネプギア「もう私達に近づかないでください」
それぞれ3人が青いコートの男に冷たい事を言い放つ。

魔界魔「あれ…なんで俺が悪いみたいになってんの？治療してやったの俺だよ？」

上条「でも俺達にこんな重症を負わせたのはお前だろ」
魔界魔「……」
当麻の発言に冷や汗を流し何も言葉を発さなくなった魔界魔、さらに額から血が噴き出している、もうふざけているようにしかみえないが、ここにいる4人は真剣である。

上条「……ネプギア、ベール」
ネプギア・ベール「「はい」」
当麻が今度は縄を持つとネプギアとベールを呼ぶ、2人は黒いオーラを放出しながら、ネプギアは鎖鎌にベールは槍を構えている。

魔界魔「え…あの…一体…あなた方は何をしようと……」
魔界魔が黒いオーラを放つ3人に聞くが、もうすべてが遅かった、その後3人の攻撃により10分間ほどタコ殴りに合った魔界魔であった。

数分後……

魔界魔「さて本題に戻ろうと思う。」

これを発言したのは、さっきまでは真面目オーラを放出していた魔界魔である。しかしタコ殴りに合った所為か体中がボロボロである。さらにさっきの爆弾発言の所為で放っていた真面目オーラが完全に消滅したようである。とにかく魔界魔はボロボロなのである、それだけわかってくれたならよい。

魔界魔「まず俺からの忠告だが……お前らにはこの世界でやってもらいたい事がある。」

上条「やってもらいたい事？」

上記の発言は上条である。そもそもいきなりやってもらいたい事なんて言われても無茶である。女神様御一考はこの世界に来たばかりでこの世界がどれくらい広大かも分からない。

魔界魔「そうだ、やってもらいたい事はな……」

すると割り込みでベールが発言する。

ベール「魔王を抹殺する事でしたわね。」

魔界魔「いや違う、そもそも俺の話を聞け、それにお前らこの世界の仕組みをまだくわしく理解してないだろう。」

ネプギア「それじゃ…一体やってほしい事って……」

ネプギアが考える、しかしネプギアの案を待つ訳にもいかないのでとりあえず魔界魔は説明を続ける。

魔界魔「俺がやってほしいのはこの世界に落ちたシェアクリスタル

の回収だ」
シェアクリスタル”聞いた事ない単語に上条は食ってかかった。
上条「シェアクリスタル？」
食いついてきたのはいいが当麻はシェアクリスタルを知らないらしい、とりあえずシェアクリスタルについてはネプギアが説明する。
ネプギア「シェアクリスタルというのはですね。当麻さん、シェアはご存じですか？」
上条「シェアって…たしか女神様に対する信仰力みたいな物だとか…」
ネプギア「そうです。私達女神はシェアを…すなわち信仰力を強さとしているんです。当麻さんも守護女神ですからシェアの影響を受けている筈ですよ。」
上条「…そういえば体が軽くなったって最近になって感じるようになったけど…それもシェアの影響か？」
ネプギア「はい、当麻さんも他の女神たちと同じくシェアの影響で身体能力が増加したりしているんですね。」
上条「つまり…シェアクリスタルっていう物はそのシェアの集合体の様な物か？」
ネプギア「はい、簡単にいうと信仰力の塊ですね。」
…やっとシェアクリスタルの説明を終えるネプギア、説明が終わったのを確認すると魔界魔が話しを切り出す
魔界魔「…実はこの世界にはシェアクリスタルが3つ程存在してな…そのシェアクリスタルを回収してほしいんだよ。」
魔界魔の発言にベールが疑問を投げかける。

ベール「でもなんでシェアクリスタルを回収する必要が…シェアクリスタルは別に放っておいても害にはならない筈じゃ……」

するとその発言に魔界魔が頭を抱える

魔界魔「たしかにな……ただこの世界にシェアクリスタルが存在する事…すなわち異世界の物がこの世界に存在するのはこの世界を狂わす事になるからな…ダメなんだ。」

すると今度は上条が疑問を投げかける。

上条「でも一体どうやってここにシェアクリスタルが…それってけっこうデカイ物なんだろ？どうやってこのゲームの世界に…？」

魔界魔「…そろそろ本当の事を話すか。」

ネプギア「本当の事？」

何をいっているのかさっぱり分からないネプギア、勿論、当麻とベールも理解できていない。だが魔界魔は話を続ける。

魔界魔「…この世界はたしかにゲームの世界だ…だがここはゲームの世界であってゲームの世界では無い。」

ネプギア「えっ…それって…一体どうゆう…」

魔界魔の説明にさっぱり理解できない女神様御一考。

魔界魔「ここはな…ゲームをモチーフにして作られた世界なんだよ。」

上条「…つまりゲームを参考にして生まれた完全に別世界か？」

魔界魔「ああ、ゲイム業界とは違う完全な別世界だ、そしてこの世界を作り出したのは…犯罪組織構成員であるリンダ…いや違うな、

下っ端でいいな、うん。」
上条「リ……下っ端が作り出した世界って…一体どうゆう…」
この世界を作り出したのが下っ端だという事実に驚く上条。
魔界魔「お前らこの世界にくる前に謎の服着た怪しい店員にゲームを見せられて吸い込まれたんだろ。」
魔界魔の質問に3人は頷く
魔界魔「あのゲームの中にはな…違法ディスクが入っていたんだよ。」
ネプギア「違法ディスク…でもあれってモンスターを入れる奴じゃ……」
魔界魔「モンスターが実際中に入ってんなら人だってその違法ディスクに入れるのは可能だよ、それにプログラムを設定しちまえば簡単に仮想世界なんて作れるしな。」
ネプギア「つまり…あの怪しい店員の正体は……」
ネプギアが魔界魔に問い詰める。

魔界魔「ああ…下っ端だ。」
魔界魔はさらりと答える。だが下っ端は一体なんの目的があって上条達をこの世界に閉じ込めたのか…それはわからなかった。

魔界魔「…おそらく俺の予想だが…下っ端はここをゲイム業界にあるシェアなどをこの世界に封じ込め、厄介な女神をもこの世界に封じ込める事で犯罪組織を復活させるつもりではないかと俺は思う。」
上条「つまり…下っ端は俺達の力を完全に封じた上で犯罪組織を復活させようとしている事か？」
当麻の疑問に魔界魔はサラリと返答する。
魔界魔「…おそらくな、とりあえずお前らに頼みたいのはこの世界に落ちたシェアクリスタルの回収だ、頼めるか？」
勿論、3人は反対するつもりは無い、だがここで今度はベールから

の質問が入る。

ベール「それでシェアクリスタルを回収したら魔王を倒して現実世界に戻ればいいという事ですわね。」

魔界魔「残念だが魔王を倒してもこの世界からは出られない。」

魔界魔の返答に3人は驚愕の表情を現す。

魔界魔「この世界から出るにはこの世界のシステムの一番の中核を破壊しなければならない。もしお前らがシェアクリスタルを回収したらそのシステムの中核の部分へなんとか行ける様に細工をなんとかしてみる。…これならどうだ？」

おそらく嫌と言っても集めなければならないだろう、もしシステムの中核に行けないのならここで魔界魔の頼みを効かないとこの世界には永久に閉じ込められる事になる。どっちにしろこの要求を飲まなければいけないのである。そしてこの要求に最初に応じたのは上条当麻であった。

上条「いいぜ、とにかくそのシェアクリスタルってのを回収すればいいんだろ？」

ネプギア「それに犯罪組織の思うようにはもうさせません！！」

ベール「その要求…飲ませていただきますわ。」

3人の答えを聞いた魔界魔は満足そうに頷きながらこう言い放った。

魔界魔「ありがとよ、こちらもできるだけのサポートはさせてもらうぜ！！」

上条当麻自称勇者グループの目的が増えた、その第一目的はシェアクリスタルの回収である。

＊

ここは上条当麻の自室である、正式には宿で借りてる部屋である。
魔界魔がとりあえず宿代は払ってもらったので出発は明日という事になった。そして現在時刻はいつの間にか夜中、この世界では時間の経ちがかなり早いのである。ただしそこはゲームと同じでダンジョンにいる時は時間は1秒も進まない仕組みになっている。
上条当麻は自室で眠れないのかベットの上で布団もかけずに横になっているだけだった、沈黙なこの時間は突然の訪問者によって沈黙は終わる事になる。
コンコンという扉を叩く音が当麻の寝室に響く、その音に反応して当麻が立ちあがり扉に手をのばす。

上条「はいはい、何か御用ですか、こんな夜中に誰ですか……」
めんどくさそうにして扉を開く当麻、扉の前にいた人物は青いコートを着た人物。

魔界魔「夜中に悪いな、もしかして寝てたか？」

上条「…こんな夜中に何か用ですか？魔界魔さん」

訪問者が魔界魔という事に驚く上条、だがこんな夜中に訪れるなんてもしかして俺にしか話せない事情があるかもしれないと内心では思っていたのだ。
魔界魔「実はな…お前に知っておいてほしい事があるんだ、中入っていいか、聞かれると困るからな」

どうやら内心での当麻の予想を当たっていたらしい、とりあえず魔界魔を招き入れる事にした。

魔界魔「さて、お前も眠りたいだろうからさっさと話すぞ」

上条「いや、別にいいよ…眠れないんだよな…なぜだかしらないけど。」
魔界魔「それじゃ話すぞ…とりあえず俺から渡しておきたい物がある。」
当麻の眠りたいというどうでもいい事を華麗にスルーして魔界魔は話を続ける。

上条「渡しておきたいもの？」
魔界魔「これだ。」
すると魔界魔が赤い携帯電話を一つ渡す、見た目は何の変哲も無い携帯電話だ。

上条「これは…携帯電話か？」
魔界魔「いや違う、たしかに携帯電話の形をしているが携帯電話では無い、これはな……Ｓギアという物だ」
上条「Ｓギア？」
当麻はもう一度この赤い携帯電話を見直す、どう見ても携帯電話にしか見えない。
魔界魔「このＳギアはこの中にシェアを溜める事ができる箱だ、携帯電話の形をした。」
上条「…だいたいわかった、このＳギアでシェアクリスタルを中に入れろって事か？」
魔界魔「…当麻はこの世界に来て勘が鋭くなったか？」
魔界魔の突然の問いかけに上条は返答する。

上条「それはつまり俺は鈍いという事を言っているのか」
魔界魔「それ以外何がある。」
当麻は拳を思いっきり握る、だけど返り討ちに合いそうなのですぐにやめたが…

上条「でも何で俺なんだ？別にこれはネプギアでもベールに持たせても問題ないんじゃ……」
魔界魔「勿論持たせるさ、ただついでに渡しておこうかなと思っただけだ」
上条「まあ…別にいっか……それにしても携帯電話の形してるんだ？」
魔界魔「なんとなく」
魔界魔の適当な返答に上条は呆れるが、この際それに関しては一回置いておこう、すると今度は魔界魔が話しを即座に切り替える。
魔界魔「それで…ここからは真面目な話だ」
上条「今までのは真面目じゃ無かったのか…」
もうツッコムのも面倒になってきたのでボケを軽く流し話を聞く
魔界魔「さて…この話は当麻にとって一番重要な話なんだ……でもその前に……」
魔界魔の発言に上条は頭上に？マークを浮かべる、すると魔界魔が扉の方を見てこう言い放った。
魔界魔「そこにいるんだろ、ネプギア」
魔界魔がそう言うと扉が開かれる、入ってきたのはピンク髪の少女であり女神候補生のネプギアである。そしてネプギアがここにいたという事に上条は驚く
上条「ネプギア……どうしてここに…？」
するとネプギアが静かに低い声で聞こえる。
ネプギア「あの……その…魔界魔さんがこの部屋に入っていくのを

目撃して…気になって……」
つまりネプギアには最初から話を聞かれたという事だ、残念だがここまで聞かれたら隠してはおく訳にはいかない。
魔界魔「…仕方が無い、ネプギアにも聞いてもらうか…とりあえずそこに座れよ」

ネプギア「あ、はい……」
とりあえず魔界魔はネプギアを招きいれてそこらへんに座らせる。
そして今度こそ魔界魔の質問が始まる。

魔界麻「…当麻にまず一つ聞きたい事がある、お前が女神時に持っていたあの黒い刀身を持つ太刀はどこで手に入れた？」
上条「えっ……」
上条は驚いた、それは理解できない事をいわれて驚いたのかそれとも黒き太刀の事を聞かれて驚いたかは定かでは無いが。

魔界魔「あの太刀は一体どこで手にいれたのだと聞いているんだ。」
魔界魔が上条を睨みつける。おそらく答えなければ無理やりにでも口を開かせられるだろう。そう思いながら当麻は口を開いた。

上条「あの太刀は……たしか……いつの間にか持っていて…それで…」
当麻は思い出す、カレンが自分を庇って殺された事、そしてその時に起きた出来事を……

魔界魔「……当麻、正直に答えてくれ、あの太刀を使った時の記憶は残っているか？」
魔界魔の問いかけに当麻は頭を下げる。

上条「……悪い」
すると当麻の反応を見た魔界魔が腕を組む
魔界魔「…やっぱりそうか。」
ネプギア「やっぱりって……何かわかったんですか？」
ネプギアが魔界魔に問いかける、すると魔界魔はネプギアの方を見て返答する。
魔界魔「ああ、とりあえず始めから説明した方が良さそうだな…まず当麻の持つあの太刀は漆黒（ゼロ）の太刀（ブレイド）と言う物だ」
魔界魔の説明を上条もネプギアも黙って聞いていた、そして魔界魔は話を続ける。
魔界魔「あの刀はな…魔剣の一つなんだよ」
上条「魔剣……？」
魔界魔の言う魔剣に反応する当麻、だがネプギアは何かを知っている様だった。
ネプギア「魔剣って…まさか……あのグババーンと同じ……」
魔界魔「残念だがグババーンは魔剣だけどこの刀とは違う…この刀は持ち主の善の心を喰らい力を増大させる刀なんだよ。」
ネプギア「持ち主の……」
上条「善の心…？」
魔界魔「この魔剣はな……持ち主が負の心を増大させた時に生まれる刀だ、そしてこの刀の力を使う時にその持ち主の善の心を喰らいどんどん持ち主の善の心を食い尽くす刀なんだよ。」
魔界魔の説明に一番驚いたのはこの刀の持ち主である上条であった。

上条「それじゃ…もし…この刀を使い続けると……」
上条の質問に魔界魔は答える。
魔界魔「この刀の持ち主の心は悪に染まり破壊するだけの人間になる……当麻が女神時にしか使用できないみたいだが…この刀を持ったお前は正気を失っていたし目の色が紫に変わっていた、善の心が食われている証拠だ。」
魔界魔の説明をただ黙って聞き続ける二人、そして今度はネプギアが魔界魔の説明に割り込んだ。
ネプギア「解決策は……あるんですか？」
魔界魔「ああ…無くはない。」
魔界魔の返答にほっとするネプギア、質問が終わった所で魔界魔は説明を再開させる。
魔界魔「この太刀から本人を引き剥がす方法はまず……刀自体を壊すか……もう一つはこの太刀を正気を失わずに使いこなせればこの剣の所有者をお前と認めこの刀は光輝くといわれるが…方法としては前者はやめたほうがいい……」
ネプギア「なぜですか？」
ネプギアの質問に魔界魔は返答する。この使いまわしいい加減に飽きたな……ｂｙ魔界魔
魔界魔「もしこの刀を壊したらこの持ち主である上条自身にこの剣に溜まっていた悪の心に飲み込まれる可能性があるからだ、それにこの刀は手放す事ができない…だから方法としては前者をお勧めする。」
するとさっきまで黙って話を聞いていた上条が口を開く
上条「…その刀ってまさか善の心を喰って悪の心を肥大化させるの

か？」
上条の質問に魔界魔は上条の方を向き返答する。
魔界魔「ああ、その刀は相当な数の善の心を喰ってきたはずだ…おそらく相当悪の心が溜まっているだろう。」
上条「…だとしたら俺の善の心はどれくらい喰われてんだ？」
上条の突然の質問に魔界魔は返答する。
魔界魔「お前の善の心は相当な量だ…それに幻想殺しによって魔剣の力も多少だが抑えられるだろう。だが……この世界にいる内になんとかしないとお前はあっという間に心を喰われるぞ。」
魔界魔の説明に口をまた閉じる上条、すると魔界魔が声を少し上げた口調で言い放った。
魔界魔「だが……お前ならその魔剣を変える事ができる筈だ、それにお前は…後一歩踏み出せば答えが見つかる所まで来ている。」
すると魔界魔の説明にネプギアが突然少し声を荒げて言う
ネプギア「でも…その肝心の第一歩とは一体！？」
魔界魔「残念だがそれは俺には分からない、それは上条自身が見つけ出す事だ」
上条「……」
上条は黙り続ける、考えているのか、それとも開く言葉も無いのかはわからない、すると扉が突然静かに開かれる
ベール「ここにいましたのね。」

魔界魔、上条、ネプギア「「「ベール（さん）！！」」」
上条、魔界魔、ネプギアは突然入ってきたベールに驚く、だが驚く三人を無視してベールは口を開いた。
ベール「…ネプギアの帰りが遅いと思ったらこんな所で世間話でもしていましておりましたの？」

ネプギア「いや…世間話というかなんというか…その……」

ベール「丁度良かった…私も一ついいたい事があって……」

上条「言いたい事？」

するとベールが上条の方を向く。

ベール「当麻さん、あなたの女神姿についてですけど……」

ベールの発言に魔界魔がその話に乗る。

「そう言えば俺も気にはなっていた……お前の女神姿を一瞬だけ見たがお前はシェアの吸収量が少ない上に女神としての力を余り引き出せていない…引き出せたとしても数分が限度だ…つまり…」

上条「つまり？」

上条が魔界魔に聞く、すると返答したのは魔界魔では無くベールであった。

ベール「当麻さんは完全な女神化を果たしていないという事ですわ。」

ネプギア「完全な女神化って……それじゃ当麻さんのあの姿はまだ本当の姿では無いと…」

ネプギアの質問に今度は魔界魔が返答する。

魔界魔「そういう事だ…あの時の当麻は簡単に言うと半女神に近い、だが…これで…魔剣解決の糸口が見つかった。」

ベール「魔剣…？」

するとベールが魔剣について聞いてくる、魔界魔は簡潔にベールに漆黒ノ太刀（ゼロブレイド）について説明した。

ベール「…大体の事情はわかりましたわ…それでその魔剣解決の一口は…」

魔界魔「簡単な事だ、当麻が今自分に関して最後の一歩を踏み出す事と同時に魔剣を自分の物にできるのに繋がると思う、それと完全な女神化にも繋がる事になるだろう…当麻、お前どうするつもりだ…」

魔界魔が真剣な表情で当麻の方を向き聞く、そしてネプギアもベールも当麻の方を振り向き口を閉じたままの当麻の方を見る。すると当麻が唐突に口を開く

当麻「……そんなの…最初っから決まってんだろ…」

当麻は3人に向けてただ一言ある言葉を言った。

そしてその言葉を正面から受け止めた3人は顔に笑みを浮かべる、そして魔界魔が当麻に最後にこう言い放った

魔界魔「…フン、当麻らしい答えだな。」
魔界魔はそう言った後に静かに当麻の部屋を後にした。
そして魔界魔は当麻には聞こえない大きさで静かに呟いた。
魔界魔「絶対にお前ならできる…当麻、さもないと……支配エンディングよりも恐ろしい悲劇が待ってるぞ…」

ゲイム業界質問コーナー

魔界魔「さてシリアスな話でも普通に行います質問コーナー！！」
上条「相変わらずテンション高いな……」
魔界魔「さて…さっそくだが質問コーナー行くぞ！！！」

質問：学園編の途中に当麻とイマジンハートの説明がありましたが説明不足な点が多いと思います、以下の知りたい事を載せますのでどうか返答お願い致します。
1：イマジンハートの目の色
2：当麻の身長と体重
3：同じくイマジンハートの身長と体重
魔界魔「この質問はP・Nビリビリ侍からの質問でした。」
上条「なんだよこの質問……」

魔界魔「さて質問に答えるぞ、質問結果は…こちら！！」

１：目の色は黄色です。
２：○ィキベリアでも見てろよ
３：身長１７０？、体重不明

魔界魔「そういう訳で次行くぞ～！！」

上条「あれ……今回はギャグが少ないな…」

魔界魔「シリアスな質問もあるからな硬い事は気にするな」

上条「えーと次の質問は……Ｐ・Ｎ★×２０からの質問

質問：上条さんに前作ネプテューヌの守護女神戦争についてどう思いますか？

魔界魔「さて上条、答えてもらおうか？」

上条「…戦争なんかやったって虚しさが残るだけじゃ無いのか、結局はフィアンマが引き起こした第三次世界大戦だって俺にはわからないくらいの多くの死者が出たんだと思う…だから戦争なんかやったって虚しさしか残らないと俺は思うな」

魔界魔「…そうか、さて最後に一つ俺から謝罪があります。」

上条「謝罪？」

魔界魔「実はまた小説の書き方が突然また変わったのはユーザーの

皆様は見ててご存じでしょうか、実は外伝に合わせて変えてしまい前の方が読みやすかったとのコメントもありました。だから突然で勝手ながら戻させていただきます。ユーザーの皆様も暖かい心で見守ってほしいと思います。」

上条「俺からも謝罪させてもらう、ユーザーの皆様には本当にご迷惑をおかけしました。本当にすいません」

魔界魔「ここいらでこのコーナーは終わりだ次回もまたよろしく！！」

１６話：黒い真実（後書き）

ネプテューヌ「最近、私の出番が無いんだよ！！」

魔界魔「今回はあの３人メインだからな」

ネプテューヌ「次回の長編こそ私は目立ってみせるよ！！」

魔界魔「次回の長編の前に短編挟むからな、それに短編から禁書キャラやオリキャラをどんどん参加させるから。」

ネプテューヌ「ねぷっ！！私の出番がまた減るの！？」

魔界魔「大丈夫だ出番が一応だが考えてある。」

ネプテューヌ「次回からはシェアクリスタル集め！？」

魔界魔「また次回もよろしくな」

17話：白い幻想と黒い魔剣

＊

～ステージ25：マグフレイム火山～

ここはステージ25のマグフレイム火山、その名の通り火山であるが、山はとても大きくて頂上が地面からでは見えない程の高さであった、そしてここの火口の中にシェアクリスタルがあると聞き女神様御一考はこのマグフレイム火山に来ていた。

＊

当麻「ここが火口の入口か…」

ベール「おそらく…それにしても暑いですわね。」

ネプギア「はい…さすがにこんなに暑いとちょっと…」

当麻「ああもう！暑い暑い言うなよ！こっちだって暑いんだからさ！！」

暑いせいでイライラしているのか当麻は怒鳴り声でネプギアとベールを一喝した、ついでに3人は山を上っていたら1年はかかるらしいので、魔界魔の力を借りて火口入口付近までワープしてもらったと言うのだ、とにかくなんやかんだで3人は火口入口にいる。

ネプギア「それにしてもこうもあっさり火口に着くなんて…作者の力ってすごいですね。」

当麻「ああ、俺も最初は思いっきり作者をなめてたけどな。」

ベール「でも今回の事件の元凶でもあるし、素直には褒めたくないですわよね…」

当麻「さてと…3つの内二つは魔界魔が回収するって言っているからこっちもとっとと回収しようぜ」

上条達は火口の中に足を踏み入れる、しかし彼らは知らなかった、ここで起きる出来事が上条の運命を大きく変えてしまうかもしれない事に……

＊

～マグフレイム火山：火口～

ここはマグフレイム火山の火口、中は自然の物とは思えない程複雑に作られており、針の様に突き出た岩山やドロドロと流れる赤き溶岩に〇ラビモスや〇サルモスでも出てきそうな地帯が彼等の目には写っていた。

当麻「…火口の中は外よりもっと暑いな…このままじゃ熱中症で倒れちまいそうだ…」

ネプギア「私もここまで暑いとは思いませんでした…早くシェアクリスタルを探して帰ってシャワーでも浴びたいですね…」

ベール「そんな事してる暇はありませんわよ、早くシェアクリスタルを探してゲームをやらないと。」

当麻「おーい、ベールさん自分の願望が混じってますよ～」

ベールは当麻の言う事を見事にスルーして足を進める、こんな暑い場所にいては倒れてしまう、これは誰もが思っている事だろう、それでも3人はどんどん進める

ベール（……なんでしょう、嫌な予感がしますわ…）

ベールは歩きながらも人知れず思ったのであった、それが的中するとも知らずに…

～マグフレイム火口・奥地～

複雑な道ではあったが無事に奥地にたどり着いた上条達女神御一行、後はシェアクリスタルを探すだけ…そう思い3人はシェアクリスタルを探し始めたのだが…

当麻「なんだか今日はサクサク進むよな…気のせいか？」

ネプギア「大方の予想では作者の都合じゃないですか？」

当麻「うん、ネプギアはよくメタ発言を口から出すよね。」

ネプギア「固い事を気にしたら負けですよ当麻さん。」

そんな会話を繰り広げていた上条とネプギア、すると一人黙っていたベールが突如何かを察知したのか下らない会話をしている二人を方を向き慌ててこう言い放った。

ベール「二人共、上から何か来ます！避けて！」

上条・ネプギア「上？」

上条とネプギアが天井を見ると、そこにいたのは○ンスターハンターに出てくる○ィガレックスの赤色が天井に張り付いていた。

上条「ちょっと待て！あれって○ンスターハンターに出てくる○ィガレックスを赤くした奴だろ絶対！つーかなんで天井に張り付いてんだ！？」

上条がそんな事を言って突っ込みをかますと今度はそのレッドティガが3人のいる地点目掛けて落下してきた。

ネプギア「こっちに落ちてきます！」

上条「逃げるぞネプギア！、ベールも」

ベール「たしかに相手にしてる暇もありませんし…」

三人が逃走を始めるがレッドティガがそれを許さなかった。

ドガアアアアアン！！！

レッドティガが巨大な岩を投げてきて彼らの進行ルートと逃走ルートを塞いでしまったのだ、そのせいで進む事み逃げる事もできなくなった三人は慌てる。

上条「くそ、道を完全に塞がれた！」

ネプギア「早く岩を破壊しないと……」

困っている三人は次の行動に悩む、しかしレッドティガがこっちに迫っている為に悩んでいる暇も無い、すると上条がレッドティガの方を向きそのままネプギアとベールにこう言い放つ。

上条「ネプギアとベール先生は先に行ってくれ、俺が女神化して岩を破壊するからその間にシェアクリスタルを頼む。」

ネプギア「でも当麻さんは魔剣の呪いが……」

上条「だからこの戦いで魔剣を克服するんだよ、できるかわかんないけど。」

当麻の意見に賛成できないネプギアだったがベールは賛成した。

ベール「…それがいいですわね、ここで魔剣の呪いを克服して完全な女神化を図るいい機会かもしれませんし…それなら早く実行しましょう。」

上条「ああ、行くぜプロセッサユニットセット！！」

すると上条の姿は光に包まれ世界を救った女神への変身を遂げる。

イマジンハート「なんやかんで変身完了！さっそく大切断切り！」
するとイマジンハートがブレイブソードで岩を簡単に真ッ二つにする、そしてネプギアとベールは先に進む、そしてそれを追いかけようとするレッドティガだがそれをイマジンハートによって阻まれる。
イマジンハート「ここから先には進ませないわよ。」
そしてこの戦いが上条の運命を大きく変える事になる……

＊

レッドティガ「ガアアアアアアア！！！」
レッドティガは〇ィガレックス得意の突進を繰り出してくる、だがイマジンハートはそれを軽く避け、反撃する。
イマジンハート「尻尾ががら空きよ、せい！」
するとイマジンハートは簡単に尻尾を切断する、レッドティガは尻尾を切断され痛みで地面でもがく。
イマジンハート（見た目に関して弱いのかしらこのモンスター……でもこれなら……）
するとイマジンハートは静かに目を閉じる、すると魔法陣が展開されイマジンハートの手に一本の刀が現れる、その刀の刀身は磨いても光を見せないほど黒き刀身を持つ刀だった。

イマジンハート（ぐっ…この刀を持つと……様々な感情が流れこんでくる……）

イマジンハートの頭に流れる憤怒・絶望・破壊・憎悪・失念の感情はイマジンハートの心を黒く染め始めていく、そしてイマジンハートの目が紫色に変わる、しかしこれは善の心が喰われる第一症状に過ぎない。

イマジンハート（ヤバイ…どんどん意識が……）

予想以上に黒く重い感情に沈みそうになるイマジンハート、一瞬でも気を抜けば魔剣に意識に飲まれそうになってしまう、だがそうしている間にもレッドティガは冷静を取り戻しイマジンハートに剛の牙を向き突進してくる、それに気付いたイマジンハートだが避ける暇も無い。

イマジンハート（こっちに避ける暇なんて――――）

ドカン！

そう考えている内にレッドティガの重く痛い一撃を喰らう、イマジンハートは吹き飛ばされるがどうにかしてふんばり態勢を取り戻す、だがまたレッドティガをこっちに剛の牙を向け突進してくる、そしてそれをなんとか避け続けるイマジンハート

イマジンハート（もしこのまま攻撃を受けていたら溶岩に押し出されて死んでしまう…でも魔剣に感情を飲み込まれてしまったら意味が無い！）

いまだ魔剣を感情を飲み込まれずにふんばるのが一生懸命でレッドティガを相手している暇なんて無い、だがこのまま攻撃を受け続けていてもいずれか溶岩に押し出され屍一つ残らずに死んでしまう。

イマジンハート（どうしよう……このままじゃ…）

戦いでは冷静な上条当麻もといイマジンハートが見せる焦っている感情がイマジンハートの冷静に思考と戦いの集中を乱していく。

レッドティガ「ガアアアアアアア！！！！」

すると今度は後ろからレッドティガが突進してくる、しかし今度の攻撃には反応できずにまともに攻撃を受けてしまい、さらには手から刀が離れてしまう。

イマジンハート「しまった！刀が……」

イマジンハートは攻撃を受けてなおなんとか立ち上がり魔剣を取りにいく、だがそれをレッドティガが阻み今度は刀の様にするどい手でイマジンハートを斬りつける。

ザシュ！！

イマジンハート「ぐふっ……腹が……」

腹を切り裂かれ腹から横一閃に綺麗に血が出る、イマジンハートは態勢を整えようとするがレッドティガは巨大な足でイマジンハートの腹目掛けて放つ、まさかの連続攻撃に反応できずに一撃をもらうイマジンハート

ゴン！！という轟音が響く、それと同時にイマジンハートの体が火

口のゴツゴツした壁に激突する。
そしてそのまま力無く地面に叩きつけられたイマジンハートは意識はあったが連続攻撃によってう受けた痛みによる体の麻痺により動け無くなっていた。

レッドティガ「ガアアアアアアア！！」

イマジンハート（このままじゃ……やられる……）

――――力がほしいか？

イマジンハート（……この声は一体…？）

すると突然にある言葉がイマジンハートの頭に響く、黒く重々しい雰囲気を放っていた言葉だった。そして響いてくる声はどんどん大きくなっていった。

――――善の心と身代りに我が力を貸してやろう……。

イマジンハート（この声は…まさか…魔剣？）

この声はどんどんイマジンハートの正常な感情を黒く染め始めていく。

――――死ぬのが嫌なら力で示せ、さすればお前はもっと巨大な

力を手に入れられる。

イマジンハート「巨大な……力……」

――――そうだ、幻想殺し（イマジンブレイカー）と女神の力の他に大きな負の力だ…

イマジンハート（……）

――――破壊を快楽とせよ、私の新たな持ちぬしはお前なのだ…

イマジンハート「…あなたは…一体……」

――――漆黒（ゼロ）ノ太刀（ブレイド）……犯罪神マジュコンヌが造りし刀だ…覚えておけ。

イマジンハート（…なんだろう…意識が……だんだん遠のいていく……）

そしてここでイマジンハートは気を失った、暗く重く何も見えない絶望の中で……

＊

ここは黒い様々な物が埋め尽くされた部屋、そして部屋の壁や天井の色は白い部屋。
置かれている物と周りの背景な色は決して交わりあわない色だった。
一言で言うと、光と闇。
そして上条当麻はこの白い部屋にいた。何時いたのかは本人にも分からない、ただわかるのは気がついたらここにいた、そして最後にレッドティガとの戦闘中に語りかけてきた謎の重々しき言葉。

???「やっと来たのね」

突然声をかけられ驚きながらも声がした方を振り向く上条当麻、そして振り向いた方にたっていた人物は上条当麻の見知った相手だった。

———黒く長い長髪
———黄色の瞳
———自分と同じくくらいの背
———そしてバランスのいい体
———手に持つ黒き刀
———レオタードの様な黒い衣装

???「ここは学園都市でもゲイム業界でも無い精神の隔離世界だからここでの話しが漏れる事は無いわよ、安心して。」

上条「それじゃ…俺はどうしてその精神世界に……そもそも誰の精神世界だ？」

???「分かりきった事を言わないでよ、ここに私がいるって事は

誰の精神かは単純明快でしょ。」
女性は上条にそう吐き捨てて言い放つ。
上条「やっぱり……俺自身の精神世界か？……それにその姿は……」
？？？「そ、私はあなたの女神時の姿、名はえっと…イマジンハートと言ったわね。」
上条「…わからない事ばかりだ、いきなり精神世界とかいう意味がわからない所にいるし、あの赤い〇ィガレックスはどうなったのか気になるし…」
上条当麻は頭を抱える、しかし一方で幻想の女神はニヤニヤと意地悪な笑いをしている、まるで神が人間を口で弄ぶように…
イマジンハート「まず一から説明しなければならないわね、とりあえずそこに黒い椅子にでも座りなさい、長い話になりそうだしあの青いコートを着た人物と同じ様に長い話になるのは覚悟してね。」

＊

ネプギア「回収完了ですね……後は当麻さんの所に戻ってここから出ましょう。」
ベール「はい……おそらく当麻さんなら負ける心配はありませんし…早く戻りたいですわ。」

マグフレイム火山の火口の深き部分、要するに最下層にて二人はシェアクリスタルの回収を無事に終えて手に持っていたシェア回収アイテムのSギアをポケットにしまいながら言った。

ネプギア「それにしても不思議な道具ですね…この携帯…じゃなくてSギア。」

ベール「ええ、一体どうやってこの道具を開発したかですわね…。」

ネプギア「それよりも早く戻りましょう。私達が回収するシェアクリスタルは一つだけですよね。後二つは魔界魔さんが回収するとか…。」

ベール「ええ、だから私達も晴れてここから出られますわね。」

ネプギア「……ベールさん、どうやら簡単には出られないようですよ。…あれ」

ベールは頭に？のマークを浮かべながらネプギアが指指す方を向く。
回りに溶岩が渦巻く孤立した巨岩の上
そこに一人の男性が立っていた、緑の帽子に緑の服とここにいるのには似合わない色だ。
そしてそこに立っていた男性は突如右手から剣を出現させて自分の真正面にいる二人の女性に放つ。
狙われたのはモンスターでも人間でも無い、女神だ。

ネプギア「火炎斬！！」

カキン！！と金属と金属がぶつかりあう音が火口に響く

ネプギアは炎の纏いし剣で飛んできた剣を叩き落した。

ベール「ネプギア！大丈夫ですか！」

ネプギア「はい…なんとか…それにしてもあの男は一体…」

すると緑で体を包んだ妖精のような男性は孤立した巨岩から二人が今踏んでいる地面に降り立つ。

そして誰に向けられたのかわからないが二人にも聞こえる声でただ言い放った。

???「私が今いる地面に冷酷で残酷な『破壊』を起こしてください、生贄は飴玉一つ」

緑の男は白い飴玉をドロドロと流れる溶岩に一粒だめ落とした、すると3人が立っている地面が赤くひび割れはじめる、そして地面は跡形も無く消え去った、二人は避けたがただ一人だけ地面に立っている人物がいた。

それはさっきの攻撃で『破壊』を起こした人物、そして女神化したベールとネプギアは異質な雰囲気を放つ彼の警戒をしていた。そして緑の男は口を開く

???「私の名前はシエラ＝クリストフ、学園都市敵対魔術組織の一人『ピエログリフ』のメンバー、以後お見知りおきを。」

ゲイム業界質問コーナー

魔界魔「さてさて始まってなんだけど質問コーナー行くぞ」

上条「今日は随分慌ててるんだな、どうしたんだ？」

魔界魔「お前が知る必要は無い！さて最初の質問はＰ・Ｎボス相手にザキを繰り返す兵士からの質問」

上条「明らかにＰ：Ｎがおかしいような気がする。」

質問：はっきりいって上条さんが使う女神の腕輪を量産してアイエフとかに与えてやれば簡単にマジュコンヌ四天王に勝てたんじゃないですか？

上条「俺も一瞬だけ思ってたな、そういえば」

魔界魔「さてとこの質問に関しては俺が返答しよう。まず女神の腕輪は一つ作るのにも金が莫大に掛かるんです大体１億クレジットくらいだと思う。」

上条「すごい掛かるな！だとしたらこの腕輪は大事ににしないと。」

魔界魔「それに女神の腕輪は普通の人間では使えません、使って時に莫大な負荷が掛かるので普通の人間じゃ内部からエネルギーが暴発して体が崩壊してしまいます。」

上条「…つまり俺はこの右手（イマジンブレイカー）でその内部からのエネルギー暴発を抑えているから女神化できんのか？」

魔界魔「ああ、だからイストワールはお前には女神の腕輪を使えるとでも思ったんじゃないか？」

上条「すごいなイーすん。」

魔界魔「さて早いが最後の質問だ。」

質問：上条さんは新約3巻にてハワイで頑張っていますが何か一言を

魔界魔「P・Nオモカデからの質問だ」

上条「がんばれよあっちの俺！応援してるからな！」

魔界魔「だとよ、さて今回はここまでだ次回もよろしくな！」

17話：白い幻想と黒い魔剣（後書き）

魔界魔「まさかの魔術師が乱入か！？」

ネプテューヌ「大丈夫だよ！ベールもネプギアも負けないよ！」

魔界魔「そして精神世界での会話か…どうなるのやら」

ネプテューヌ「次回もよろしく！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4943x/

とある女神の上条当麻ー後日談ストーリー

2011年12月11日12時52分発行